福岡市埋蔵文化財調査報告書第1011集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群 11

－第23･30･36次調査報告－

2 0 0 8

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1011集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群 11

-第23･30･36次調査報告-

調査略号	M0T-23
調査番号	0019
調査略号	M0T-30
調査番号	0240
調査略号	M0T-36
調査番号	0341

2008

福岡市教育委員会

①経塚古墳　②金尿古墳　③塩除古墳　④石ヶ原古墳　⑤石ヶ元古墳群

元岡・桑原遺跡群全景（北東から）（航空写真）

調査及び試掘調査地点全景（北東から）（航空写真）

①瓦窯　②瓦溜溝　③製鉄遺構

G地区試掘調査地点全景（北東から）（航空写真）

第 30 次調査全景（東から）（航空写真）

1　経塚古墳全景　北東から

2　経塚古墳全景　北西から

1 墳丘Ⅳ区　旧表土検出状況

2 墳丘Ⅱ区地割り線Ｃ　北東から

序

アジアの玄関口である福岡市は、古来から対外交渉の門戸として栄えてきました。このことを物語るように、市内には数多くの遺跡が残されています。

福岡市は現在、歴史的・地理的の関係の深い国々と連携し「アジアの交流都市」を目指しています。アジアの色々な地域と学術･文化･産業･環境など様々な分野で交流を図っています。

九州大学は、「時代の変化に応じて自立的に変革し、活力を維持し続ける開かれた研究大学の構築」を主たる目標に掲げ、箱崎・六本松・春日市原町　地区のキャンパスを統合し世界的レベルで研究・教育拠点を創造するために福岡市西区元岡・桑原地区、前原市、志摩町にまたがる地域に移転し、新キャンパスを建設する事業を進めています。

本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のため協力支援を行うと共に、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地区におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応しております。統合移転地内の埋蔵文化財の発掘調査もこの一環として平成7年度から教育委員会が取り組んでおります。

本書は九州大学統合移転事業に伴い実施した元岡・桑原遺跡群第23・30・36次調査と試掘調査の成果を報告するものです。

最後に調査を委託された福岡市土地開発公社、調査にご協力いただいた九州大学及び都市整備局大学移転対策部、並びに元岡地区・桑原地区の地元の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

平成 20 年 3 月 28 日

福 岡 市 教 育 委 員 会

教育長 山　田　裕　嗣

例　　言

1.　本書は、九州大学統合移転事業に伴い、事前の発掘調査を実施した福岡市西区大字元岡・桑原地区に所在する元岡・桑原遺跡群の発掘調査報告書である。
2.　発掘調査・整理報告に関しては、福岡市土地開発公社と委託契約を締結し、福岡市教育委員会が、2001年に行った元岡・桑原遺跡群第23・30・36次調査の報告書である。
3.　本書で報告する元岡・桑原遺跡群第23・30・36次調査の略号はMOT-23、調査番号0019、MOT-30、調査番号0240、MOT-36、調査番号0341である。
4.　発掘調査で検出した各遺構は、その種類ごとに記号を付し、竪穴住居址をSC、掘立柱建物をSB、溝状遺構をSD、土壙をSK、伏焼土壙をSO、敷石遺構をSX、ピットをPitと表記した。
5.　本書に使用した遺構実測図の作成は、二宮忠司、大庭友子、杉山大輔、西村直人、石橋忠治、水崎るり、吉岡員代、小山不志代、土井良伸、屋山洋が行い、遺物の実測は大庭、名取さつきが行った。トレースは大庭、熊谷幸重が行った。
6.　本書に使用した写真は、航空写真を（株）写測エンジニアと空中写真企画（有）に委託し、他は23・30次を二宮、大庭が、36次を屋山が行った。
7.　本書に使用した座標は国土座標㈱系を使用した。
8.　第23・30・36次調査の執筆及び編集は、屋山、二宮、大庭が行った。
9.　本報告書に関する調査記録・出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。

元岡・桑原遺跡群第23次調査

遺跡調査番号	遺　跡　名	所　在　地	調査年月日	調査対象面積	調 査 面 積
0019	元岡・桑原遺跡群23次	福岡市西区大字桑原・元岡地区	H12.6.10～H13.3.27	150,000㎡	9,106㎡
遺 跡 略 号		分布地図番号	検 出 遺 構		
MTO-23		西部Ⅱ　桑原129	製鉄遺構確認調査、平安時代他包蔵地		

元岡・桑原遺跡群第30次調査

遺跡調査番号	遺　跡　名	所　在　地	調査年月日	調査対象面積	調 査 面 積
0240	元岡・桑原遺跡群30次	福岡市西区大字桑原・元岡外	H14.8.1～H15.10.30	95,675㎡	8,432㎡
遺 跡 略 号		分布地図番号	検 出 遺 構		
MTO-30		西部Ⅱ　桑原129	製鉄遺構、瓦溜確認・試掘調査		

元岡・桑原遺跡群第36次調査

遺跡調査番号	遺　跡　名	所　在　地	調査年月日	調査対象面積	調 査 面 積
0341	元岡・桑原遺跡群36次	福岡市西区大字桑原字牛坂	H15.9.1～H17.3.31	8,000㎡	8,000㎡
遺 跡 略 号		分布地図番号	検 出 遺 構		
MTO-36		西部Ⅱ　桑原129	古墳、古代～中世敷石遺構、江戸時代～現代墓		

本文目次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
1 調査に至る経緯 …… 1
2 調査組織 …… 1
3 製鉄遺構の確認調査と第Ⅰ工区の未試掘及び踏査 …… 7
第Ⅱ章調査の記録 …… 9
第23次調査 …… 9
試掘調査 …… 13
1) 試掘・立会 …… 13
2) D-8地点 …… 13
3) C-2地点 …… 21
4) E-2地点 …… 25
5) 出土遺物 …… 33
第30次調査 …… 35
G地区試掘調査 …… 41
第36次調査 …… 51
1 調査の概要 …… 53
2 調査の記録 …… 55
3 小結 …… 74

挿図目次

Fig.1　元岡・桑原遺跡群位置図（縮尺1/50,000） …… 2
Fig.2　元岡・桑原遺跡群と周辺遺跡（縮尺1/25,000） …… 3
Fig.3　元岡・桑原遺跡群（縮尺1/12,000） …… 4
Fig.4　九州大学統合移転地図 …… 6
Fig.5　第23次調査試掘トレンチ位置図（縮尺1/10,000） …… 10
Fig.6　D-8地点製鉄遺構確認調査位置図（縮尺1/2,000） …… 11
Fig.7　製鉄遺構確認調査（D-8-1・2地点）全体図（縮尺1/500） …… 12
Fig.8　D-8-1地点土層断面図-1（縮尺1/80） …… 14
Fig.9　D-8-1地点土層断面図-2（縮尺1/80） …… 15
Fig.10　D-8-2地点平面・コンタ図（縮尺1/400） …… 16
Fig.11　D-8-2地点土層断面図（縮尺1/100） …… 17
Fig.12　D-8地点試掘調査-1土層断面図-1（縮尺1/40） …… 18
Fig.13　D-8地点試掘調査-1土層断面図-2（縮尺1/40,1/80） …… 19
Fig.14　C-2地点位置図（縮尺1/2,000） …… 22
Fig.15　C-2地点遺構配置図とコンタ図（縮尺1/400） …… 23
Fig.16　溝状遺構と伏焼土壙実測図（縮尺1/20,1/40） …… 24
Fig.17　E-2（23次）・30次調査配置図（縮尺1/1,500） …… 25

Fig.18　E-2（23次）調査配置図（縮尺1/2,000）…… 26
Fig.19　E-2（23次）調査遺構配置図とコンタ図（縮尺1/800）…… 27
Fig.20　E-2（23次）調査土層断面図（縮尺1/100）…… 28
Fig.21　E-2（23次）調査伏焼土壙平面・断面図-1（縮尺1/20）…… 29
Fig.22　E-2（23次）調査伏焼土壙平面・断面図-2（縮尺1/20）…… 30
Fig.23　23次調査出土遺物実測図-1（縮尺1/1,1/3）…… 31
Fig.24　23次調査出土遺物実測図-2（縮尺1/3）…… 32
Fig.25　30次調査遺構配置図とコンタ図（縮尺1/600）…… 38
Fig.26　30次調査伏焼土壙平面・断面図-1（縮尺1/20）…… 39
Fig.27　30次調査伏焼土壙平面・断面図-2（縮尺1/20）…… 40
Fig.28　G-3地区試掘トレンチ配置図（縮尺1/2,000）…… 42
Fig.29　第7トレンチ拡張区遺構配置図（縮尺1/200）…… 43
Fig.30　第1～3トレンチの土層断面図（縮尺1/200）…… 45
Fig.31　第4,6,7トレンチの土層断面図（縮尺1/200）…… 47
Fig.32　第8～10トレンチの土層断面図（縮尺1/200）…… 48
Fig.33　第11～13トレンチの土層断面図（縮尺1/200）…… 49
Fig.34　第14トレンチの土層断面図（縮尺1/200）…… 50
Fig.35　第36次調査地点位置図（縮尺1/8,000）…… 53
Fig.36　第36次調査区周辺図（縮尺1/4,000）…… 54
Fig.37　第36次調査区現況測量図（縮尺1/1,000）…… 54
Fig.38　墳丘現況測量図（縮尺1/400）…… 55
Fig.39　墳丘測量図（縮尺1/200）…… 56
Fig.40　葺石割付図（縮尺1/200）…… 57
Fig.41　墳頂部配石実測図（縮尺1/50）……折り込み
Fig.42　頂部立石実測図（縮尺1/30）…… 60
Fig.43　トレンチ土層図（縮尺1/50）…… 61
Fig.44　頂部敷石遺構実測図1（縮尺1/30）…… 62
Fig.45　頂部敷石遺構実測図2（縮尺1/30）…… 63
Fig.46　頂部敷石遺構実測図3（縮尺1/30）…… 64
Fig.47　頂部敷石遺構実測図4（縮尺1/30）…… 65
Fig.48　頂部敷石遺構実測図5（縮尺1/30）…… 66
Fig.49　頂部敷石遺構実測図6（縮尺1/30）…… 67
Fig.50　家型埴輪実測図（縮尺1/3）…… 69
Fig.51　遺物実測図1（縮尺1/3）…… 70
Fig.52　遺物実測図2（縮尺1/3）…… 71
Fig.53　遺物実測図3（縮尺1/3）…… 72
Fig.54　墳丘復元図（縮尺1/200）…… 73

巻 頭 図 版 目 次

1　元岡・桑原遺跡群全景（北東から）（航空写真）
2　調査及び試掘調査地点全景（北東から）（航空写真）
3　G地区試掘調査地点（北東から）（航空写真）
4　第30次調査区全景（東から）（航空写真）
5　1.経塚古墳全景（北東から）　2.経塚古墳全景（北西から）
6　1.墳丘Ⅳ区　旧表土検出状況　2.墳丘Ⅱ区　地割り線C（北東から）

図　版　目　次

PL.1　1　23次（E-2地区）全景（西から）　2　23次（E-2地区）全景（北東から）
3　23次（E-2地区）全景（西から）　4　23次（E-2地区）Pit群（北東から）
5　23次（E-2地区）Pit群（南東から）　6　23次（E-2地区）Pit群（南東から）
7　23次（E-2地区）Pit群（南東から）　8　23次（E-2地区）北東側土層断面（南西から）
PL.2　1　23次（E-2地区）SO-1～3　2　23次（E-2地区）SO-1～3（北から）
3　23次（E-2地区）SO-2（北から）　4　23次（E-2地区）SO-1（北西から）
5　23次（E-2地区）SO-2近景　（北から）　6　23次（E-2地区）SO-2（北から）
7　23次（E-2地区）SO-3（北西から）　8　23次（E-2地区）SO-3（北西から）
PL.3　1　23次（E-2地区）SO-4（北東から）　2　23次（E-2地区）SO-5～7 遠景（南から）
3　23次（E-2地区）SO-5（南から）　4　23次（E-2地区）SO-6・7　（南から）
5　23次（E-2地区）SO-8 遠景（南から）　6　23次（E-2地区）SO-8近景（南から）
7　30次　全景（西から）　8　30次 全景（東から）
PL.4　1　30次SO-1　2　30次SO-7
3　30次SO-2　4　30次SO-3
5　30次SO-4　6　30次SO-5
7　30次SO-6
PL.5　1　D-8-1 上　全景（南西から）　2　D-8-1 上　全景（北東から）
3　D-8-1 上 土層 全景（南から）　4　D-8-1 上 土層 部分（南から）
5　D-8-1 上 土層 部分（南から）　6　D-8-1 上 土層 部分（南から）
7　D-8-1 下 土層 部分（南から）　8　D-8-1 下 土層 断面（東から）
PL.6　1　D-8-2 全景（東から）　2　D-8-2 全景（西から）
3　D-8-2 全景（北東から）　4　D-8-2 南側土層（北から）
5　D-8-2 南側土層（北から）　6　D-8-2 南側土層（北から）
7　D-8-2試掘（南から）　8　D-8-2試掘GTL中央部（東から）
PL.7　1　C-2地区全景（北東から）　2　C-2地区全景（北から）
3　C-2地区谷部全景（北東から）　4　C-2地区SX-001土層断面（北から）
5　C-2地区全景（南から）　6　C-2地区西半分全景（SO-1・2）（東から）
7　C-2地区SO-1土層断面（北から）　8　C-2地区SO-1全景（東から）
PL.8　1　C-2地区SO-1近景（東から）　2　C-2地区SO-2近景（東から）
3　C-2地区SO-2近景（東から）　4　C-2地区SO-2近景（南から）
5　試掘調査遠景石ヶ元（古墳の有無 ）　6　試掘調査遠景千原地区
7　試掘調査石ヶ元切通部分　8　試掘調査遠景石ヶ元（古墳の有無）

PL.9　1　古墳確認試掘-6　2　試掘-3　3　試掘-2　4　試掘-3
5　試掘-2　6　試掘-3　7　試掘-2　8　試掘-5古墳確認
PL.10 1　試掘-6　2　試掘-6　3　E地区踏査　4 試掘E地区
5　G-3地区試掘 1TL　6　G-3地区試掘 1TL　7　G-3地区試掘 1TL　8　G-3地区試掘 2TL
PL.11 1　G-3地区試掘 2TL　2　G-3地区試掘 2TL　3　G-3地区試掘 3TL　4　G-3地区試掘 3TL
5　G-3地区試掘 3TL　6　G-3地区試掘 4TL　7　G-3地区試掘 4TL　8　G-3地区試掘 4TL
PL.12 1　G-3地区試掘 4TL　2　G-3地区試掘 6TL　3　G-3地区試掘 6TL　4　G-3地区試掘 6TL
5　G-3地区試掘 7TL　6　G-3地区試掘 7TL　7　G-3地区試掘 7TL　8　G-3地区試掘 7TL
PL.13 1　G-3地区試掘 7TL　2　G-3地区試掘 7TL　3　G-3地区試掘 7TL　4　G-3地区試掘 7TL
5　G-3地区試掘 7TL　6　G-3地区試掘 7TL　7　G-3地区試掘 7TL　8　G-3地区試掘 7TL 拡張区
PL.14 1　G-3地区試掘7TL 拡張区　2　G-3地区試掘 7TL 拡張区　3　G-3地区試掘 7TL 拡張区
4　G-3地区試掘7TL 拡張区　5　G-3地区試掘 7TL 拡張区　6　G-3地区試掘 7TL 拡張区
7　G-3地区試掘7TL 拡張区　8　G-3地区試掘 7TL 拡張区
PL.15 1　G-3地区試掘7TL 拡張区　2　G-3地区試掘 7TL 拡張区　3　G-3地区試掘 7TL 拡張区
4　G-3地区試掘7TL 拡張区　5　G-3地区試掘 7TL 拡張区　6　G-3地区試掘 8TL
7　G-3地区試掘 8TL　8　G-3地区試掘 9TL
PL.16 1　G-3地区試掘 9TL　2　G-3地区試掘 9TL　3　G-3地区試掘 9TL　4　G-3地区試掘 10TL
5　G-3地区試掘 10TL　6　G-3地区試掘 10TL　7　G-3地区試掘 10TL　8　G-3地区試掘 10TL
PL.17 1　G-3地区試掘 10TL　2　G-3地区試掘11TL　3　G-3地区試掘 11TL　4　G-3地区試掘 11TL
5　G-3地区試掘 11TL　6　G-3地区試掘11TL　7　G-3地区試掘 11TL　8　G-3地区試掘 11TL
PL.18 1　G-3地区試掘 12TL　2　G-3地区試掘12TL　3　G-3地区試掘12TL 拡張区
4　G-3地区試掘 12TL拡張区　5　G-3地区試掘 12TL　6　G-3地区試掘 12TL
7　G-3地区試掘 12TL　8　G-3地区試掘12TL
PL.19 1　G-3地区試掘 13TL　2　G-3地区試掘 13TL　3　G-3地区試掘 13TL　4　G-3地区試掘 13TL
5　G-3地区試掘 13TL　6　G-3地区試掘 14TL　7　G-3地区試掘 14TL　8　G-3地区試掘 14TL
PL.20　23次調査出土遺物
PL.21 1　第36次調査前全景　2　36次全景
PL.22 1　経塚古墳調査前遠景　2　36次調査前全景　3　経塚古墳調査前全景　4　墳頂部立石
5　墳頂部　南側立石　6　墳頂部　北側立石
PL.23 1　経塚古墳調査前　2　経塚墳頂から今津方面　3　調査前葺石露出状況　4　Ⅳ区葺石遺存状況
5　地割り線C　6　Ⅱ区葺石下段
PL.24 1　経塚古墳全景　2　経塚古墳全景　3　墳頂部　4　経塚古墳墳頂部　5　墳頂部配石　東側部分　6　墳頂　中央部
PL.25 1　東側ベルト葺石出土状況　2　Ⅰ・Ⅱ区葺石出土状況　3　Ⅱ区葺石出土状況　4　墳丘Ⅱ区南半葺石下段
5　墳丘Ⅱ区北半葺石下段　6　墳丘Ⅱ区北端葺石下段
PL.26 1　墳丘Ⅱ区北側下段葺石　2　墳丘北側葺石出土状況　3　経塚古墳　墳丘Ⅲ区葺石下段　4　Ⅱ区葺石上段
5　SX002　6　SX001
PL.27 1　SX003　2　SX004　3　SX005　4　SX006　5　SX007　6　SX008　7　SX009　8　SX010
PL.28 1　SX011　2　SX010・011　3　SX012　4　SX013　5　SX014・015　6　SX014　7　SX015　8　SX016
PL.29 1　SX019　2　SX018（奥）・017（前）　3　SX020　4　SX022　5　SX021
PL.30 1　SX023　2　SX024 北半　3　SX025　4　SX02　5　SX028・029・033
PL.31 1　SX027　2　SX027 下部石組　3　SX030　4　SX031　5　SX033　6　SX034　7　SX036　8　SX037
PL.32 36次出土家型埴輪

第Ⅰ章　はじめに

1　調査に至る経緯

平成６年２月、九州大学から福岡市に新キャンパス大学統合移転用地の取得の依頼があり、同３月、福岡市、九州大学、福岡市土地開発公社は用地取得について覚書の締結がなされた。事業用地は土地開発公社が先行取得し、新キャンパス建設のための造成工事を行うこととなった。造成工事に先立ち、平成７年２月九州大学から福岡市に対して事業用地内埋蔵文化財の事前調査の依頼があったことから、土地開発公社と福岡市の間で委託契約を締結して事業地内の埋蔵文化財の踏査を実施した。平成７年12月、用地の275ha の踏査が終了した。平成８年３月九州大学・福岡市・土地開発公社間で「造成に関する覚書」が締結され、その中で土地開発公社は「事業用地の造成の調査に関して埋蔵文化財調査等を行うものとする」との一項が盛り込まれたことから以後、埋蔵文化財の調査に関しては土地開発公社と福岡市の間で委託契約を締結して事業を進めることとなった。

2　調査組織

調査委託　福岡市土地開発公社

調査主体　福岡市教育委員会

教育長　（現任）山田裕嗣　（前任）植木とみ子　生田征生

文化財部長　（現任）矢野三津夫　（前任）山崎純男　堺徹

庶務・経理　文化財管理課（組織変更により庶務・経理は文化財整備課から文化財管理課へ）

文化財管理課長　（現任）榎本芳治　（前任）平原豪　上村忠明

管理係長　（現任）栗須ひろ子　（前任）　市坪敏郎　井上和光

管理係　（現任）河野寛　鳥越由紀子　鈴木由香　井上繭子　井上幸江　山本朋子

（前任）後藤泰子　中岳圭　岩屋淳美

調査担当埋蔵文化財第2課（組織変更大規模事業担当は埋蔵文化財第2課へ）

埋蔵文化財第2課長　（現任）力武卓治　（前任）二宮忠司　山崎純男

第1係長　（現任）杉山富雄　（前任）池崎譲二

第2係長　（現任）常松幹雄　（前任）米倉秀紀　濱石哲也　松村道博

担当者　（現任）池田祐司　（前任）上角智希　木下博文　屋山洋

菅波正人　吉留秀敏　星野惠美　松浦一之介

小林義彦　久住猛雄

調査補助　大庭友子　小杉山大輔　西村直人　石橋忠治　水崎るり

調査調整　都市整備局大学移転対策部

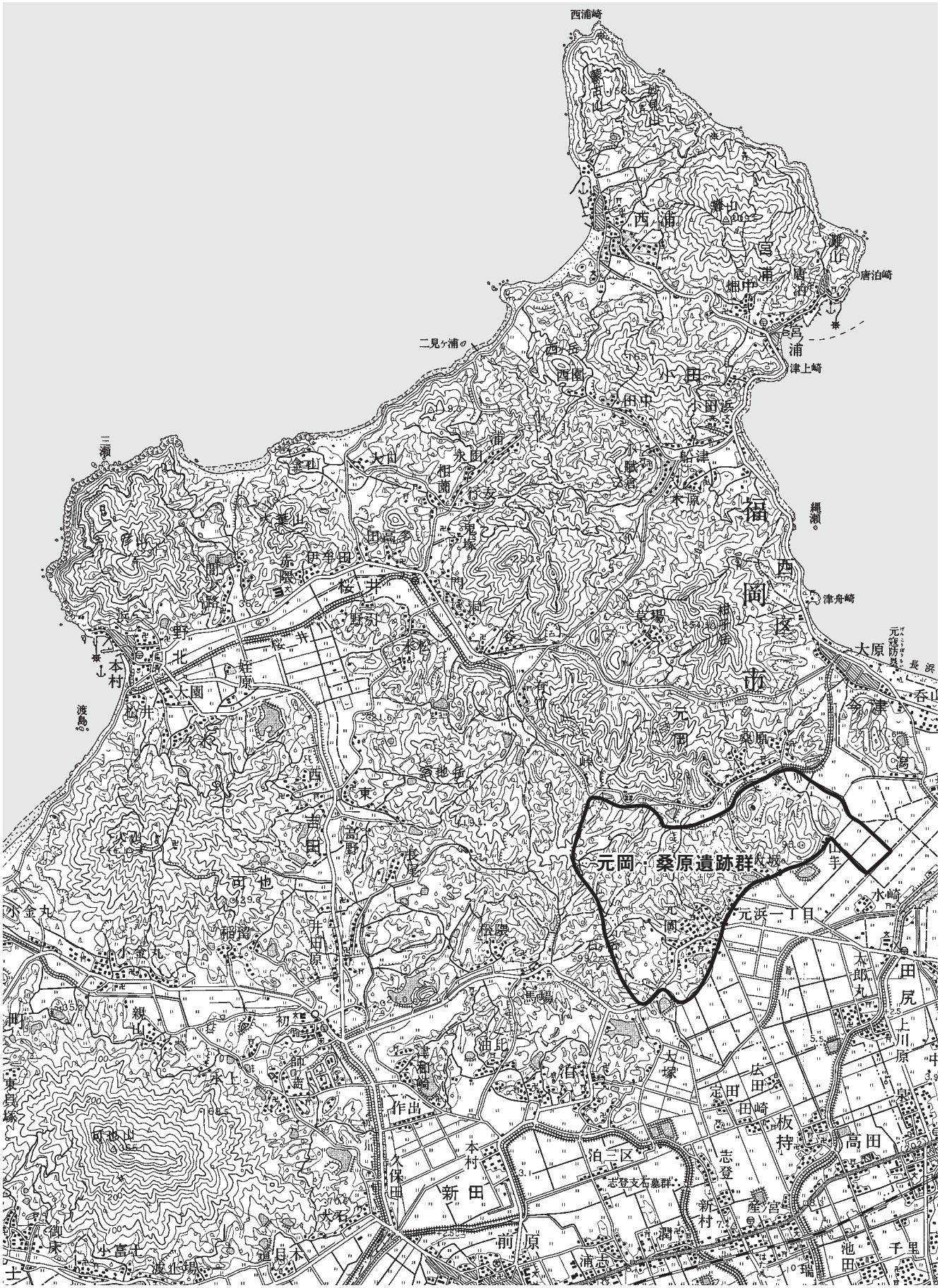


Fig.1　元岡・桑原遺跡群位置図（縮尺 1/50,000）

Fig.2　元岡・桑原遺跡群と周辺遺跡（縮尺 1/25,000）

Fig.3　元岡・桑原遺跡群（縮尺 1/12,000）

3　製鉄遺構の確認調査と第Ⅰ工区の未試掘及び踏査

福岡市土地開発公社より平成12年5月30日付けで製鉄遺構の確認調査と第1工区の試掘調査の依頼を受け平成12年6月10日より調査を開始した。

製鉄遺構確認調査の対象地で、志摩町に属する2ケ所（27ha）に関しては、福岡市が実施した平成7・8年の試掘結果、大字桜井字大峠に遺構を確認しており、元岡・桑原遺跡群の製鉄遺跡との関連も考えられることから、平成12年度に、数回の協議を志摩町及び志摩町教育委員会、九州大学、福岡市土地開発公社、福岡市教育委員会で開き、この部分の調査を志摩町教育委員会に依頼した。

志摩町及び志摩町教育委員会は、快く承諾していただき、平成13年に本格調査を実施され、大峠遺跡として平成15年度に報告されている（志摩町教育委員会発行志摩町文化財調査報告書第22集「大峠遺跡」－九州大学統合用地内の埋蔵文化財の調査 -2003）。

福岡市域は6ケ所を対象とした。2ケ所（第21・24次調査）については本格調査を実施することとし、他の4ケ所の製鉄遺構確認調査を行った。九州大学が再取得された地区にも試掘調査で2ケ所報告されているが、この地点は平成14年度後半期から15年にかけて確認調査を行なった。このほかにも随時、平成8年時に行うことができなかった第1工区の対象区を伐開後に試掘調査した。

平成12年度から九州大学が再取得されたG地区について製鉄遺構確認調査及び本格的な発掘調査について協議を進めてきたが、平成13年度末に協議が整い、平成14年度8月に委託契約が締結し、製鉄遺構確認調査2ケ所、瓦溜の確認調査を実施することとなった。確認調査の結果、第31次調査地点には、瓦留と製鉄遺構が確認され、第32次調査地点には、製鉄遺構は確認できなかったが、古墳時代の住居址等が検出された。これらの地点は次年度から本格調査を実施することで、九州大学、土地開発公社との協議を行ない九州大学との委託契約を締結することとなった。

平成15年度は、第31次調査地点の上部遺構である平安時代の遺構を検出することを目標として調査を4月から開始した。第31・32次調査の報告は、次会に報告する準備を行っているので、今回は割愛することとした。

G-3地区の試掘調査は、平成7・8年度の試掘調査範囲には入っておらず、平成15年6月から協議・地元説明等を行い、7月からG-1地区の北側地区の雑木･竹等の伐開を実施し、搬入道路の整備等を行い、平成15年8月から本格的な試掘調査を開始した。

この他に、第Ⅰ工区部分で、平成7・8年度に試掘調査が行えなかった部分や、伐開後の古墳の有無等に関しても、重機による試掘調査、踏査等を実施し、志摩町との境界部分では、志摩町教育委員会の協力を得て実施した。大峠遺跡の調査及び踏査に関して、志摩町及び教育委員会のご協力を賜った。特に教育委員会の文化体育係主査河村裕一郎氏、主任主事の河合修氏にご苦労かけました。この紙面を借りてお礼申し上げます。

第Ⅰ工区試掘調査及び踏査平成12年6月10日～平成16年2月10日

確認調査の地点及び調査期間

D-8-1地点平成12年6月10日～　平成12年7月10日

D-8-2地点平成12年7月1日～　平成12年8月10日

C-2地点平成12年9月 1日～　平成12年10月7日

E-2地点平成12年10月10日～ 平成13年3月27日

Fig.4　九州大学統合移転地図

元岡・桑原遺跡群第23次調査

第Ⅱ章　調 査 の 記 録

第23次調査

確認調査対象地：福岡市西区大字元岡・桑原地区

調査期間　　：平成 12 年 6 月 10 日～平成 13 年 3 月 27 日

調査面積　　：9,106㎡

調査箇所　　：D-8-1・2,　C-2,　E-2 地点

調査概要

福岡市土地開発公社より平成12年5月30日付けで、製鉄遺構の確認調査と第1工区の踏査・試掘調査の依頼を受け、平成12年6月10日より調査を開始した。

製鉄遺構確認調査の対象地で、志摩町に属する2ケ所に関しては志摩町教育委員会に依頼し、福岡市域の6ケ所を対象とした。2ケ所（第21・24次調査）については遺構が確認されたため、本格調査を実施することとし、他の4ケ所の確認調査を行った。九州大学が再取得された地区にも試掘調査で2ケ所報告されているが、この地点（第31・32次調査）は平成14年度後半期に確認調査を行った。このほかに第1工区における踏査・試掘調査を実施した。第Ⅰ工区部分で、平成7・8年度に試掘調査が行えなかった部分や、伐開後の古墳の有無等に関しても、重機による試掘調査35ケ所、踏査15ケ所等を実施し、志摩町との境界部分では、志摩町教育委員会の協力を得て実施した。

D-8 地点（D-8-1・2）確認調査

調査面積：D-8-1 地点 1,323㎡

調査期間：平成 12 年 6 月 10 日～同 7 月 20 日

調査面積：D-8-2 地点 1,422㎡

調査期間：平成 12 年 7 月 1 日～同 8 月 10 日

試掘調査によると炭化物等が多量に検出されるとのことであったが、対象地の約半分を確認した結果、遺構は検出されなかった。出土遺物は Fig.23 に図示した12点だけである。炭化物は出土したが遺構の検出は確認されなかった。

C-2 地点確認調査

調査面積：C-2地点1,161㎡

調査期間：平成12年9月1日～同10月7日

緑地保全地区であるため、最小限の調査にとどめた。検出された遺構は谷部となる西側斜面に伏焼土坑が2基検出された。出土遺物は、44点出土し、Fig.24 に8点を図示した。

E-2 地点確認調査

調査面積：E-2 地点5,200 ㎡

調査期間：平成12年10月10日～13年3月27日

試掘調査で確認されている土坑を再確認するとともに谷部の5,200㎡を調査した。検出された遺構は中型の伏焼土坑4基、小型の伏焼土坑4基、計8基と柱穴群を検出したが、柱穴群はまとまらず建物にはならなかった。遺物は出土しなかったため時期を決定するにはいたらなかった。

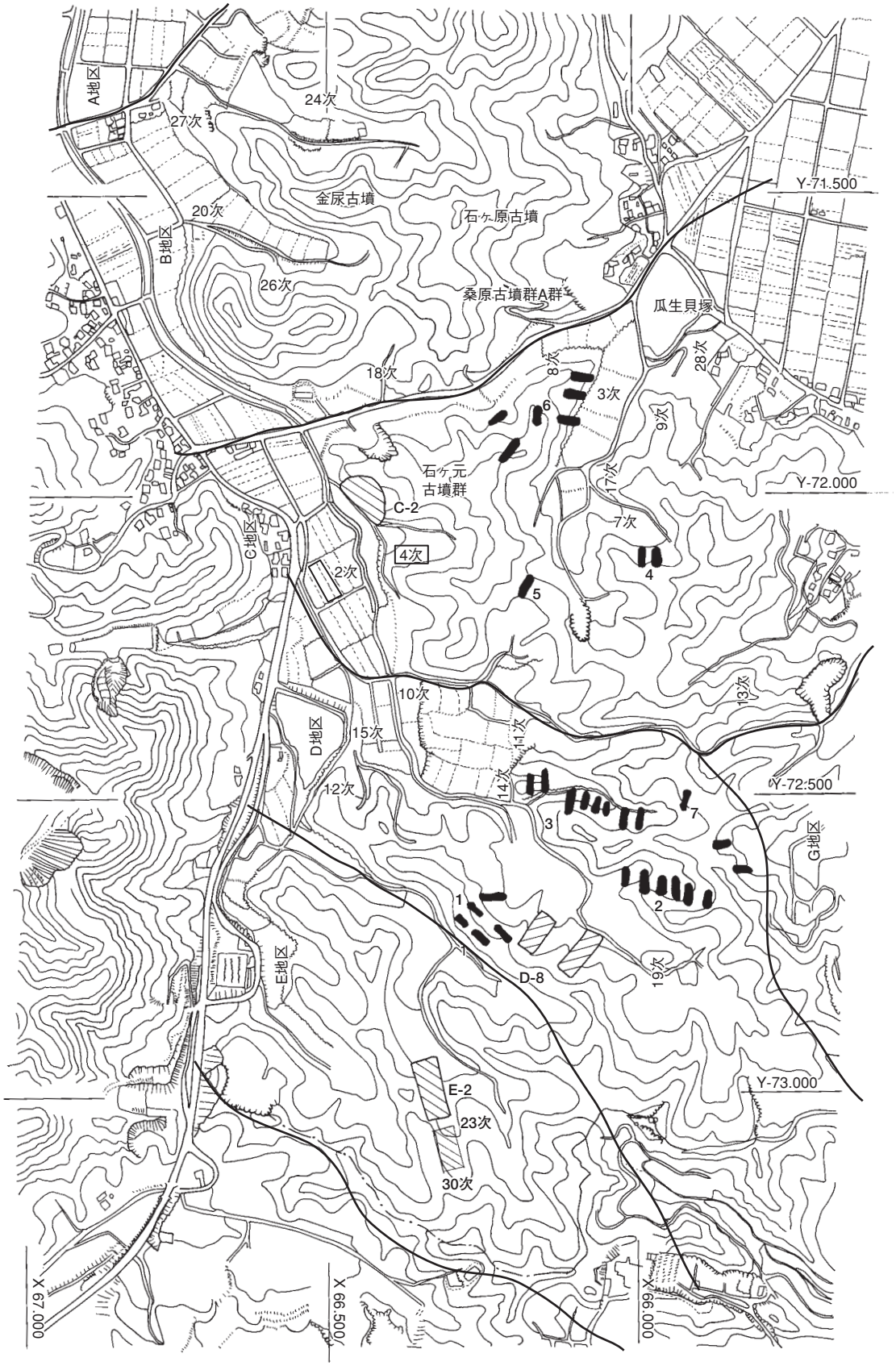


Fig.5　第 23 次調査試掘トレンチ位置図（縮尺 1/10,000）

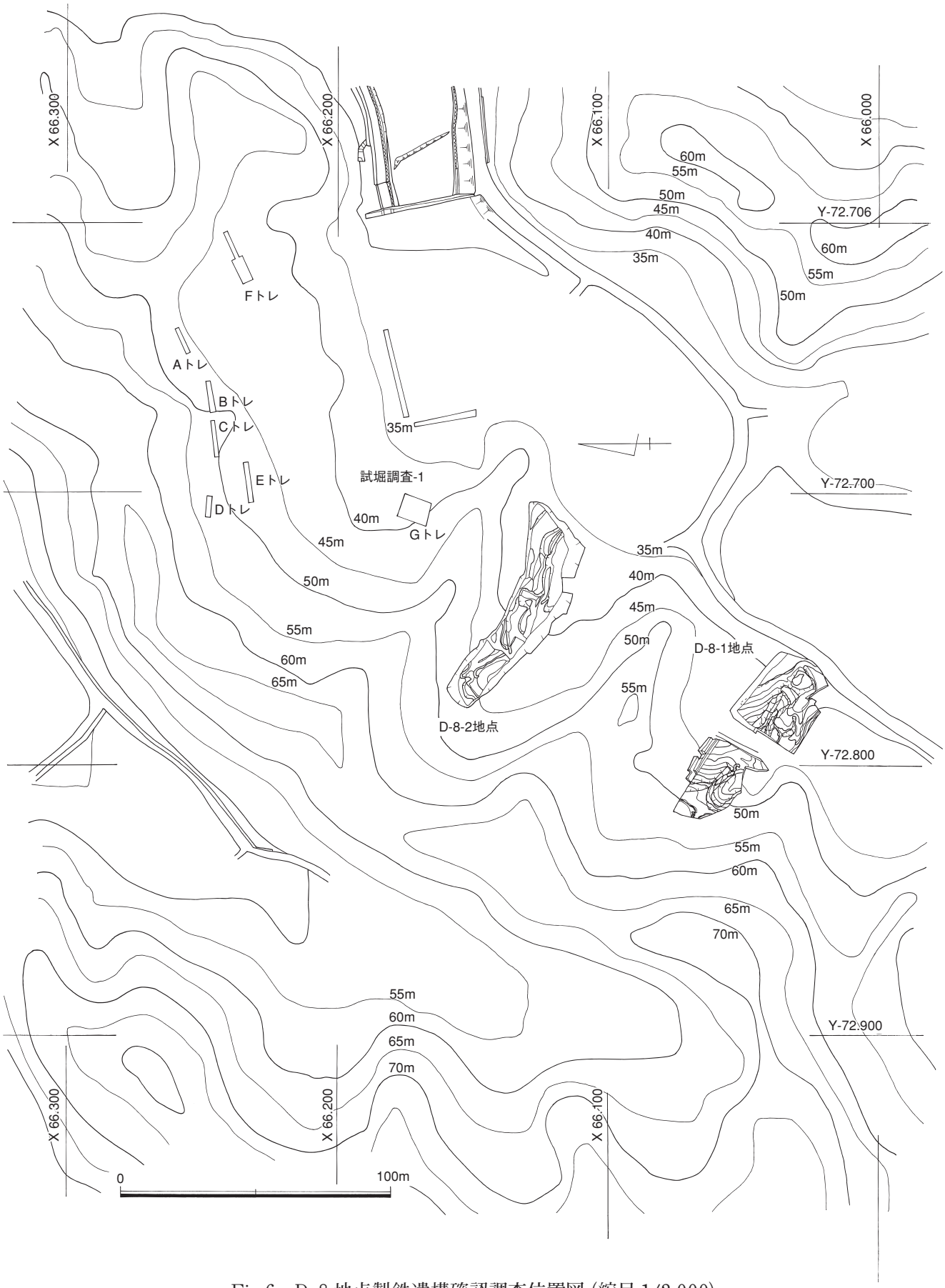


Fig.6　D-8 地点製鉄遺構確認調査位置図（縮尺 1/2,000）

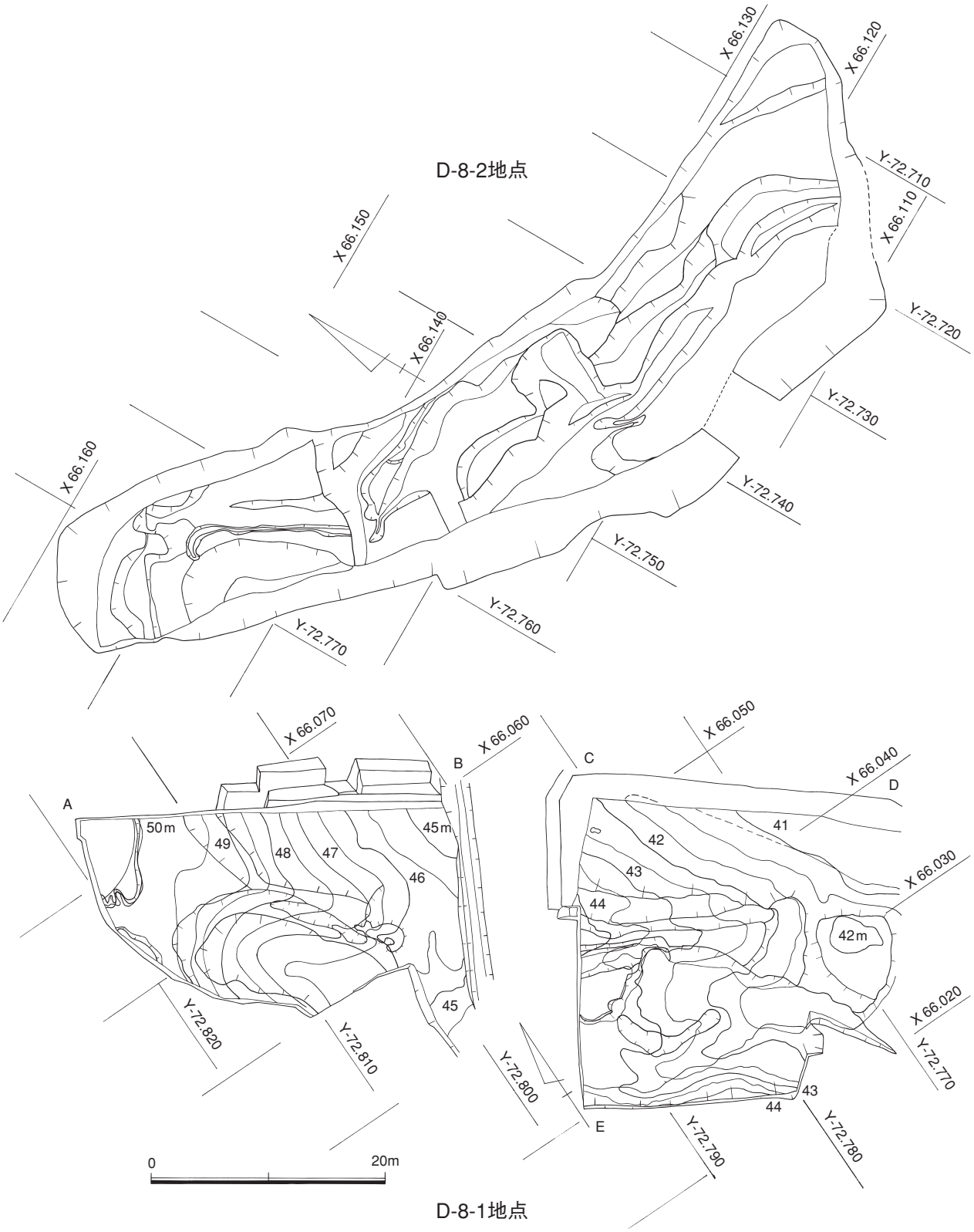


Fig.7　製鉄遺構確認調査（D-8-1・2 地点）全体図（縮尺 1/500）

試掘調査

1 ） 試掘・立会（巻頭図版2 Fig.5 PL.8-5～10-4）

第1工区の未試掘部分（伐採を伴う尾根部及び谷部）について調査を実施した。尾根部については主に立会、谷部については重機による掘削により試掘調査を実施した。

試掘調査対象地：福岡市西区大字桑原・大字元岡地区（Fig.5の黒く塗りつぶした範囲）

調査期間　：平成12年8月11日～平成13年1月29日

調査面積　：試掘調査918㎡

調査箇所　：第1工区未試掘部分7ケ所（35トレンチ）、踏査箇所15ケ所

試掘調査　：第Ⅰ工区部分で、平成7・8年度に試掘調査が行えなかった部分や、伐開後の古墳の有無等に関して踏査、試掘溝を入れ、確認を行った。
平坦地・谷部に関しては、重機による試掘調査35トレンチを設定し、実施した。

踏　　査　：踏査は15ケ所を実施し、尾根部に関しては、伐開後、一度、踏査し、その後に再度、人力でトレンチを設定し調査を実施したが、古墳等の痕跡は無かった。志摩町との境界部分では、志摩町教育委員会の協力を得て実施した。 調査の結果、すべての地点で、遺構、遺物を確認することはできなかった。

2 ） D-8地点（巻頭図版2 Fig.5～13 PL.5-1～6-8）

D-8地点はヤツデ状に広がった尾根状台地に細かな谷部が形成され、ミカン畑として開墾された場所に位置する。平成7・8年の試掘調査の結果、D-8地点は2ケ所から鉄滓等が確認されていることから、南側をD-8-1地点、北側をD-8-2地点とした。D-8-1地点は、第19次調査地点から約100m西にあり、北東側に開けた南西斜面に位置する。標高50m ～ 42mを有し、僅かに平坦面を有し、東側にある谷部に向かってなだらかな傾斜を持ちながら下っていく地形で、大原川の源流となる谷川が西北に向かって流れている。座標はX66.050、Y-72.790を中心とした範囲である。

D-8-2地点はD-8-1地点より北西約500mに位置し、座標はX66.130、Y-72.750を中心とした範囲である。南西部が高く、北東部に向かって傾斜している。標高46mから38mを有し、平坦面はなく傾斜面だけである。

試掘-1地点は、急遽試掘をおこなうことになった地点で、9本のトレンチを設定し調査した。座標はX66.150 ～ 66.300、Y-72.600 ～ -72.800の範囲である。

（1） D-8-1地点（巻頭図版2 Fig.5～9・23 PL.5-1～5-8）

D-8-1地点は平成12年6月10日から同7月20日をかけて、中央部に土手を残し、上部約32m×18mの573㎡と下部30m×25mの750㎡の面積1,323㎡を調査した。

調査の結果、遺構の確認はできなかった。地山（花崗岩バイラン土）も傾斜しており、下部の一部がやや平坦面を有している。Bの部分に拳大の礫を含む落ち込みを2ケ所検出したが、遺物は含まれていなかった。又、下部C-D間の土層で、Ⅲ′・Ⅳ′・Ⅴ′層が落ち込みとなっているが、その殆どが砂の堆積か砂混じりの土層であり、一時的に水の流れによって自然に形成された落ち込みであった。

土層の基本はA~B間のⅠ層が客土、Ⅱ層が耕作土、Ⅲ層が砂混じりの褐色土、Ⅲ'層が砂を多く含む褐色土、Ⅳ層が褐色土、Ⅳ'層が砂を少量含む褐色土、Ⅴ層が炭化物・黄褐色の斑点が入る黒色粘質土、Ⅴ'層が砂、Ⅴ''層が黄褐色粘土と暗褐色土の互層、Ⅴ'''層が暗褐色土、Ⅵ層が鉄分を含む褐色粘質土、 Ⅶ層が黒褐色粘質土、Ⅷ層が黄褐色粘質土である。下部も基本的には変わりないが、Ⅸ層に炭化物を含む黒褐色粘質土が見受けられ下部に行くほど厚くなっている。平成7・8年の試掘で鉄滓の出土が見られたが、今回の調査では、鉄滓の出土は無く、攪乱層から僅かではあるが陶磁器や瓦、石鏃等の遺物が出土している程

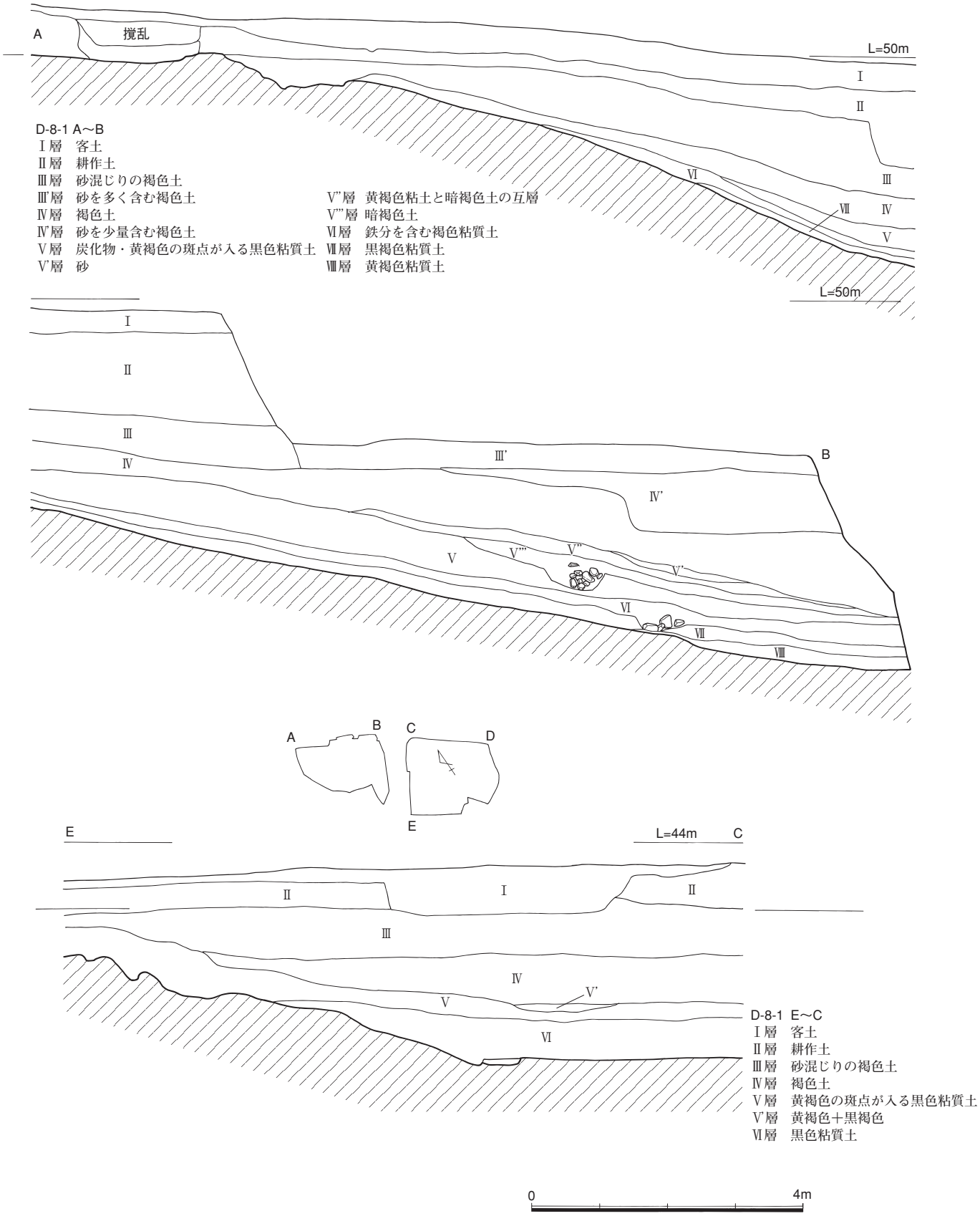


Fig.8　D-8-1 地点土層断面図 -1（AB,EC 間）（縮尺 1/80）

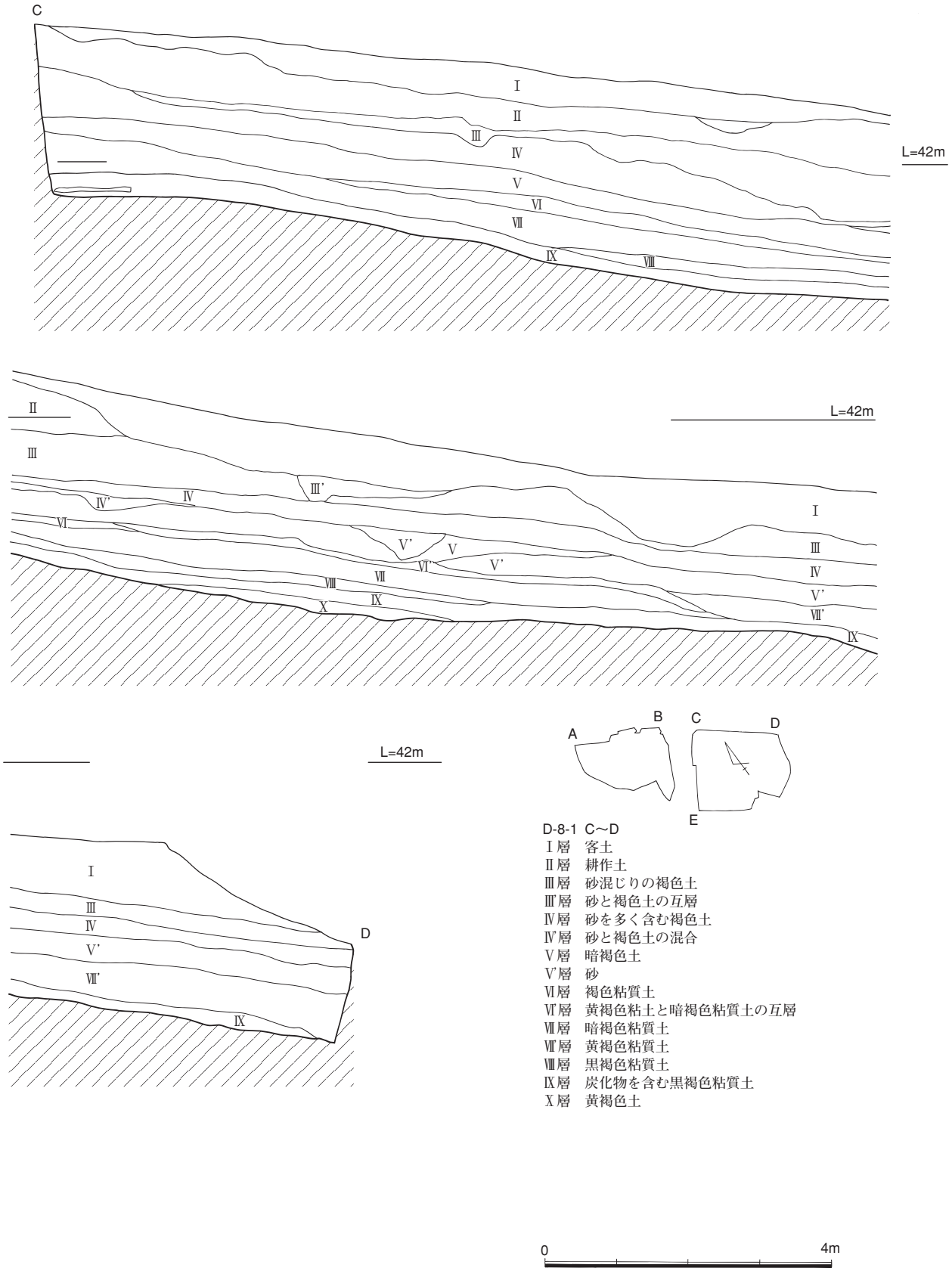


Fig.9　D-8-1 地点土層断面図 -2（CD 間）（縮尺 1/80）

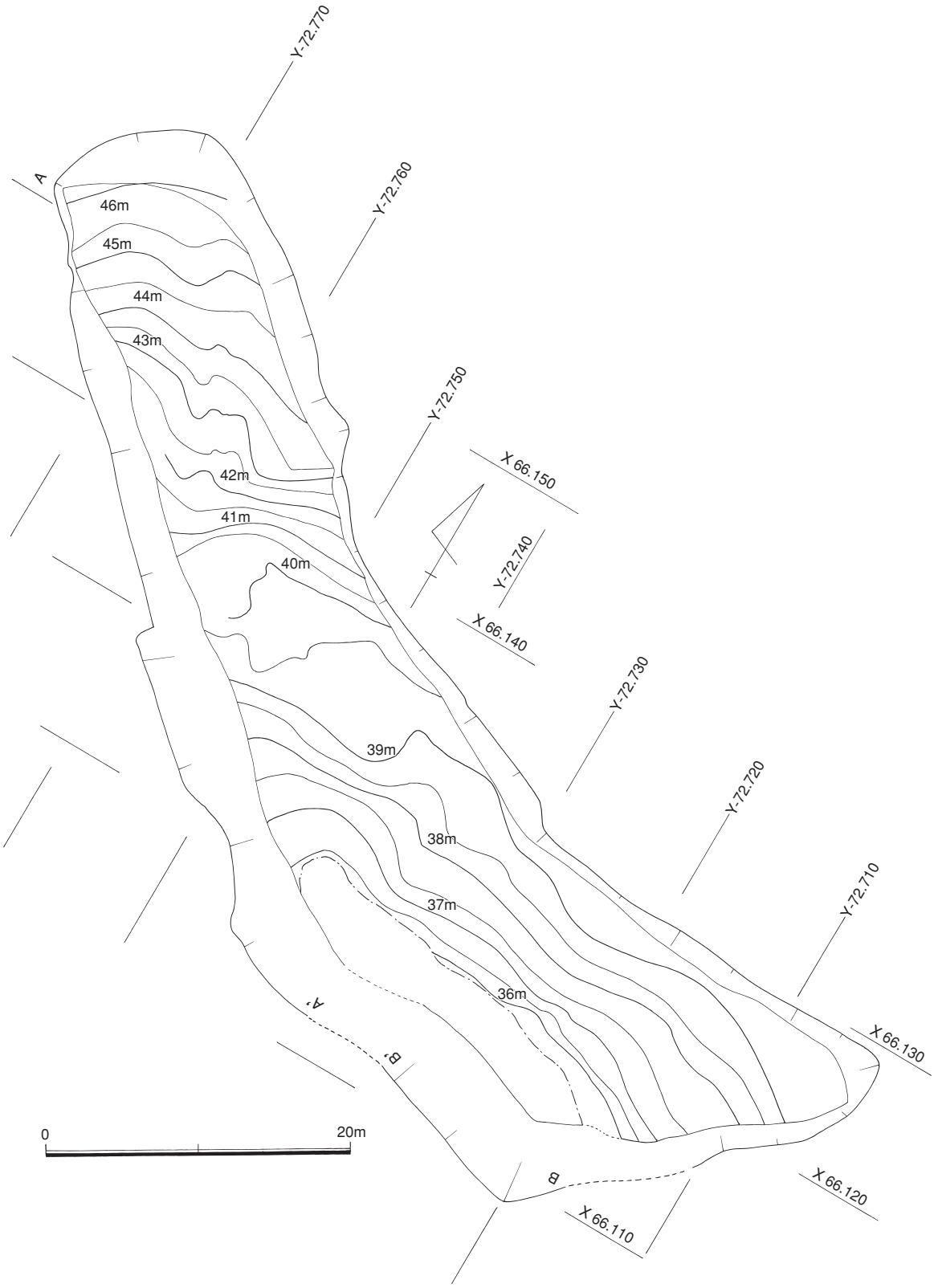


Fig.10 D-8-2 地点平面・コンタ図（縮尺 1/400）

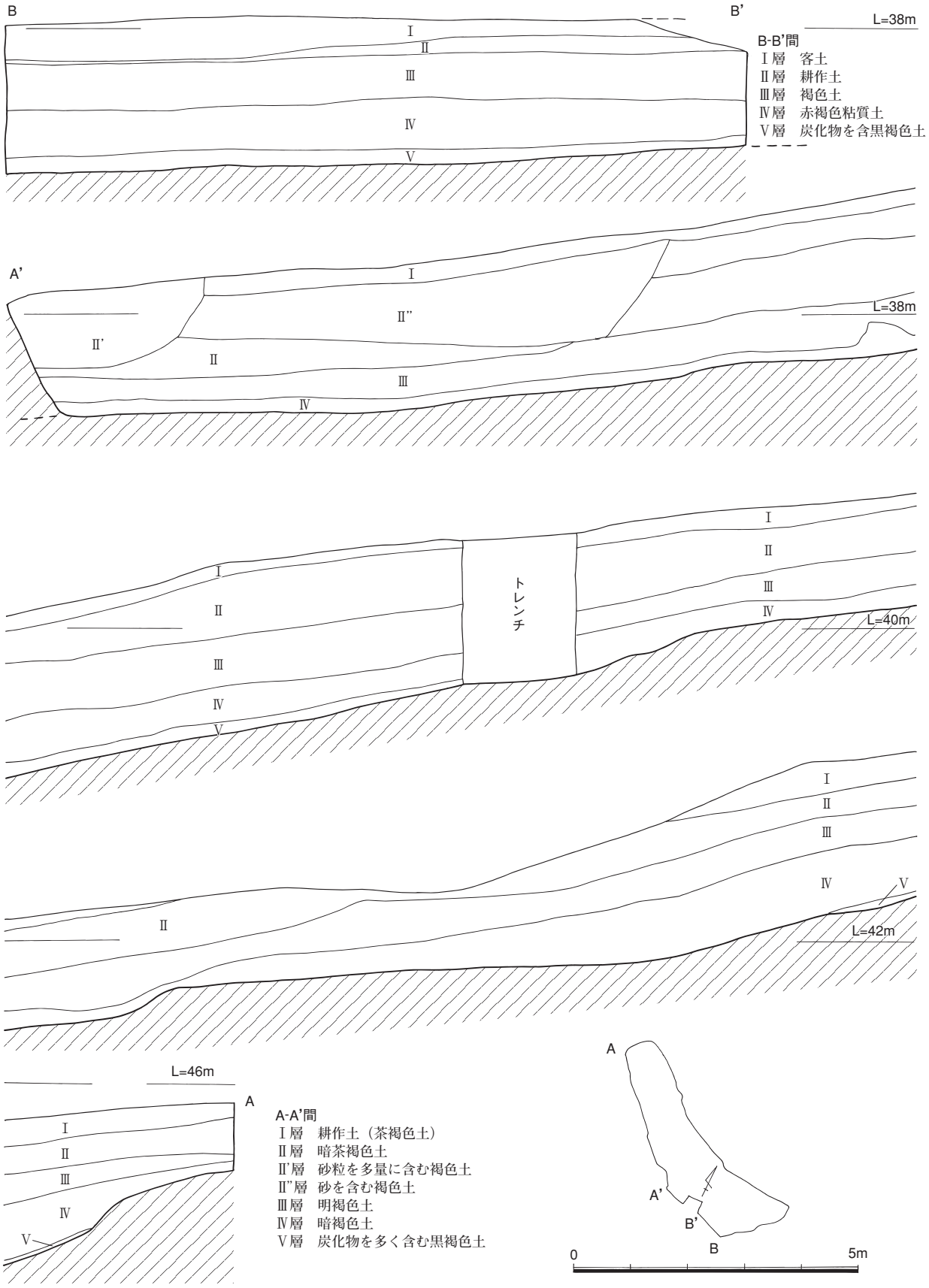


Fig.11　D-8-2 地点土層断面図（縮尺 1/100）

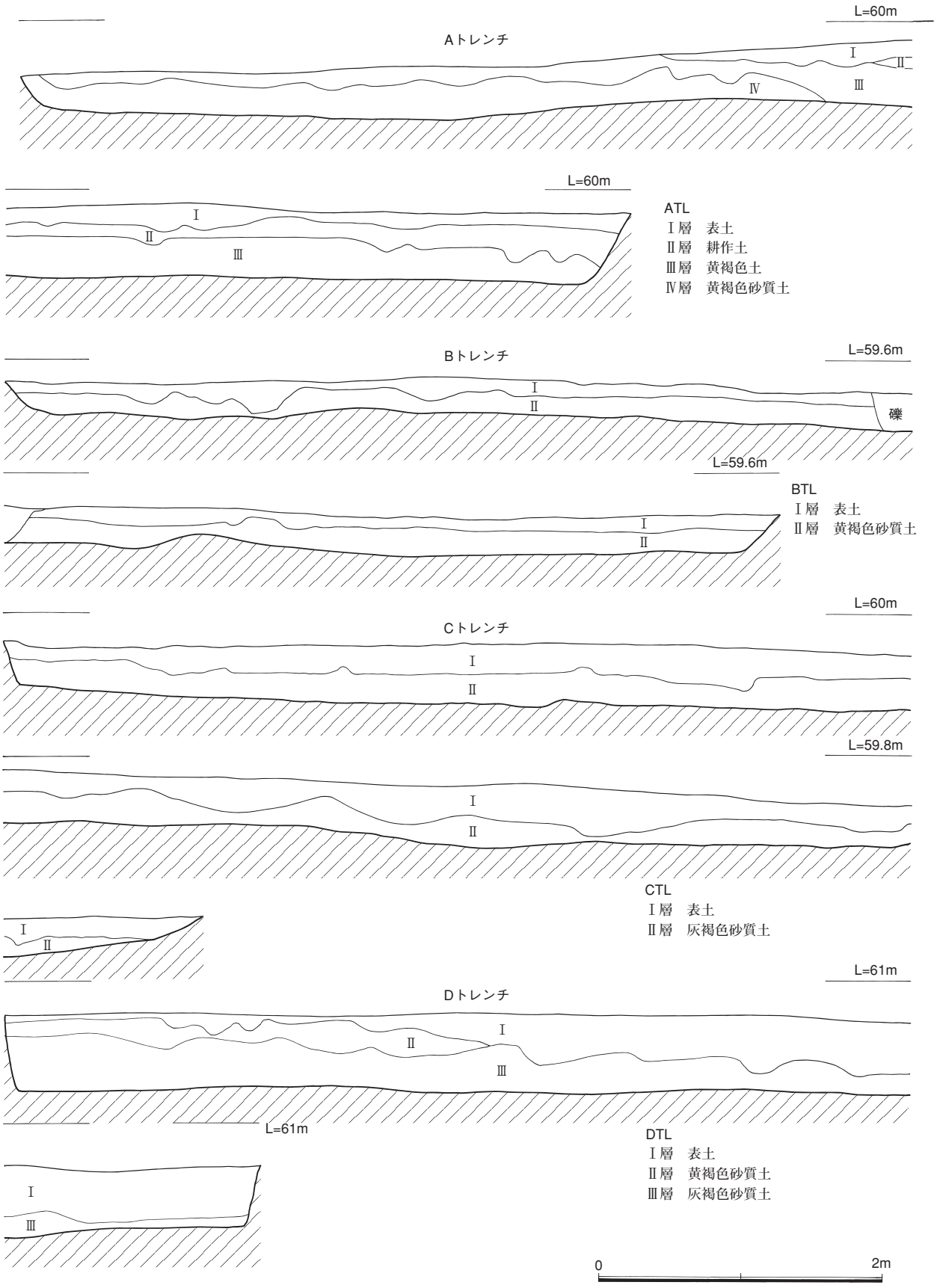


Fig.12　D-8 地点試掘調査 -1 土層断面図 -1（縮尺 1/40）

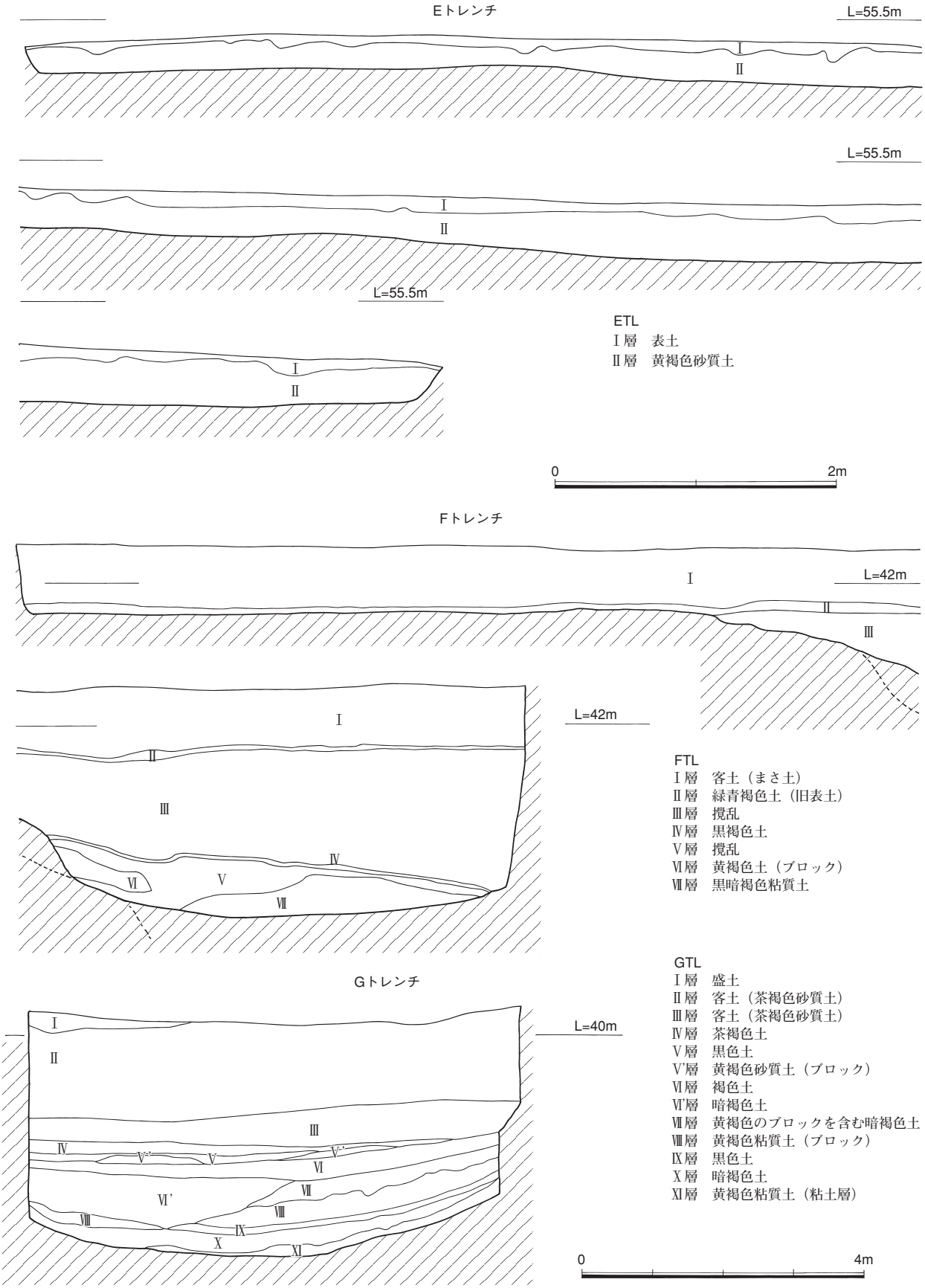


Fig.13　D-8 地点試掘調査 -1 土層断面図 -2（縮尺 1/40,1/80）

度で遺構に伴うものではなかった。

(2)　D-8-2地点（巻頭図版2 Fig.5～7、10・11 PL.6-1～6-8）

D-8-2地点は平成12年7月1日から同8月10日をかけて、80m ×18m の1,422㎡の面積を調査した。調査の結果、遺構の確認はできなかった。地山（花崗岩バイラン土）も傾斜しており、北側下部の一部がやや平坦面を有している程度で、遺構・遺物の検出はなかった。
土層はⅠ層が耕作土（茶褐色土）、Ⅱ層が暗茶褐色土、Ⅱ'層が砂粒を多量に含む褐色土、Ⅱ''層が砂を含む褐色土、Ⅲ層が明褐色土、Ⅳ層が暗褐色土、Ⅴ層が炭化物を多く含む黒褐色土であった。

試掘調査 -1（巻頭図版2 Fig.5・6・12・13 PL.8-5 ～ 10-4）

試掘調査 -1地点は、急遽、九州大学の要請で試掘を行うことになった地点で、9本のトレンチを設定し、調査した。座標は X66.200 ～ 66.300、Y-72.600 ～ -72.800の範囲である。急斜面で部分的に平坦地が造られているが、旧地形では、みかん畑となっていたところで、すぐに地山（花崗岩バイラン土）が認められ、遺構は無かった。基本土層は、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が耕作土、Ⅲ層が黄褐色土、Ⅳ層が黄褐色砂質土、Ⅴ層が地山の花崗岩バイラン土である。

試掘調査 -2（巻頭図版2 Fig.5 PL.8-5 ～ 10-4）

試掘調査 -2地点は、土地開発公社の依頼による試掘調査で、6本のトレンチを設定し、調査した。
座標はX65.840～66.020、Y-72.640～-72.720の範囲である。谷部であることから、基本土層は、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が黄褐色土、Ⅲ層が黄褐色砂質土、Ⅳ層が地山の花崗岩バイラン土。遺構は無い。

試掘調査 -3（巻頭図版2 Fig.5 PL.8-5 ～ 10-4）

試掘調査 -3地点も土地開発公社の依頼による試掘調査で、8本のトレンチを設定し、調査した。

座標は X65.960 ～ 66.180、Y-72.500 ～ -72.540の範囲である。谷部であることから、基本土層は、試掘調査 -2地点と同じく、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が黄褐色土、Ⅲ層が黄褐色砂質土、Ⅳ層が地山の花崗岩バイラン土である。遺構は無かった。

試掘調査 -4（巻頭図版2 Fig.5 PL.8-5 ～ 10-4）

試掘調査 -4地点は、元岡･桑原遺跡群第7次調査地点の南西側で2本のトレンチを設定し、調査した。座標は X65.950 ～ 65.980、Y-72.100 ～ -72.140の範囲である。頂部付近であるため、すぐに地山（花崗岩バイラン土）が認められ、遺構は無かった。基本土層は、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が耕作土、Ⅲ層が地山の花崗岩バイラン土である。

試掘調査 -5（巻頭図版2 Fig.5 PL.8-5 ～ 10-4）

試掘調査 -5地点は、第4地点の丘を一つ西側に入ったところで、機会掘削ではなく人力による試掘調査を行った。古墳が想定されたため1本のトレンチを設定し調査した。座標は X66.180、Y-72.150の範囲である。調査の結果、すぐに地山（花崗岩バイラン土）が認められ、遺構は無い。

試掘調査 -6（巻頭図版2 Fig.5 PL.8-5 ～ 10-4）

試掘調査 -6地点は、元岡・桑原遺跡群第3次調査の西側に張り付く東側斜面である。ただ、あまりにも急勾配であることで、斜面に3本のトレンチ、頂部に3本、計6本のトレンチを設定し、調査した。座標は X66.060 ～ 66.250、Y-72.070 ～ -72.200の範囲である。斜面部分の基本土層は、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が耕作土、Ⅲ層が黄褐色土、Ⅳ層が黄褐色砂質土、Ⅴ層が地山の花崗岩バイラン土である。頂部の基本土層はⅠ層が表土、Ⅱ層が黄褐色土、Ⅲ層が地山の花崗岩バイラン土である。

試掘調査 -7（巻頭図版2 Fig.5 PL.8-5 ～ 10-4）

試掘調査 -7地点は、山頂部の踏査で、古墳に近い形状を呈する部分を機会掘削ではなく人力による試掘調査を行った。3本のトレンチを設定し調査した。座標は X65.900、Y-72.500の範囲である。

すぐに地山（花崗岩バイラン土）が認められ、遺構は無かった。基本土層は、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が耕作土、Ⅲ層が地山の花崗岩バイラン土である。

3） C-2地点（巻頭図版2 Fig.5・14～16・24 PL.7-1～8-4）

C-2地点はヤツデ状に広がった尾根状台地に細かな谷部が形成されている端部に位置し、平成7・8年の試掘調査の結果、C-2からも鉄滓等が確認されている。この地区は緑地保全地区の指定地である。南側には、九州大学が保存地区として決定した石ケ元古墳群をのせる尾根が広がっている。石ケ元古墳群からは、鉄製鍛冶工具一式をはじめ製鉄関連の遺物や砥石、鉄滓、環頭太刀、金銅張の馬具等貴重な遺物が出土し、九州大学が32基の内18基を保存する事を決定した。C-2地点は、保存された古墳4～8号墳を乗せる尾根と9～14号墳を乗せる尾根の谷部に位置している。その尾根の北側斜面に位置し、座標はX66.450、Y-72.000を中心とした範囲にある。標高15～20mを測り、北東側にある大原川に向かって傾斜する。一度平坦面を持ち、大原川に達する。
調査面積は1,161㎡、調査期間が平成12年9月1日～同10月7日である。

調査はこの一体が緑地保全地区であるため、最小限の調査にとどめた。検出された遺構は谷部となる北東側斜面に伏焼土壙が2基検出された。中央部に水の流れによると思われる自然流路があり、その北西側に大原川がある。僅かに平坦部を有するが、この部分は大原川の氾濫源であった可能性がある。大原川まで20mである。調査後は遺構に砂等で保全を行い、全体を15cmの砂・土塁で保全し埋め戻しを行った。出土遺物は、44点出土し、Fig.24に8点を図示した。

伏焼土壙 -1（SO-01）（Fig.15、16 PL.7-3～7-8、8-1）

SO-01はSX-001（自然流路）の段落ち斜面上から検出した。本来は水平に掘り込まれていたものと考えられるが、SX-001によって東側が削平されたと考えられる。これは、土層観察からも窺える。本来、Ⅰ層がレンズ状を呈しながら堆積しているはずであるが、Ⅰ層・Ⅳ層が消滅している状況を呈する。規模は長軸0.9m×短軸0.65m×深さ0.3mを測る。形状は3方向が僅かに丸みを持ち、西側に段を有し、二段の形状を持つ。PL.7-5～8-1までがSO-01であるが、かなりの火力で焼かれた痕跡が壁面に残っている。土層はⅠ層が炭を少量含む褐色土、Ⅱ層が黒色土、Ⅲ層が炭を少量含む褐色土、Ⅳ層が炭化物を多量に含む暗褐色土、Ⅴ層が黄褐色土である。座標は長軸東側でX66.436、Y-71.989、西側はX66.436、Y-71.992である。

伏焼土壙 -2（SO-02）（Fig.15、16 PL.7-3～7-6、8-2～8-4）

SO-02もSX-001（自然流路）の段落ち斜面上から検出した。SO-01より北側で、SX-001がさらに深く抉られた斜面上からの検出である。SO-02もSX-001によって東側が削平されたと考えられる。規模は長軸1.6m×短軸0.68m×深さ0.74mを測る。形状は3方向が僅かに丸みを持つ長方形を呈する。壁面及び床面は、かなりの火力で焼かれた痕跡があり、下面より10cm上から炭化した材が検出された。土層はⅠ層が褐色土、Ⅱ層が炭化物を含む黒褐色土、Ⅲ層がより多くの炭化物を含む褐色土である。座標は長軸北側でX66.443、Y-71.990、南側はX66.439、Y-71.991である。

自然流路状遺構（SX-001）（Fig.15、16、24 PL.7-3・4）

尾根から波生した谷部が急激に段落ちする部分に自然流路が形成されたもので、小石、砂等が各土層に見られる。ただ、この自然流路は、SO-01・02の破棄後に大量の水により形成され、その後この部分が自然水路としての流れがあったと考えられる。それは、SO-01・02とも上端部を著しく削平を受けていることから、時間的にはSO-01・02が古くSX-001が新しいことが窺える。二段に形成されており、SO-02付近からさらに段落ちして深く抉る状況で大原川の氾濫源に流れていく。

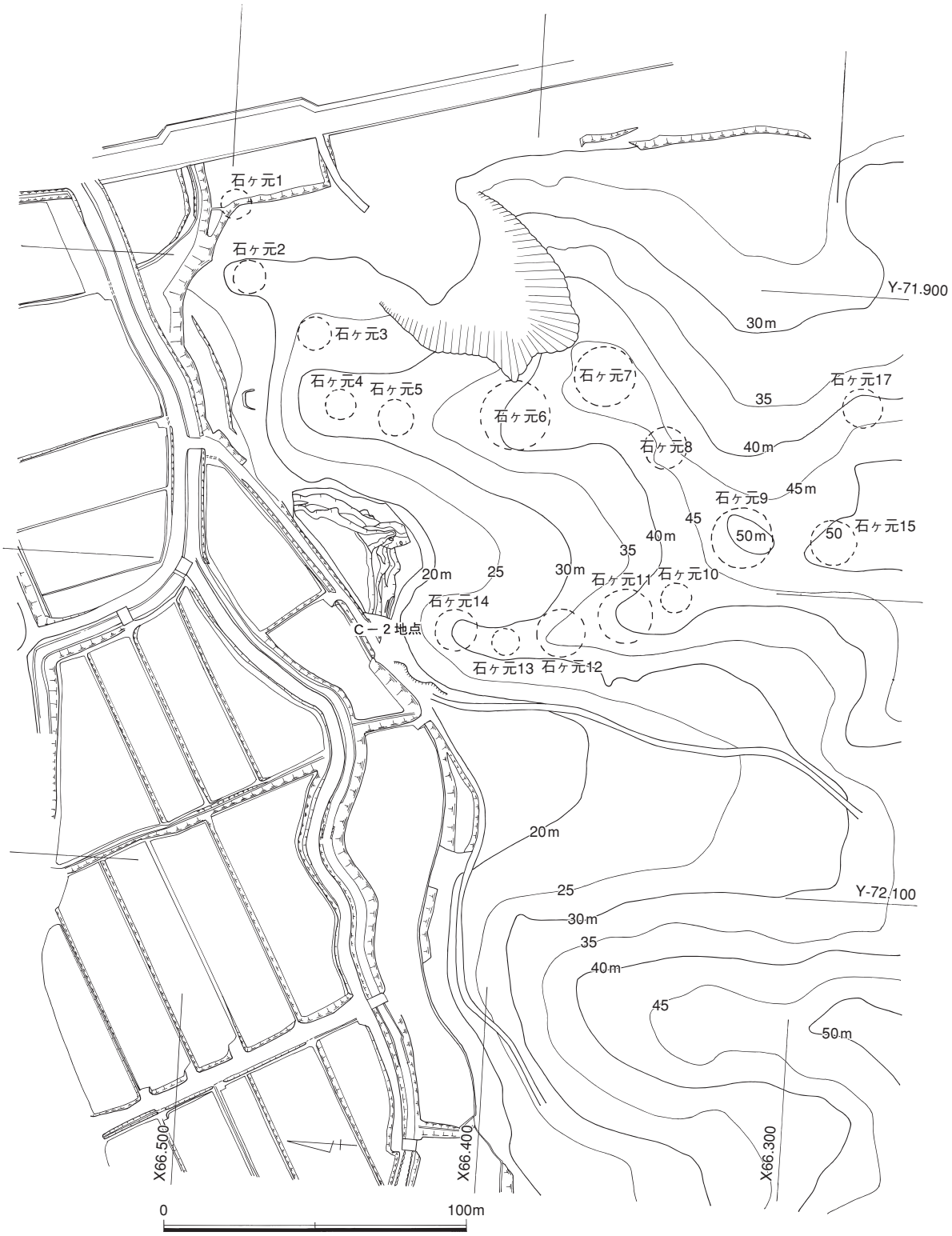


Fig.14　C-2 地点位置図（縮尺 1/2,000）

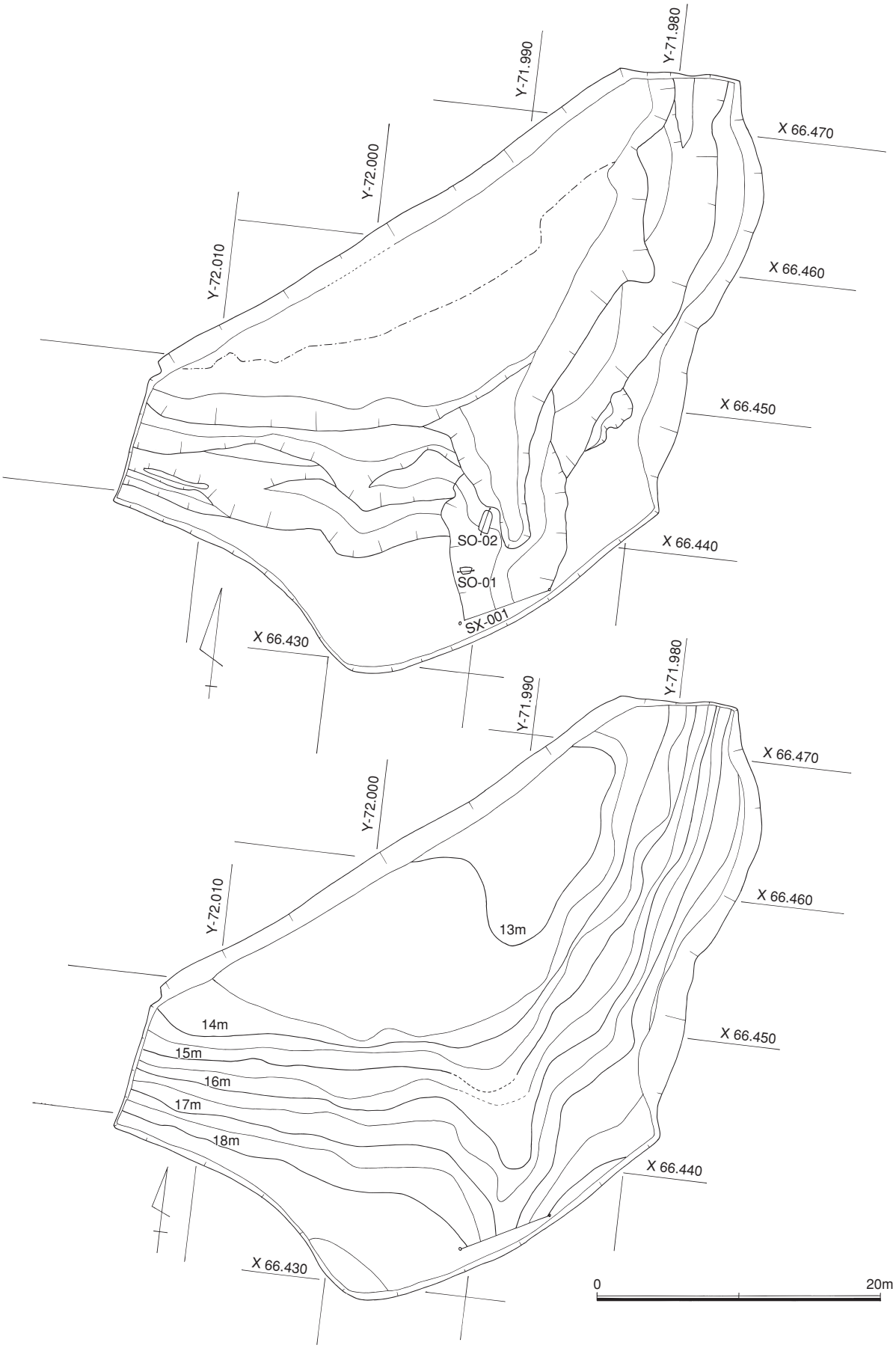
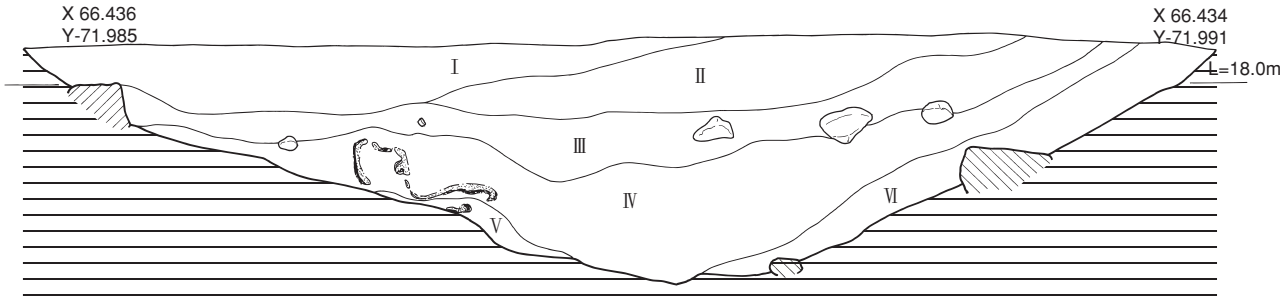
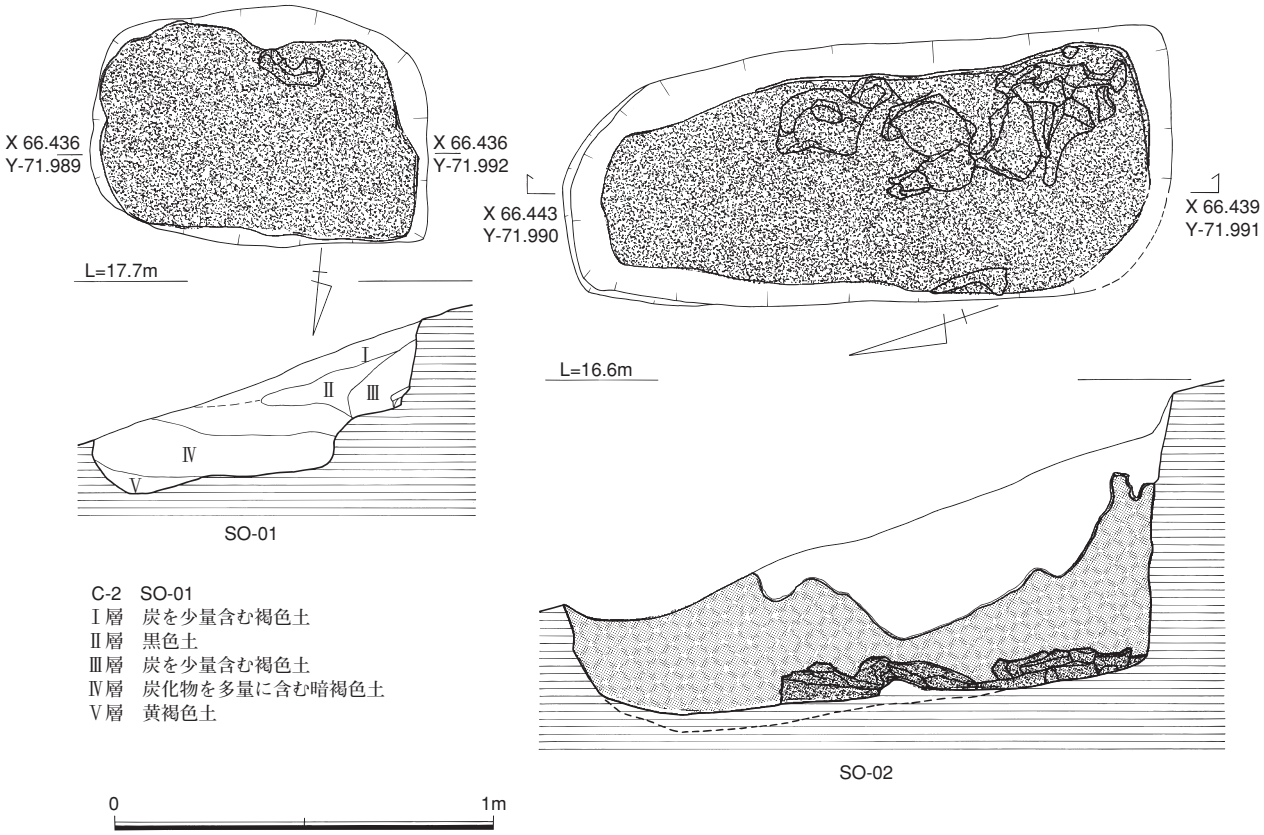


Fig.15　C-2地点遺構配置図とコンタ図（縮尺 1/400）



C-2　SX-001
Ⅰ層　暗褐色砂質土　小石、砂粒を多く含む。炭化物を含む。
Ⅱ層　暗褐色砂質土　小石、砂粒を多く含む。
Ⅲ層　暗褐色砂質土　Ⅱ層より濃い暗褐色　土器片を含む　15～30cmの石がこの層に見られる
Ⅳ層　暗黄褐色土　小さな粘土ブロックが少し含まれており、炭化物、鉄分を多く含む
Ⅴ層　黄褐色土　鉄分を多く含む
Ⅵ層　黄褐色粘質土　炭化物、鉄分を少し含む。石を含む

0　2m



C-2　SO-01
Ⅰ層　炭を少量含む褐色土
Ⅱ層　黒色土
Ⅲ層　炭を少量含む褐色土
Ⅳ層　炭化物を多量に含む暗褐色土
Ⅴ層　黄褐色土

Fig.16 溝状遺構と伏焼土壙実測図（縮尺 1/20,1/40）

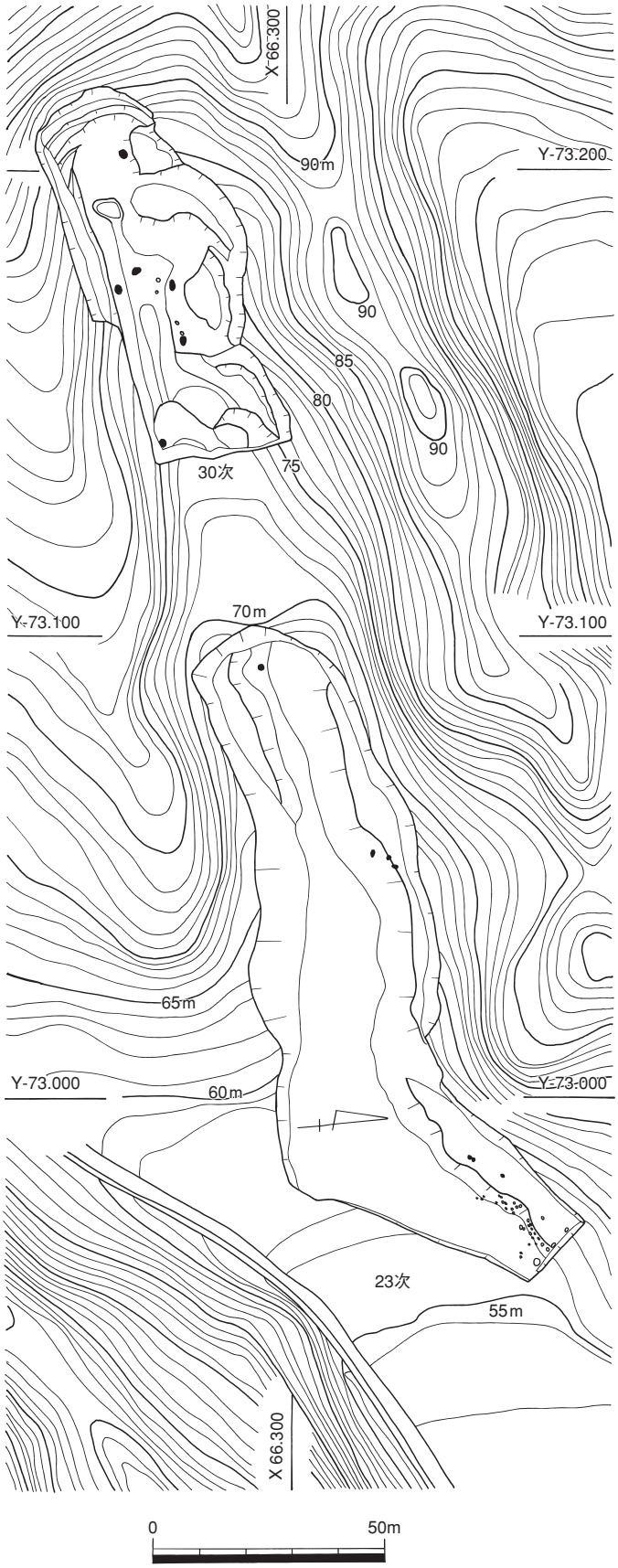


Fig.17 E-2（23 次）・30 次調査配置図（縮尺 1/1,500）

第一段目の幅は6.25m、第二段目の長さ5m、深さ1.5mを測り、第二段目の幅は入り口で2m、出口で9m、長さ11m、深さは入り口部分で1.5m、出口部分で1mを測る。第一段目の土層を見ると第Ⅰ層が暗褐色砂質土（小石、砂粒を多く含む。炭化物を含む）、Ⅱ層が暗褐色砂質土（小石、砂粒を多く含む）、Ⅲ層が暗褐色砂質土（Ⅱ層より濃い暗褐色で土器片を含む。15~30cmの石がこの層に見られる）、Ⅳ層が暗黄褐色土（小さな粘土ブロックが少し含まれており、炭化物,鉄分を多く含む）、Ⅴ層が黄褐色土（鉄分を多く含む）、Ⅵ層が 黄褐色粘質土（炭化物、鉄分を少し含む。石を含む）である。土層の座標は東側がX66.436、Y-71.985、西側はX66.434、Y-71.991である。

4）E-2地点（Fig.17～22 PL.1～3-6）

試掘調査で確認されている土壙を再確認するとともに、土地開発公社から発掘調査依頼があり、まず確認調査を実施し、その後、全体の調査を行うこととした。調査期間は平成12年10月10日～13年3月27日で、谷部の5,200㎡を調査した。検出された遺構は中型の伏焼土壙4基、小型の伏焼土壙4基、計8基と柱穴群を検出したが、柱穴群はまとまらず建物にはならなかった。遺物は出土しなかったため時期を決定するにはいたらなかった。

伏焼土壙

（SO-01～03）（Fig.19・21 PL.2）

調査区中央部よりやや西から三基まとまって検出された。斜面に形成されていることも要因であるが、削平が著しく遺存状態は悪い。壁面が三基とも著しく焼けている。出土遺物は無い。

SO-01 は長径1.4m×短径0.85m×深さ0.09mを測り、不整形な長方形を呈する。座標は長軸東側ポイントでX66.3232、Y-73.0482、西側ポイントはX66.3232、Y-73.0502である

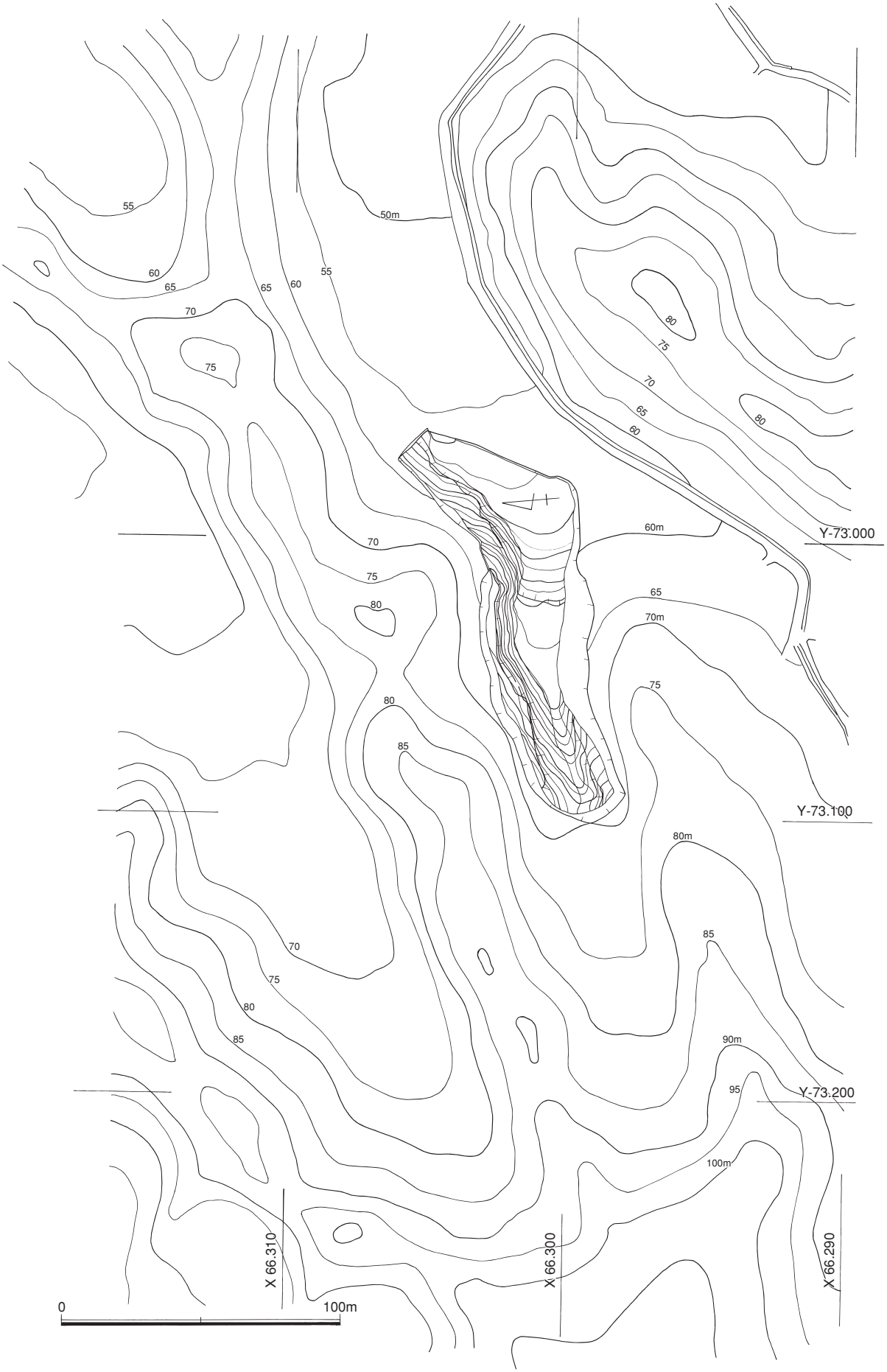


Fig.18 E-2 (23 次) 調査配置図 (縮尺 1/2,000)

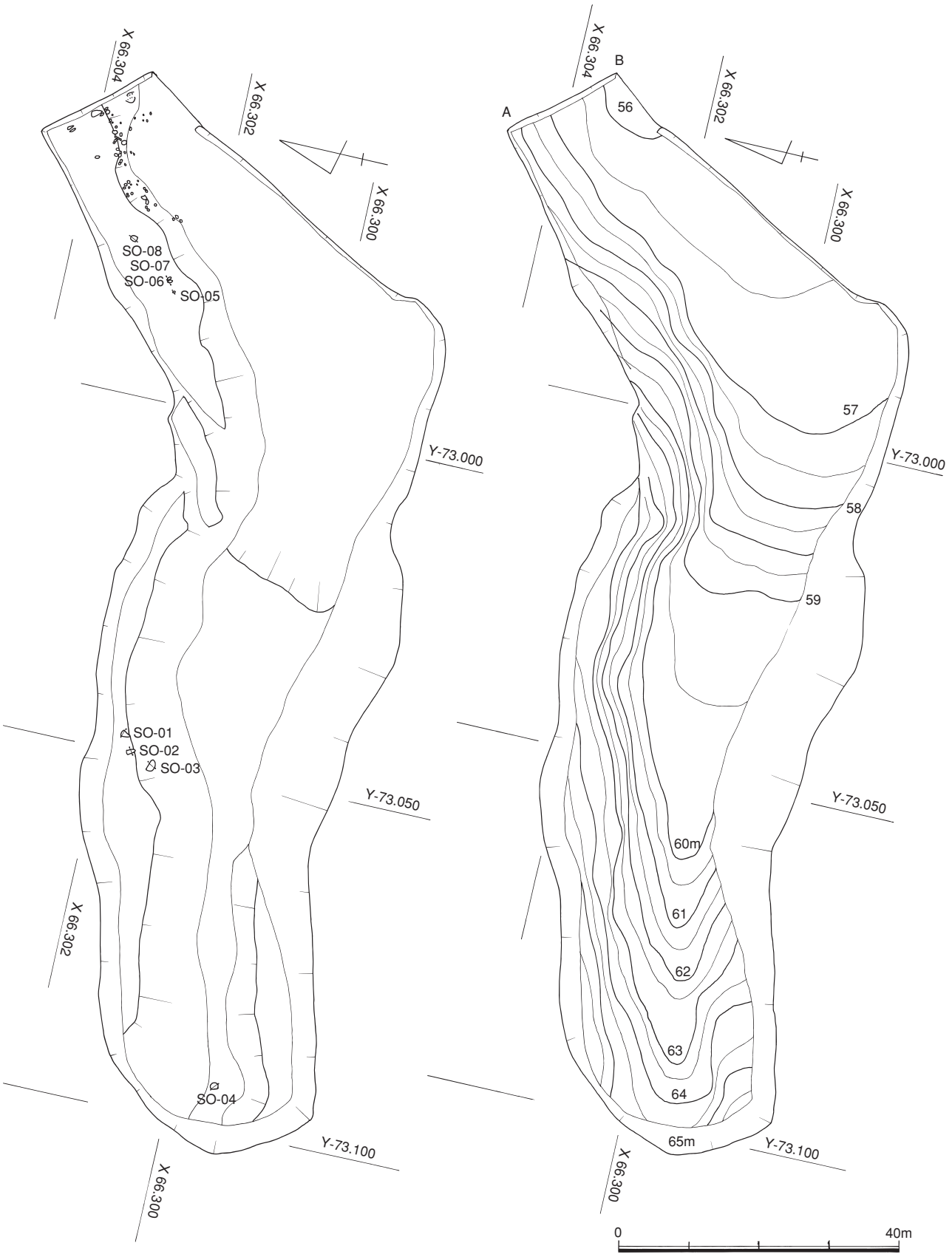


Fig.19 E-2 (23 次) 調査遺構配置図とコンタ図 (縮尺 1/800)

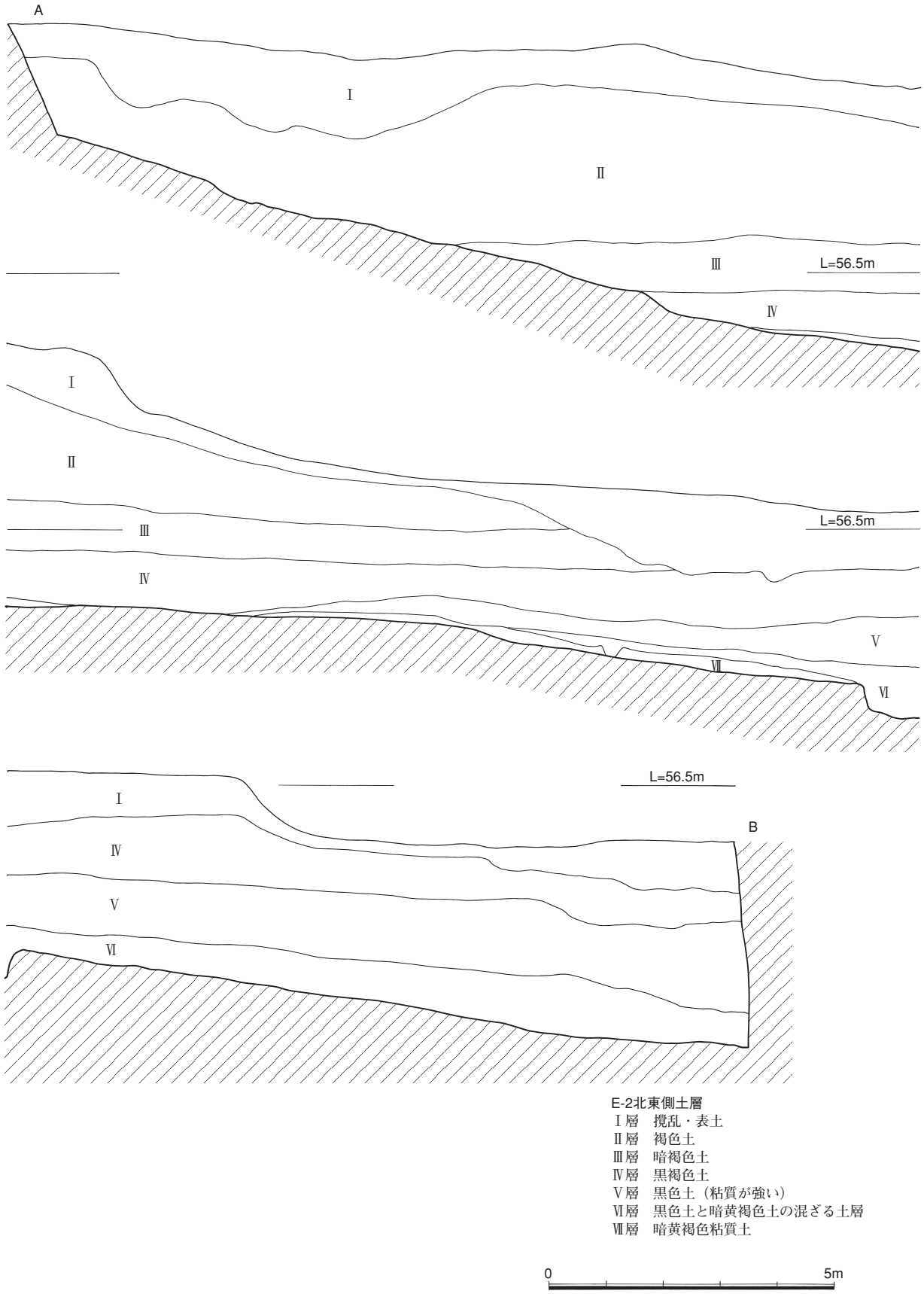


Fig.20　E-2（23 次）調査土層断面図（縮尺 1/100）

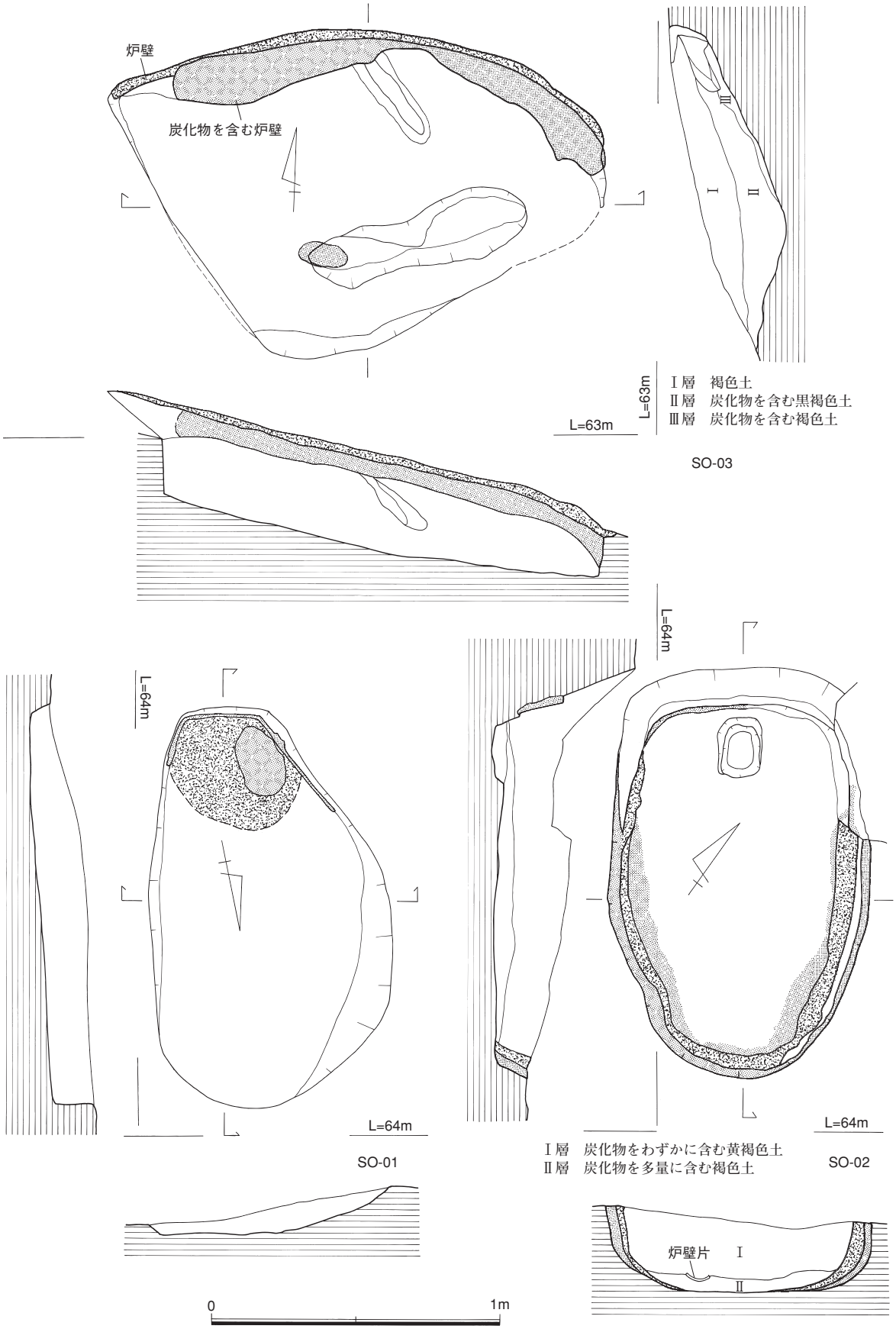


Fig.21　E-2 (23 次) 調査伏焼土壙平面・断面図 -1 (縮尺 1/20)

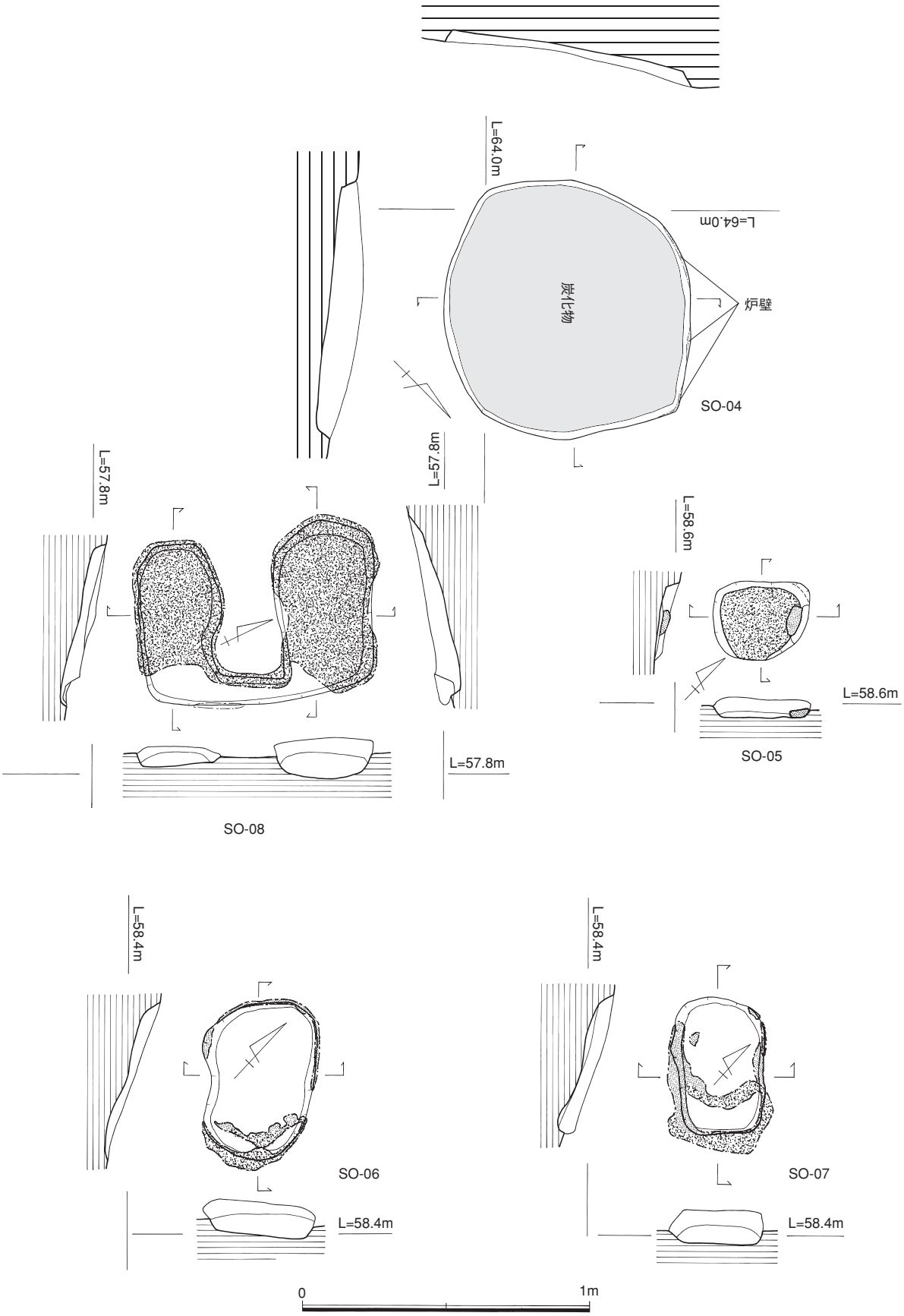


Fig.22　E-2 (23 次) 調査伏焼土壙平面・断面図 -2 (縮尺 1/20)

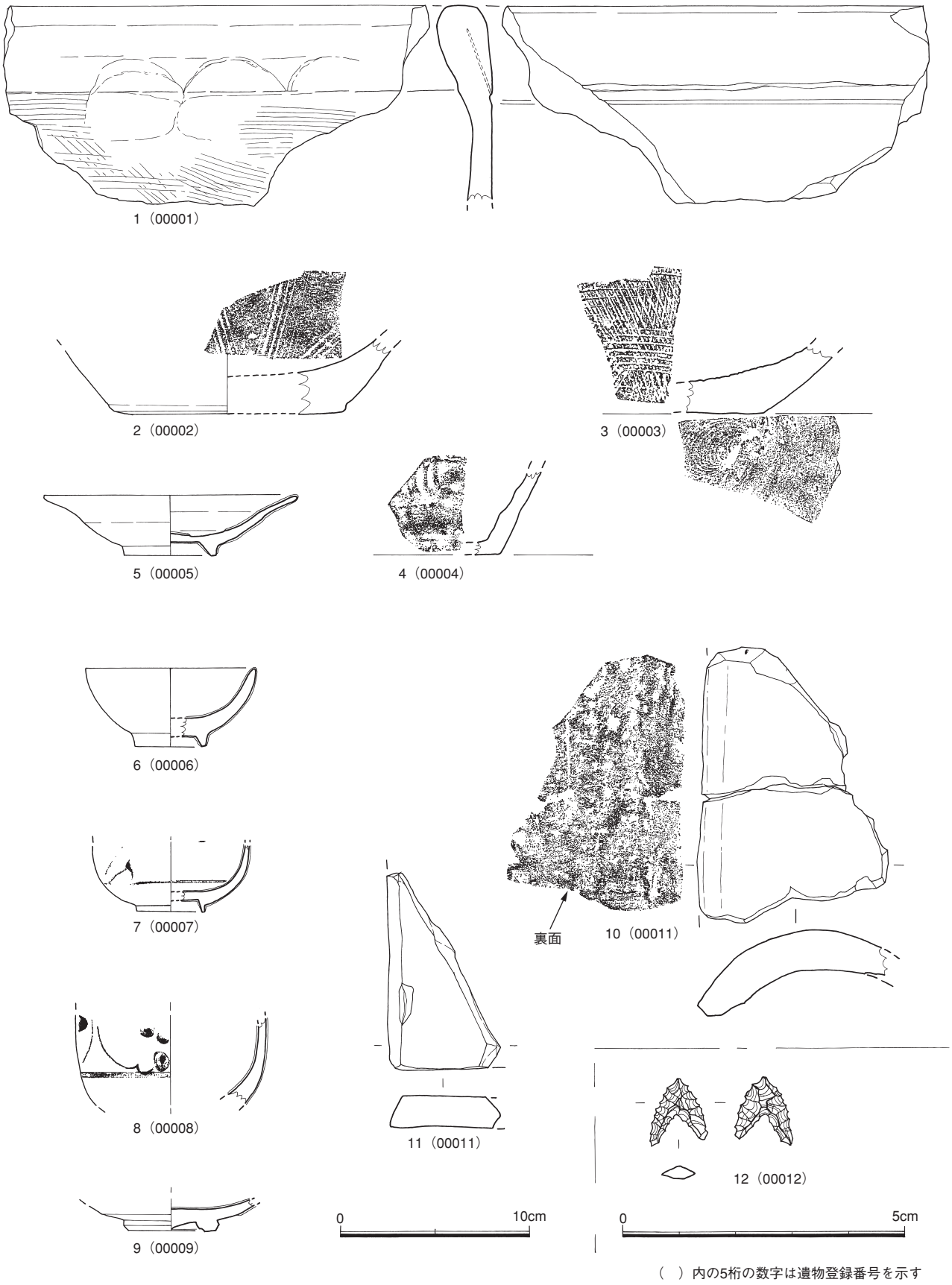


Fig.23　23 次調査出土遺物実測図 -1（縮尺 1/1・1/3）

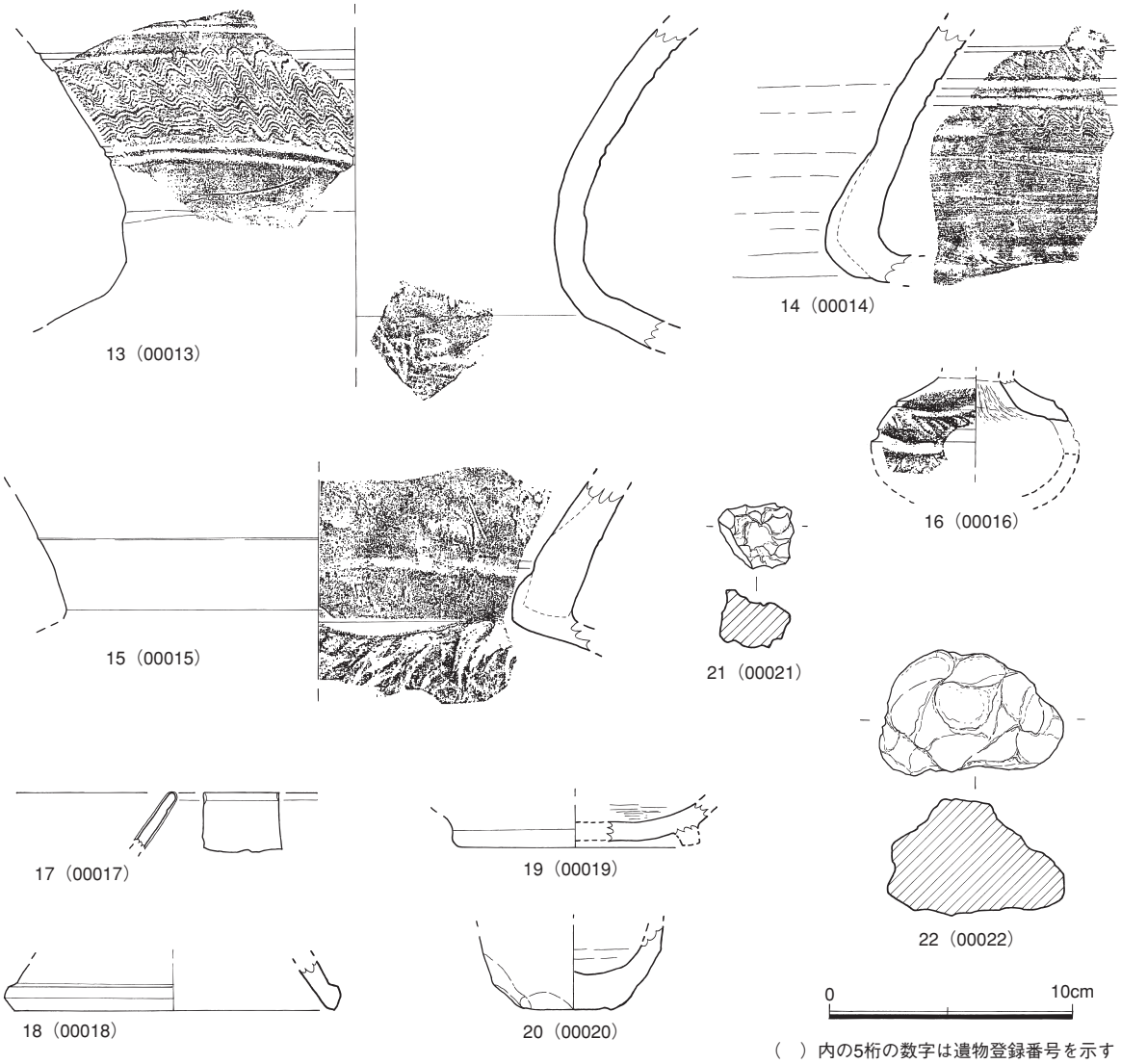


Fig.24　23 次調査出土遺物実測図 -2（縮尺 1/3）

SO-02は長径1.42m×短径0.93m×深さ0.31mを測り、隅丸長方形を呈する。座標は長軸北東側でX66.3220、Y-73.051、南西側はX66.3210、Y-73.0522である。

SO-03は長径1.75m×短径1.15m×深さ0.28mを測る不定型な四辺形である。座標は長軸北東側でX66.3192、Y-73.0524、南西側はX66.3172、Y-73.0536である。

（**SO-04**）（Fig.19・22 PL.3-1）

SO-04は調査区の西側谷部から一基だけ検出された。隅丸方形を呈する。壁面はあまり焼けていない。遺存状態も悪い。長径0.9m ×短径0.85m ×深さ0.12m を測る。座標は長軸南東側で X66.2932、Y-73.0920、北西側は X66.2940、Y-73.2940である。

（**SO-05 ～ 08**）（Fig.19・22 PL.3-2 ～ 3-6）

調査区東側の北西部平坦面より四基まとまって検出された。北西側はすぐに傾斜の著しい斜面である。四基とも小型で、**SO-08**は二穴が連動した形状を呈する。すべて削平が著しく遺存状態は悪い。壁面が四基とも著しく焼けている。出土遺物は無い。

SO-05は長径0.35m×短径0.28m×深さ0.04mを測る隅丸四辺形である。座標は長軸北東側でX66.3388、Y-72.9882、南西側はX66.3380、Y-72.9840である。

SO-06・07はPL.3-4で見られるように隣接して検出された。座標は2つの中心をポイントとし長軸北東側でX66.3400、Y-72.9860、南西側はX66.3380、Y-72.9874である。**SO-06**は長径0.60m×短径0.38m×深さ0.08mを測る隅丸長方形である。**SO-07**は長径0.55m×短径0.34m×深さ0.05mを測る隅丸長方形である。

SO-08は特異で二つの隅丸長方形を連結している。全体の長径0.84m×短径0.62m×深さ0.09mを測り、連結部分は長径0.3m×短径0.13m×深さ0.09mで、二つの土壙を連結する。連結部分は東側だけである。座標は長軸北東側でX66.3465、Y-72.9254、南西側はX66.3450、Y-72.9828である。

Pit群 (Fig.19 PL.1)

調査区の東北側、SO-05～08の東側にPit群を検出した。段上部と段落ち部分とに検出したが、どれも径が10～20cm程度でまとまるものはなかった。

土層 (Fig.20 PL.1)

土層は北東側Pit群が集中して検出された部分の土層を図示した。土層的には基本的層序で、Ⅰ層が撹乱・表土、Ⅱ層が褐色土、Ⅲ層が暗褐色土、Ⅳ層が黒褐色土、Ⅴ層が黒色土（粘質が強い）、Ⅵ層が黒色土と暗黄褐色土の混ざった土層、Ⅶ層が暗黄褐色粘質土である。

5）出土遺物 (Fig.23・24 PL.20)

確認調査で遺物が出土した地点は、D-8-1地点とC-2地点からで、他のD-8-2地点、E-2地点、試掘調査地点からは出土しなかった。特に広範囲に調査を行ったE-2地点の遺構からも炭化物だけで、土器の破片一片も出土しなかった。挿図・図版の（　）内は遺物登録番号を示し、図版の番号の内、左側は挿図番号と同一で通し番号、右側の番号は写真番号を示す。

D-8-1地点出土の遺物 (Fig.23 PL.20)

Fig.23に図示した11点がD-8-1地点の撹乱層、暗茶褐色土、暗褐色土から出土した。12の一点だけが黒色土からの出土である。

1 (00001) 土師器で大型甕形土器口縁部である。細片であるため口縁径は不明である。口縁部が直立し、外側に粘土帯を貼り付けるタイプで、貼り付けた粘土帯を抑えている指圧痕が内面に認められる。内面は粗い刷毛目を施し、外面は口唇部が刷毛目とナデ、頸部はナデ仕上げである。外面の口縁部と頸部の境に一条の沈線を巡らす。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、雲母、石英を含む。色調は外面が明黄褐色、内面が明灰褐色を呈し、焼成はやや軟弱である。

2・3 (00002・3) 擂り鉢状土器片の底部である。2は内面に底部から頸部にかけて四条の沈線を掻き上げるタイプで、現状では三方向が確認される。表面・底部はナデ仕上げである。3は内面に縦方向に斜め二方向からの沈線を全体に施し、格子状とし、さらに横方向に七条の沈線を巡らす。約1.5cm上部にも横方向の沈線が認められる。底部は停止の糸切りにより切り離されている。胎土は両方とも1mm前後の砂粒を多く含み、雲母、石英を含む。色調は2が淡小豆色、3が暗小豆色である。焼成は2がやや軟弱で、3が良好である。**4 (00004)** 須恵質の鉢形土器片の底部である。内面に同心円紋のタタキが施されている。外面はナデ、底部は篦の切り離しである。色調は外面が小豆色、内面が暗青灰色である。

5・9 (00005・9) 両方とも青磁片である。5は底部が薄く仕上げられ、高台がやや丸みをもつ盤状の皿である。全面に釉が掛かるが、高台の底面と内面の底面に釉が掻き取られている。特に内面は底部中央

部に円形で釉がかかっているのに、その外側1.7cmにはかかっていない。釉の掛かる部分とかからない部分との境には茶褐色の一条の線が巡る。色調は内外面とも白灰褐色を呈し、光沢がある。9は高台が低い盤状の皿である。内側底面に目跡痕が四ヶ所認められる。釉は高台にはかかっていない。

6～8（00006～8） 近世の染め付けで、肥前焼碗形土器の三点である。

6には染め付けの一部がみられ、口径9cm、器高4.2cm、底径3.8cmを測る。7は菊花紋と思われる染め付け部分と内面に一条の文様がある。底径3.6cmである。8も黒みを帯びた群青色で文様が描かれている。6と8の地肌はややくすんだ青みがかった色調を呈するが、7はくすんだ乳白色を地肌とする。

10・11（00010・11） 中世から近世にかけての瓦である。10は丸瓦の破片で、内面に布の痕跡が僅かに残る。焼成は甘く、色調は外面が黒色、内面が暗茶褐色である。11は熨斗瓦の破片と思われるが、定かでない。内外面とも篦磨きされている。色調は灰褐色を呈する。

12（00012） D-8-1地点下段の黒色土から出土した。出土遺物はこれだけであるが、おそらく包含層と思われる。全長1.2cmの黒耀石製の細石鏃である。全面に押圧剥離を加え、抉り部分も5mmと長い。脚部の一部が欠損している。

C-2地点出土の遺物（Fig.24 PL.20）

C-2地点からは44点出土したが、図示できるのは10点であった。

13（00013） 包含層から出土した須恵器の大型甕型土器の頸部から口縁にかけての部位で口唇部を欠損する。頸部から大きく外反し、口縁部に達する。形状はラッパ状を呈する。口縁中段上下に二条の沈線を巡らせその間に波状文を施す。内面は胴部にかけて同心円紋のタタキを施している。外面に自然釉がかかる。

14（00014） これも須恵器の大型甕型土器の頸部から口縁にかけての破片である。口縁中段上下に二条の沈線を巡らせその間に波状文を施す。内面は篦削り、外面はナデ仕上げを施している。内外面とも自然釉がかかる。

15（00015） これも13・14と同様で須恵器の大型の甕型土器で、頸部径21.8cmを測る。外面に一条の沈線を巡らすが波状文はない。外面に自然釉がかかる。内面胴部には同心円紋のタタキが認められる。

16（00016） 包含層から出土した須恵器の瓶の胴部で 中央に円形の孔を持つ。孔の中央部とその上段に沈線を巡らせ、その間に斜めの縄目模様を施す。胴径が8.4cmで、精製された粘土を使用している。

17（00017） 自然流路状遺構（SX-001）の第Ⅴ層である鉄分を多く含んだ黄褐色土から出土した青磁碗の口縁部片である。外面に蓮弁紋を施し、釉色は淡い深緑色を呈する。

18（00018） 包含層から出土した須恵器の高坏脚部片と思われる。あまりにも小片であるため、器種名は不明。脚径はおよそ13cmを測る。

19（00019） 包含層から出土した土師器の高台付き内黒碗である。高台も僅かしか残っていないが、復元径は10.2cm程度である。外面は淡茶褐色、内面は黒色を呈する。

20（00020） 自然流路状遺構（SX-001）の黄褐色土から出土した手捏土器片である。底径が4cmで、断面が厚い。内外面とも暗赤褐色を呈する。

棒状鉄製品**23（00023）**

破損しているため形状は定かでない。棒状鉄製品としておく。

鉄滓

21・22（00021・22） は鉄滓である。21が自然流路状遺構（SX-001）の黄褐色土から出土、22が包含層から出土した。

元岡・桑原遺跡群第30次調査

元岡・桑原遺跡群第30次調査（0240）

福岡市土地開発公社より平成12年5月30日付けで製鉄遺構の確認調査と第1工区の試掘調査の依頼を受けた。又、九州大学が再取得したG地区について製鉄遺構確認調査及び本格的な発掘調査について協議を進めてきたが、平成13年度末に協議が整い、平成14年度8月に委託契約が締結し、製鉄遺構確認調査2ケ所、瓦溜の確認調査を実施することとなった。確認調査の結果、G-1地点には、瓦留と製鉄遺構が確認され、G-2地点には、製鉄遺構は確認できなかったが、古墳時代の住居址等が検出された。これらの地点は次年度から本格調査を実施することで、九州大学、土地開発公社との協議を行ない九州大学との委託契約を締結することとなった。平成15年度は、G-1地点の上部遺構である平安時代の遺構を検出することを目標として調査を4月から開始した。G-1地点は第31次・G-2地点は第32次調査として継続調査を実施したため、この2地点の報告は、次の機会に報告する予定であるので、今回は概略だけに留め、全体の内容に関しては、後日の報告にまかせたい。

第30次調査

位置・環境

福岡市と志摩町との境界に中世山城である馬場城の推定地があるが、現在はその所在地、範囲や規模等に関しては不明である。その推定地から派生した痩尾根がヤツデ状に広がり、その尾根と尾根の間にある谷状の一角に平成13年に確認調査を行ったE-2地点の西側を調査対象とした。所在地は福岡市西区大字桑原字牛切外で、調査期間が平成14年8月1日～同年9月30日の2ケ月間を要して調査面積2,450㎡を調査した。

調査概要（Fig.25 ～ 27 巻頭図版4）

第23次調査のE-2地点から237m西側部分を調査対象とし、標高73 ～ 90mの谷頭部分の3,000㎡を調査範囲とし、実際の調査面積は2,450㎡である。両方の尾根から急激な斜面が下り、谷部は平坦地のない部分が多く、その中でも僅かな平坦地や斜面に伏焼土壙を大小合わせて6基検出した。全調査区に包含層は検出されず、出土遺物は全くない。伏焼土壙は壁が高温で焼かれていることから炭焼き窯と考えられるが、出土遺物が無いことから時期の決定はできなかった。

検出遺構

伏焼土壙（SO-01 ～ SO-06）（Fig.25 ～ 27 PL.3・4）

SO-01は調査区の北西隅平坦地から下った斜面に位置し、標高は82 ～ 83mのライン上にある。長径1.50m ×短径1.17m ×深さ0.26mを測り、北側が方形、南側が丸くなる形状である。壁面は赤く堅い状況からして高温で焼かれていることが観察され、深さが0.26mしかないことからかなりの削平を受けていることが考えられる。座標は長軸北西側でX66.2660、Y-73.2038、南東側はX66.2642、Y-73.2028である。

SO-02は調査区の南側平坦部分に位置し、標高は76mのライン上にある。長径1.1m ×短径0.84m ×深さ0.36mを測る円形に近い形状である。壁面は01と同じように赤く堅く焼き締められているが、北西の一部と床面は上部に炭が堆積するだけで、あまり焼けていない。座標は長軸東側でX66.2644、Y-73.1732、西側はX66.2634、Y-73.1758である。

SO-03はSO-02の北西方向の平坦部分に位置し、標高は76mのライン上にある。形状は二重の円形を呈し、境は段を有する。長径0.90m ×短径0.82m ×深さ0.14mを測り、南に二重の段を有するが、北

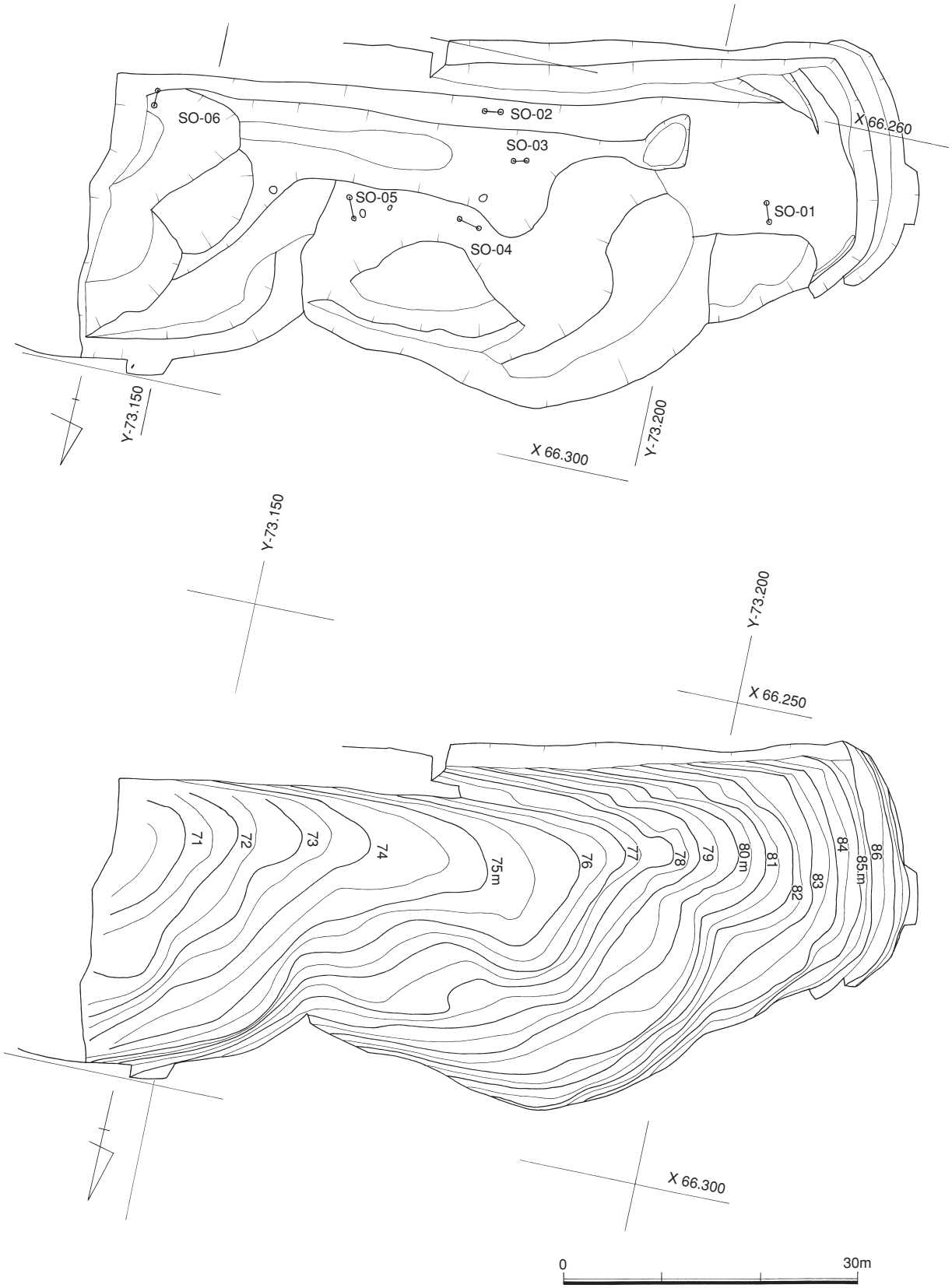


Fig.25　30 次調査遺構配置図とコンタ図（縮尺 1/600）

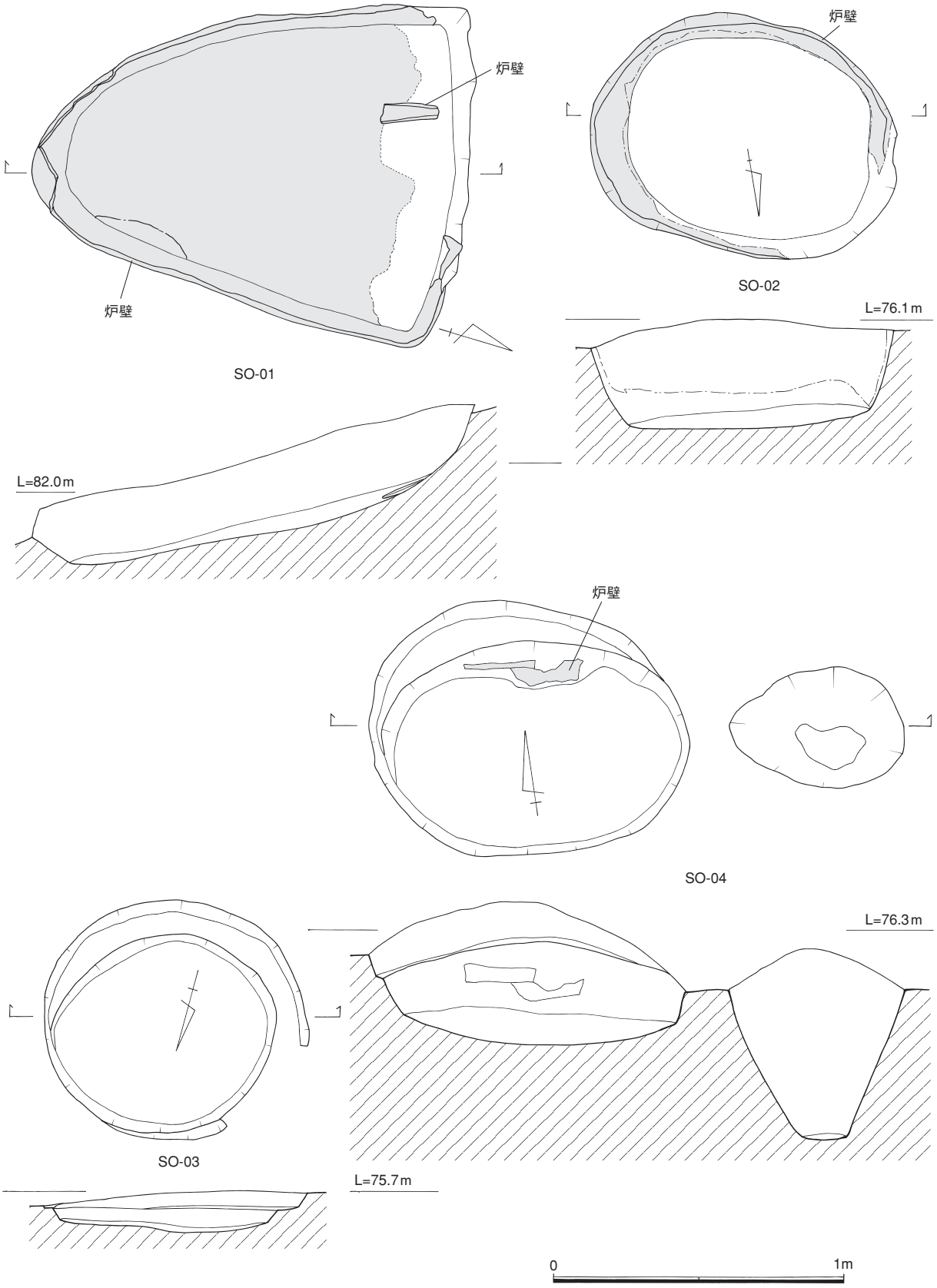


Fig.26　30 次調査伏焼土壙平面・断面図 -1（縮尺 1/20）

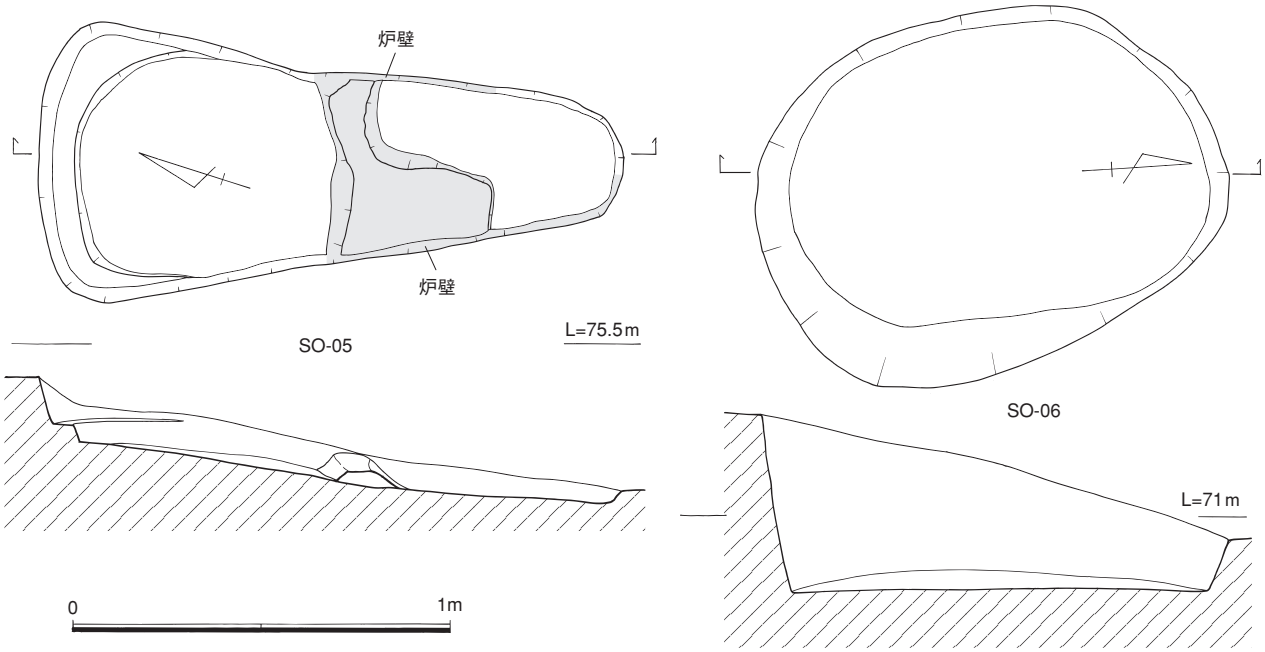


Fig.27　30 次調査伏焼土壙平面・断面図 -2（縮尺 1/20）

にはない。二重の壁面は赤く堅いが、底面はあまり焼けていない。深さが 0.14m しかないことからかなりの削平を受けている。座標は長軸北東側で X66.2682、Y-73.1776、南西側は X66.2672、Y-73.1792 である。

SO-04 は調査区の中央の平坦部分に位置し、標高は 76 ～ 77m のライン上にある。SO-04 だけ東側に深さの深い Pit を伴う。長径 1.1m ×短径 0.88m ×深さ 0.35m を測る北側に段を有する円形に近い形状である。付属 Pit は SO-04 と関係があるかは不明であるが、長径 0.6m ×短径 0.4m ×深さ 0.52m を測る不整形楕円形である。壁面は北側のみ赤く堅く焼き締められているが、他はあまり焼けていない。座標は長軸東側で X66.2755、Y-73.1742、西側は X66.2755、Y-73.1768 である。

SO-05 は SO-04 の東側、調査区の中央の平坦部分に位置し、標高は 75 ～ 76m のライン上にある。遺存状態が悪く明確ではないが、長径 1.504m ×短径 0.7m ×深さ 0.1m を測り、二つの Pit が重なり合った形状を示す。形状的には隅丸長方形である。中央部に段を持ち段の東側の壁だけが堅く焼けている。北側にも段を有している。ただ、他の側壁や床面には多くの炭化物を含む土が入っていたことから伏焼土壙として取り扱った。座標は長軸北西側で X66.2788、Y-73.1642、南東側は X66.2768、Y-73.1629 である。

SO-06 は調査区の東側隅の平坦部分から 23 次調査に向かって傾斜する部分に位置する。標高は 71 ～ 72m のライン上にある。長径 1.25m ×短径 0.95m ×深さ南側で 0.45m、北側で 0.15m を測る楕円形である。壁面は著しく焼けてはいない。座標は長軸北側で X66.2717、Y-73.1417、南側は X66.2744、Y-73.1417 である。

G 地区の試掘調査

所在地：福岡市西区大字元岡字宮草他調査期間：平成14年10月1日～平成16年3月28日

試掘調査対象面積：92,675㎡　製鉄遺構・瓦溜確認・試掘調査面積：5,982㎡

位置・環境

G 地区は福岡市今宿横浜から志摩町を結ぶ県道福岡－志摩線の志摩町に近い福岡市西区大字元岡字宮草他に位置し、福岡市、前原市、志摩町との境界をなす地区にある。西側には志摩町馬場、南には前原市志登支石墓や勾玉の工房跡が発見された遺跡がある。この宮草と志登支石墓を結ぶ線は陸橋となる部分で、今津湾と加布里湾とが近くまで接近しており、糸島平野と志摩半島を結ぶ唯一の陸橋である。宮草地区は40m ～ 60m の痩せ尾根が八の字状に広がっている。この尾根に前方後円墳である元岡古墳群Ⅰ群1号墳と円墳1基がある。痩せ尾根の間に谷部が南側に広がり、南側に数多くの遺跡を発見した。又、元岡・桑原遺跡群をのせる基盤層である花崗岩バイラン土には砂鉄の含有量が多い。製鉄を行う際の要素として非常に重要な材料が身近に得られることは第一の条件であり、それが元岡・桑原遺跡群に数多くの製鉄遺構が造られたことを物語っている。

試掘調査

G 地区には2箇所の製鉄遺構確認調査・瓦溜遺構確認調査と新しい地区の試掘調査がある。G-1地区は瓦溜遺構確認調査（第31次調査、遺跡番号0242）、G-2地区は製鉄遺構確認調査（第32次調査、遺跡番号0243）である。G-3地区は、平成7・8年度の試掘調査時に試掘できなかった地区である。調査は平坦地・谷部を併せて89,000㎡（G-3地区）ある。早急に試掘調査を実施し、遺跡の有無を確認しなければ全体計画等に支障をきたしかねない状況との説明をうけた。そのため九州大学統合移転対策推進室より平成15年5月23日付「九大室統第 A-23号」にて試掘依頼があり、平成15年6月から試掘調査にかかるべく協議を開始し、地元説明を行い、7月から谷部・斜面にある雑木・竹等の伐開、8月から本格的に試掘調査を実施し、平成15年10月30日をもって終了した。なお、G-1地点は第31次・G-2地点は第32次調査として継続調査を実施したため、この2地点の報告、及び G-3地点の試掘トレンチ出土の遺物については、次の機会に報告する予定であるので、今回は概略だけに留め、全体の内容に関しては、後日の報告にゆだねたい。

G-1地区（0242）元岡・桑原遺跡群第31次調査（MOT-31）

所在地福岡市西区大字元岡字宮草　　製鉄遺構・瓦溜確認調査面積1,975㎡

調査期間 平成14年10月1日～平成16年3月28日

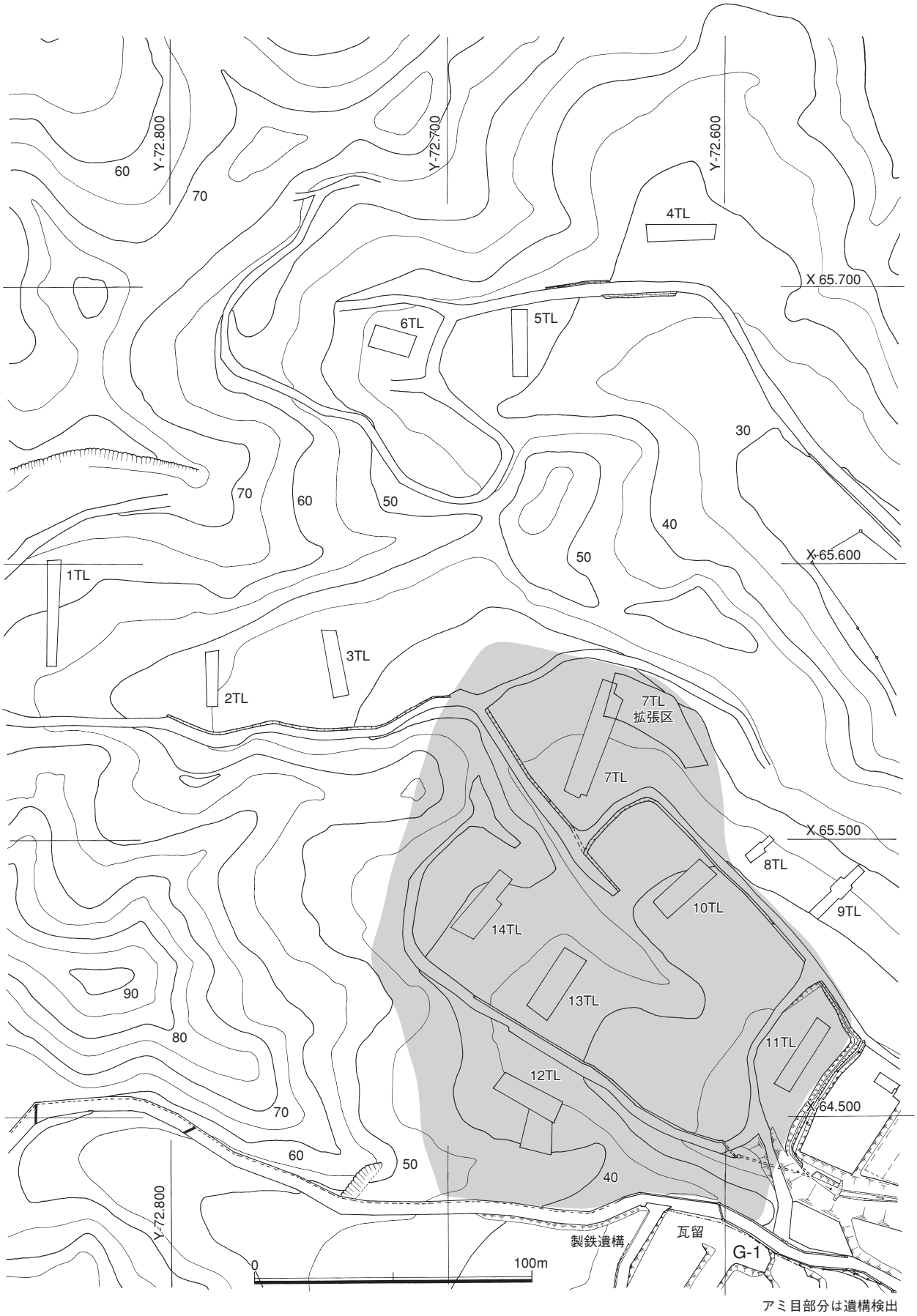
位置・環境

調査地点は幅30m～60mの谷部のほぼ中央部に位置し、両側に痩せ尾根が八の字状に広がっている。周辺部の西側尾根には前方後円墳である元岡古墳群Ⅰ群1号墳と円墳1基がある。

検出遺構の概要

古墳時代の住居址、瓦を焼いた平窯1基、溝18条、掘立柱建物5棟、瓦溜2ケ所、鍛冶炉6ケ所、製鉄遺構、柱穴多数検出された。

瓦溜部分は北側台地から検出され、「コ」ノ字状の溝状遺構から多量の瓦を検出した。瓦の出土部分は溝状となっており、幅4 ～ 5m、深さ0.2 ～ 0.4m ある。SX-04の中にも瓦の一群が出土した。この他溝状遺構が18条検出した。中央部に集中しており、北西側には瓦も出土している。平窯1基は、瓦溜遺構及び大型建物3×5間の東側から検出された。これにより、瓦溜遺構の意味も説明できた。しかし、瓦溜、



アミ目部分は遺構検出

Fig.28　G-3 地区試掘トレンチ配置図（縮尺 1/2,000）

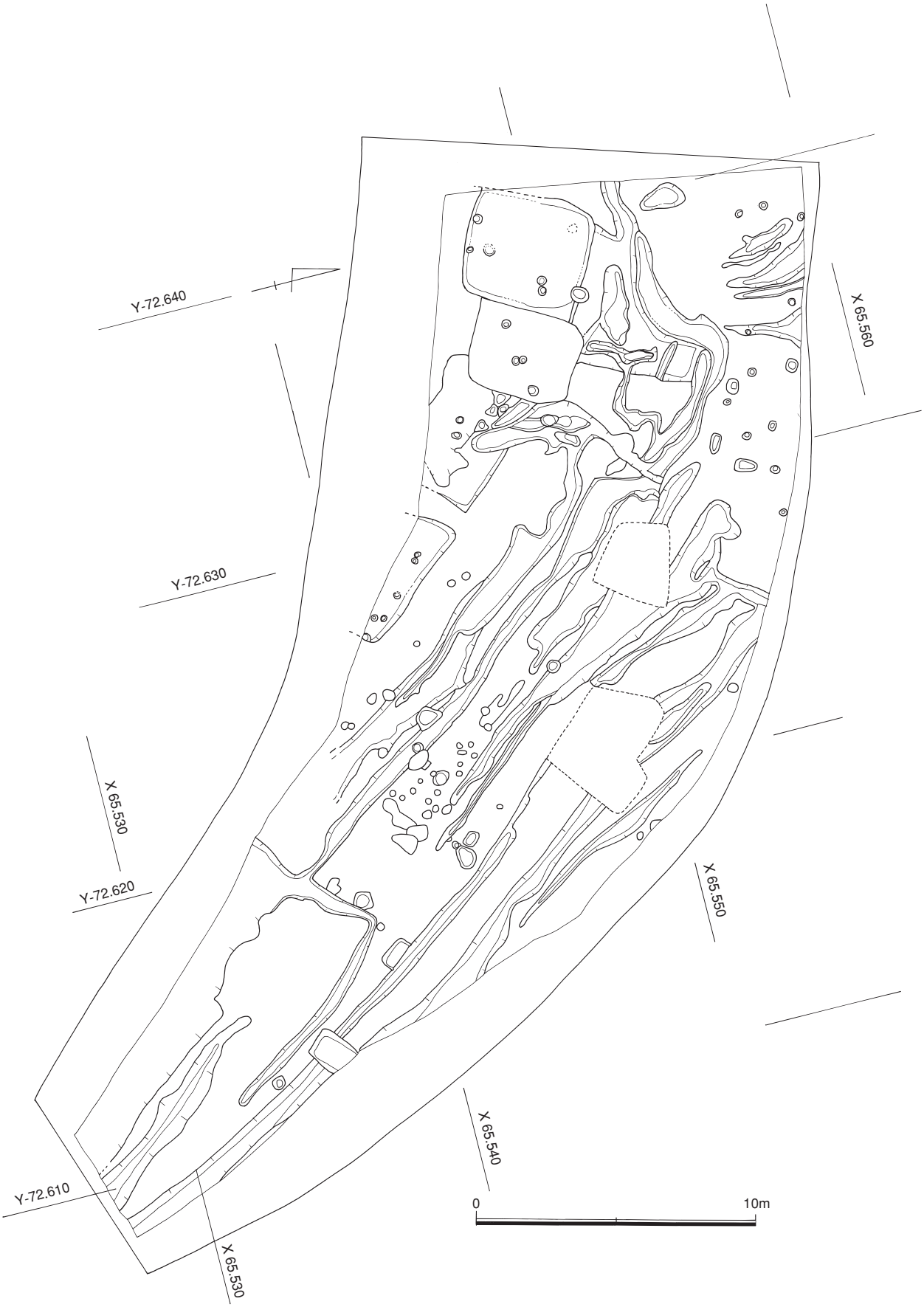


Fig.29 第 7 トレンチ拡張区遺構配置図（縮尺 1/200）

窯跡からは平・丸瓦しか検出されていない。この平瓦の文様形態が鴻盧館で使用された平瓦と同一であり制作工房であったことが判明した。鍛冶炉は南側に集中し、「コ」ノ字状溝の北東側にほぼ列をなして6基検出された。鍛冶炉にはそれぞれ廃滓土壙をもつ。焼土、鞴の羽口等も出土。製鉄遺構は調査区西側にある市道の中に範囲が入っていることから、本格調査は市道を撤廃してからの調査となる。ここにも大規模な製鉄遺構が存在したことが、明らかとなった。このほか北側に鍛冶炉、古墳時代の竪穴住居址・大溝が検出され、溝幅は15m前後で深さ2mを測る。

出土遺物

瓦・土師器・須恵器・鉄滓等が多数出土した。報告は本報告時の予定である。今回は瓦溜遺構・製鉄遺構の確認調査であったが、平安時代の遺構の広がりと古墳時代の大溝・竪穴住居址等を検出した。

G-2地区(0257)元岡・桑原遺跡群第32次調査（MOT-32）

所在地福岡市西区大字元岡字宮草　　製鉄遺構確認調査面積：1,700㎡

調査期間　平成16年1月20日～平成16年3月31日

位置と環境

G-2は平成7・8年度の試掘調査の結果、対象面積49,900㎡の内、いずれの谷も東側傾斜面を中心に弥生時代甕棺、奈良時代の土師器、須恵器、中世陶磁器をはじめ多量の鉄滓が出土している。鉄滓が多く包含していることから、製鉄遺構確認調査をこの地点に絞って調査することとした。

検出遺構概要

調査区の大部分が丘陵の落ち際にあたり、すぐに青灰色シルトに達している。調査区の南側でかろうじて遺構を検出できたが、大部分は青灰色シルト層で覆われている。 南側には古墳時代の溝、柱穴、竪穴住居址等を検出した。南側の遺構の本格的調査は平成17年度に行われているので、詳細は本報告にゆだねる。

出土遺物

青灰色シルト層からはたしかに土師器、須恵器、鉄滓等は出土するが、鉄滓の量も少なく、製鉄炉を彷彿させる量ではない。

まとめ　今回の調査は製鉄遺構確認調査であったが、鉄滓等の出土も少量で、製鉄遺構の確認には至らなかった。住居址、溝等から出土した遺物に関しても本報告にゆだねる。

G-3地区(0240)元岡・桑原遺跡群第30次調査（MOT-30）

所在地：福岡市西区大字元岡字宮草他調査期間：平成15年7月1日～平成15年10月30日

試掘調査対象面積：89,000㎡　試掘調査面積：2,307㎡

試掘調査

G-3地区の試掘調査は、地区の北側地区の雑木・竹等の伐開を実施し、平成15年8月から本格的な試掘調査を開始した。平成7・8年度の試掘調査の結果では、G-3地区は対象外であった。その後、協議が整い、試掘調査の依頼があったが、本格的調査に入っていたため実施できなかった。

平成14年度に再度試掘依頼があり、第23次調査の確認調査が終了後に行う予定をたてた。この部分は試掘調査を実施していない平坦地・谷部が89,000㎡あり、早急に試掘調査を実施し、遺跡の有無を確認しなければ全体計画等に支障をきたす状況であるとの説明を受けたため、早急に九州大学と再度協議を行った。平成15年6月協議を開始し、地元説明を行い、7月から谷部・斜面にある雑木・竹等の伐

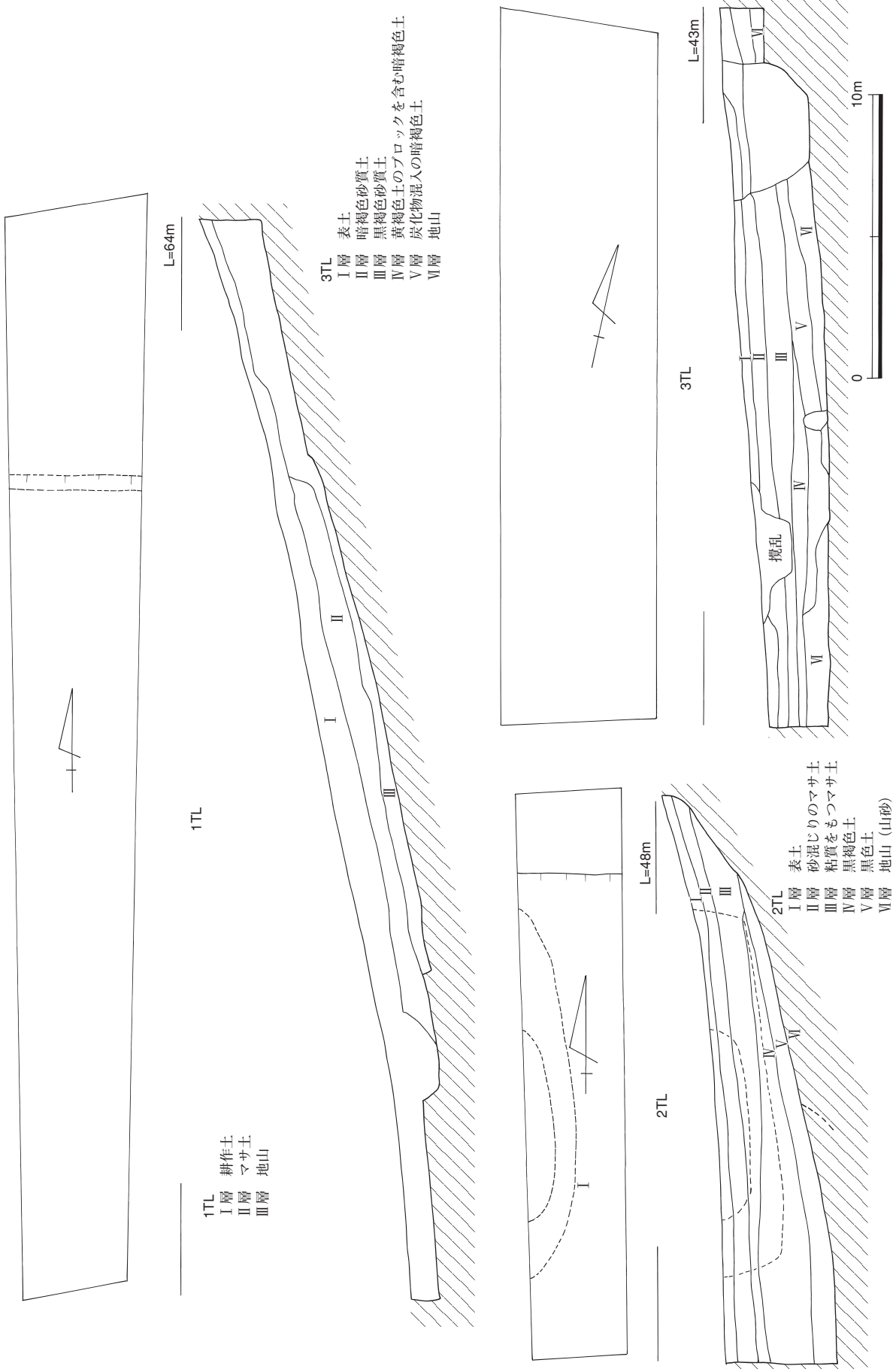


Fig.30　第１～３トレンチの土層断面図（縮尺 1/200）

開を開始し、搬入道路の整備等を行った。8月から本格的に試掘調査を実施し、平成15年10月30日をもって終了した。なお、G-1地点は第31次・G-2地点は第32次調査として継続調査を実施したため、この2地点の報告及びG-3地点の試掘トレンチ出土の遺物については、次の機会に報告する予定である。今回は概略だけに留め、全体の内容に関しては、後日の報告にゆだねたい。

試掘調査範囲の立地（Fig.28 ～ 34 PL.10 ～ 19）

試掘調査範囲は昨年平安時代の遺構を確認したG-1地区の北側に位置し、標高24 ～ 55mの谷部及び丘陵斜面である。両側に痩せ尾根が広がっている。痩せ尾根の間にある谷部は南側に位置し、幅40m前後で東南側に大きく広がり、遺構の存在を彷彿させる立地である。

各トレンチの堆積状況と遺構確認

第1トレンチ（Fig.28・30 PL.10-5 ～ 7）試掘範囲の西側端（座標X65.600Y-72.900）付近に南北にトレンチを設定した。土層は単純で遺構の検出はみられなかった。165㎡を調査した。

第2トレンチ（Fig.28・30 PL.10-8,11-1・2） 試掘範囲の西側（座標X65.550Y-72.780）付近の平坦部に南北トレンチを設定した。撹乱が激しく、トレンチの真ん中に大きな撹乱がみられた。土層は黒褐色土・黒色土がみられるが、遺構の検出はみられなかった。80㎡を調査した。

第3トレンチ（Fig.28・30 PL.11-3 ～ 5） 試掘範囲の西側（座標X65.560Y-72.740）付近の平坦部に南北にトレンチを設定した。ここも撹乱が激しい。土層は単純ではあるが、最下層に炭化物混入の暗褐色土がみられたが、遺構の検出はみられなかった。120㎡を調査した。

第4トレンチ（Fig.28・31 PL.11-6 ～ 8、12-1） 試掘範囲の北東側端（座標X65.720Y-72.610）付近に東西にトレンチを設定した。土層は単純であったが、Ⅳ層の暗褐色粘質土、Ⅴ層黒褐色粘質土に炭化物を多く混入していたが遺構の検出はみられなかった。150㎡を調査した。

第5トレンチ（Fig.28） 試掘範囲の北側端（座標X65.690Y-72.670）付近に南北にトレンチを設定したが、盛土が5mもあり、危険であるため調査を中止した。150㎡を調査した。

第6トレンチ（Fig.28・31 PL.12-2 ～ 4） 試掘範囲の北側（座標X65.680Y-72.720）付近に東西にトレンチを設定した。土層は単純で遺構の検出はみられなかった。135㎡を調査した。

第7トレンチ（Fig.28・29・31 PL.12-5 ～ 8,13-1 ～ 8,14-1 ～ 8,15-1 ～ 5）試掘範囲の中央部（座標X65.550Y-72.650）付近に南北にトレンチを設定した。撹乱は多いが、二面の遺構を確認した。一面目に竪穴住居址を検出し、二面目は最下層に溝状遺構を検出した。溝内には多くの炭化物、土器等が出土した。遺構の年代は平安時代から古墳時代と考えられる。412㎡を調査した。

第8トレンチ（Fig.28・32 PL.15-6・7） 試掘範囲の南東の斜面（座標X65.500Y-72.590）付近に東西にトレンチを設定した。土層は単純で遺構の検出はみられない。28㎡を調査した。

第9トレンチ（Fig.28・32 PL.15-8,16-1 ～ 3） 試掘範囲の南東の斜面（座標X65.480Y-72.560）付近に東西にトレンチを設定した。土層は単純で遺構の検出はみられない。82㎡を調査した。

第10トレンチ（Fig.28・32 PL.16-4 ～ 8,17-1） 試掘範囲の南側（座標X65.480Y-72.610）付近に谷部に平行にトレンチを設定した。ここも撹乱は多いが、二面の遺構を確認した。一面目には青磁が出土した包含層、二面目はPitや溝状遺構を検出した。溝内には多くの炭化物、土器等が出土した。遺構の年代は平安時代から古墳時代と考えられる。216㎡を調査した。

第11トレンチ（Fig.28・33 PL.17-2 ～ 8） 試掘範囲の南側端（座標X65.420Y-72.580）。谷部に平行にトレンチを設定した。ここも撹乱は多いが、二面の遺構を確認した。一面目には白磁や土師器を包含する包含層（Ⅴ層）を検出し、二面目は石組み遺構やPit・溝を確認した。最下層に溝状遺構を検出した。溝から炭化物、土器等が出土した。遺構の年代は平安時代から古墳時代。174㎡を調査。

Fig.31　第 4,6,7 トレンチの土層断面図（縮尺 1/200）

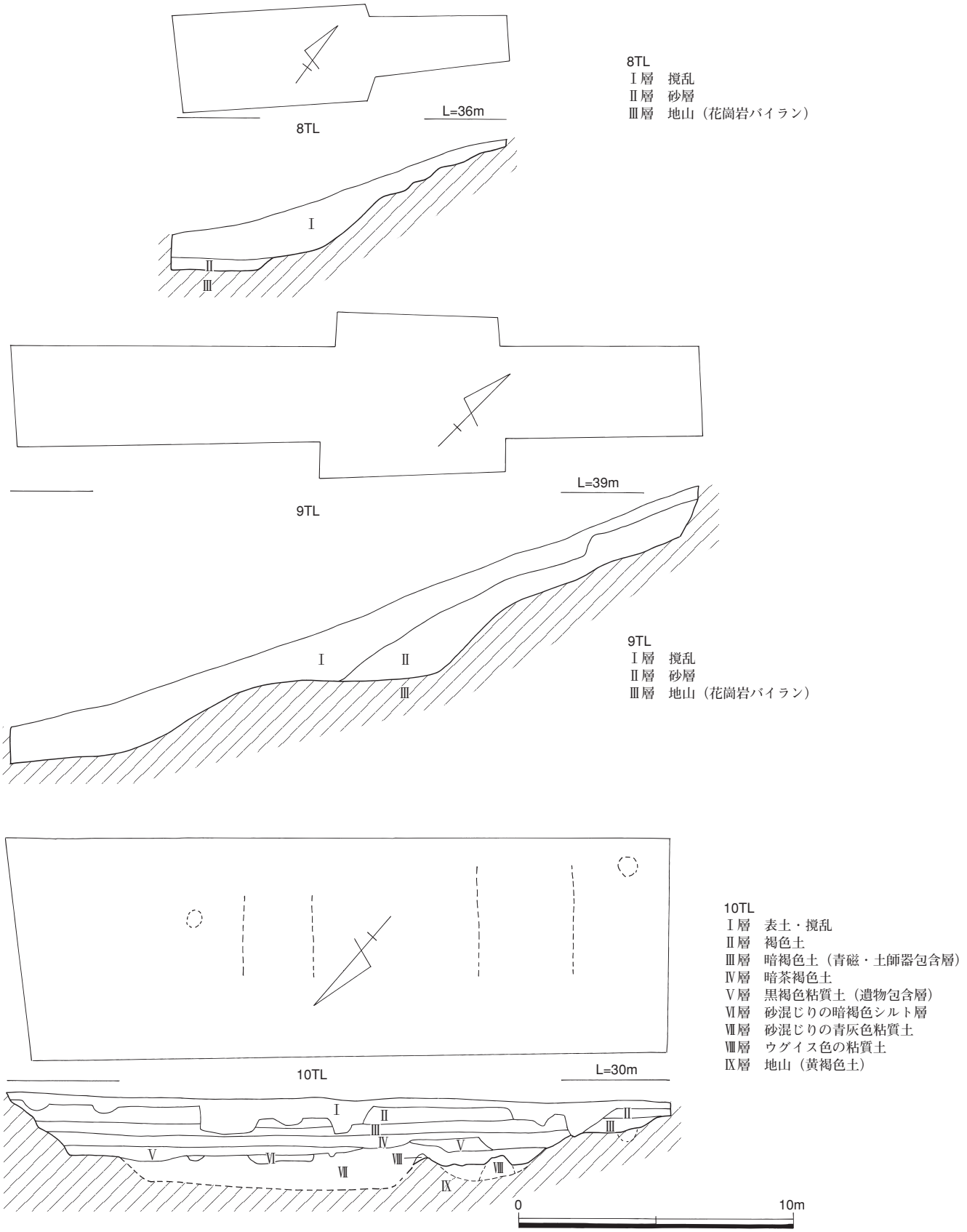


Fig.32　第 8 ～ 10 トレンチの土層断面図（縮尺 1/200）

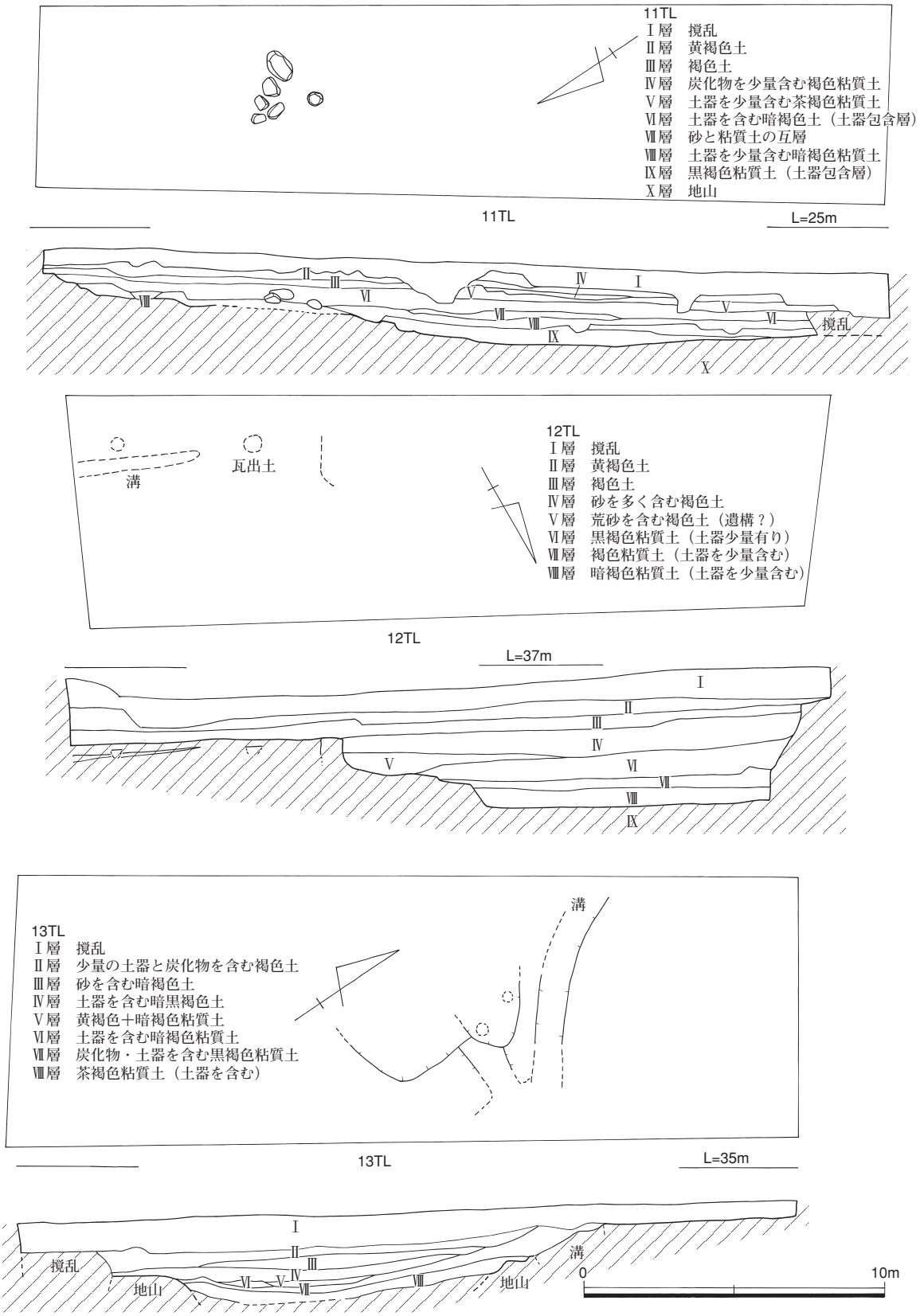


Fig.33　第 11 ～ 13 トレンチの土層断面図（縮尺 1/200）

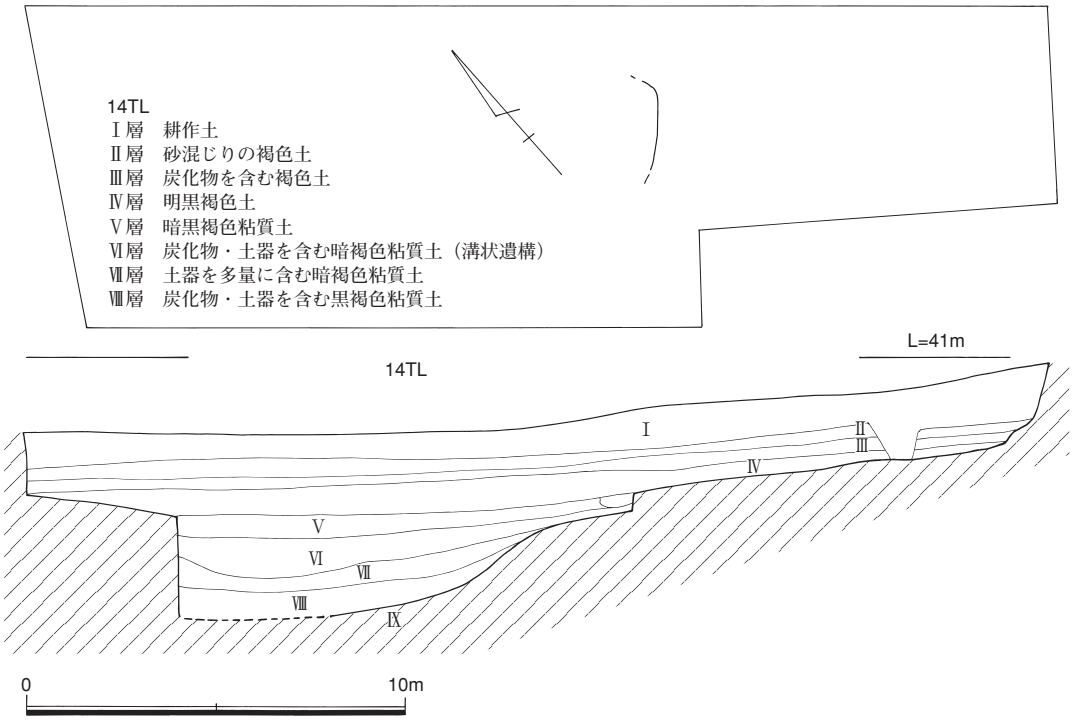


Fig.34　第 14 トレンチの土層断面図（縮尺 1/200）

第12トレンチ（Fig.28・33 PL.18-1 ～ 8）試掘範囲の南側端（座標 X65.400Y-72.660）付近の斜面に平行にトレンチを設定した。南東側は台地上に溝・住居址?・Pit 群が確認され、Pit 内から1点平瓦が出土した。台地が落ちる部分で、土器を少量出土した。168㎡を調査。

第13トレンチ（Fig.28・33 PL.19-1 ～ 5）試掘範囲の南側の丘陵と丘陵とに挟まれた谷部（座標 X65.450Y-72.660）付近に南北にトレンチを設定した。遺構は上面に竪穴住居址・溝を確認した。最下層には多くの土器を含む溝状遺構を検出した。時期は平安時代から古墳時代。234㎡を調査した。

第14トレンチ（Fig.28・34 PL.19-6 ～ 8）第13トレンチの南側（座標 X65.470Y-72.700）付近に南北にトレンチを設定した。遺構はⅥ層に炭化物・土器群を含む溝状遺構を確認した。第Ⅶ・Ⅷ層にも炭化物・土器を含む包含層がある。時期は平安時代から古墳時代。193㎡を調査した。

試掘調査の結果

試掘調査の結果、谷部だけの調査ではあるが（尾根部に関しては伐開後に試掘する必要がある）、7・10 ～ 14トレンチで遺構を確認した。この範囲は昨年瓦溜、平窯等や平安時代の遺構を確認した G-1 地区の北側に位置し、標高24 ～ 55m の谷部及び丘陵斜面である。遺構の密度が高い11 ～ 14がある。調査対象は第12トレンチの南から北側の第7トレンチまでの東側で23,400㎡（130m ×180m）の範囲で、特に第12トレンチと G-1 地区との境界部分は要注意である。この部分は、G-1 地区で製鉄遺構や瓦工房が検出されているだけに非常に重要である。ただ道路が通っているためこれを廃止しての調査が必要である。

試掘トレンチ面積

トレンチ名	㎡数	トレンチ名	㎡数	トレンチ名	㎡数
1	165	6	135	11	174
2	80	7	412	12	168
3	120	8	28	13	234
4	150	9	82	14	193
5	150	10	216	計	2,307㎡

元岡・桑原遺跡群第36次調査

1.調査の概要

36次調査区は当初、水崎山から伸びる丘陵先端部のうち新弁天橋から東泉寺を結ぶ道路から北東側の部分とその南東側に広がる谷部を合わせた約14,000㎡近くを調査対象とした。東南側の谷部については平成8年度の確認調査で7本のトレンチを入れた結果、遺構が存在しない可能性が高いとされていたが、調査を開始するにあたって細かく試掘トレンチを設定して地盤まで掘り下げたが、今回も遺構・遺物ともに確認できなかったため、谷部は調査範囲から外して、丘陵上の約8,000㎡を本調査の対象とした。

丘陵上に関しては昭和40年代まで使用された近現代墓と直径30m前後の円墳である経塚古墳が存在することは調査開始前から判明していた。ただ試掘調査は行っておらず、詳しい状況は不明であった。調査前の2003年8月から森林組合に依頼して伐採を行い、9月1日から調査を開始した。

調査区は東側に傾斜する斜面状に位置する。古墳を除いた部分が南の高所から北側低地と東側の谷に向かって段造成されており、いちばん西南側の高所が近現代墓地、その下は水田や畑として利用されていた。調査時にはこの造成面を調査区としてA区~F区まで設定した(Fig.37)。調査の結果、各区の遺構は下記のとおりである。

A区　中世墓、近世~現代墓、古代製鉄関連遺構、経塚古墳周濠

B区　経塚古墳(5世紀中頃)　中世墓群(経塚古墳墳頂部敷石遺構)　近代墓(経塚古墳北側裾部)

C区　土坑

D区　土坑

E区　竪穴式住居、掘立柱建物、柱穴群

Fig.35　元岡・桑原遺跡群第36次調査位置図(縮尺1/8,000)

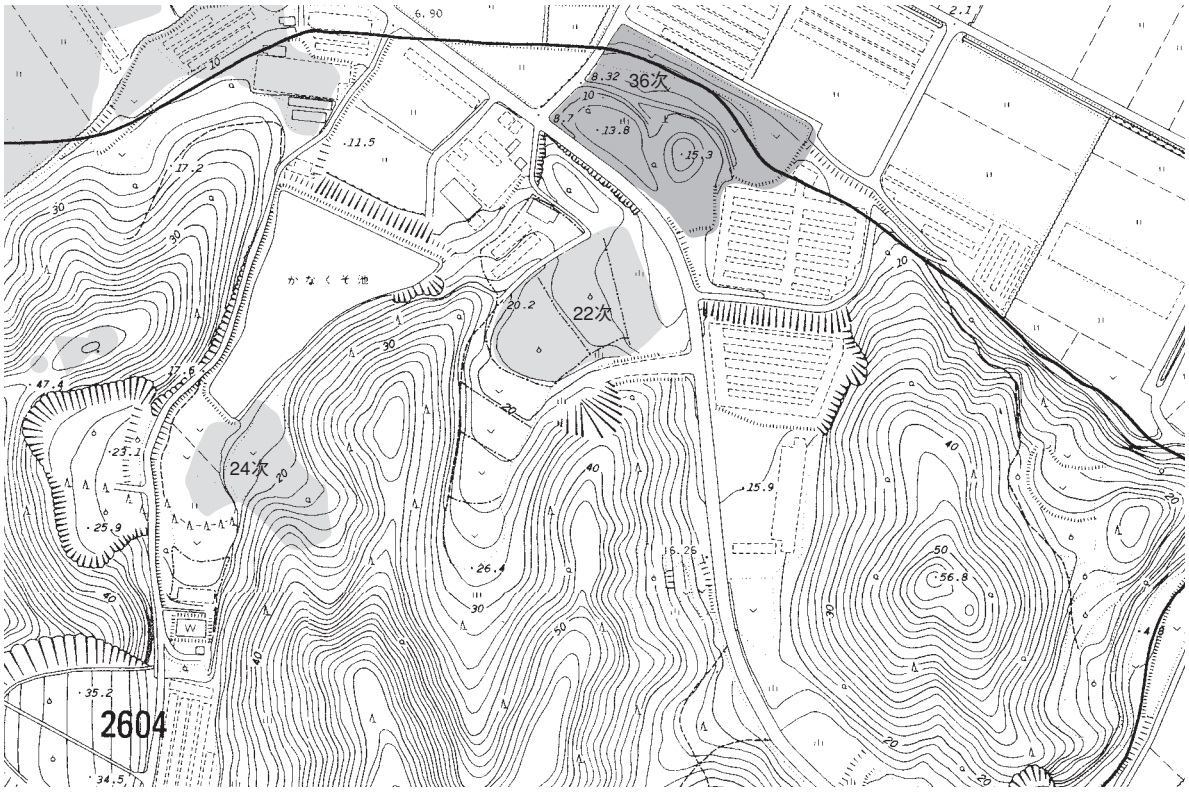


Fig.36　36 次調査区周辺図（縮尺 1/4,000）

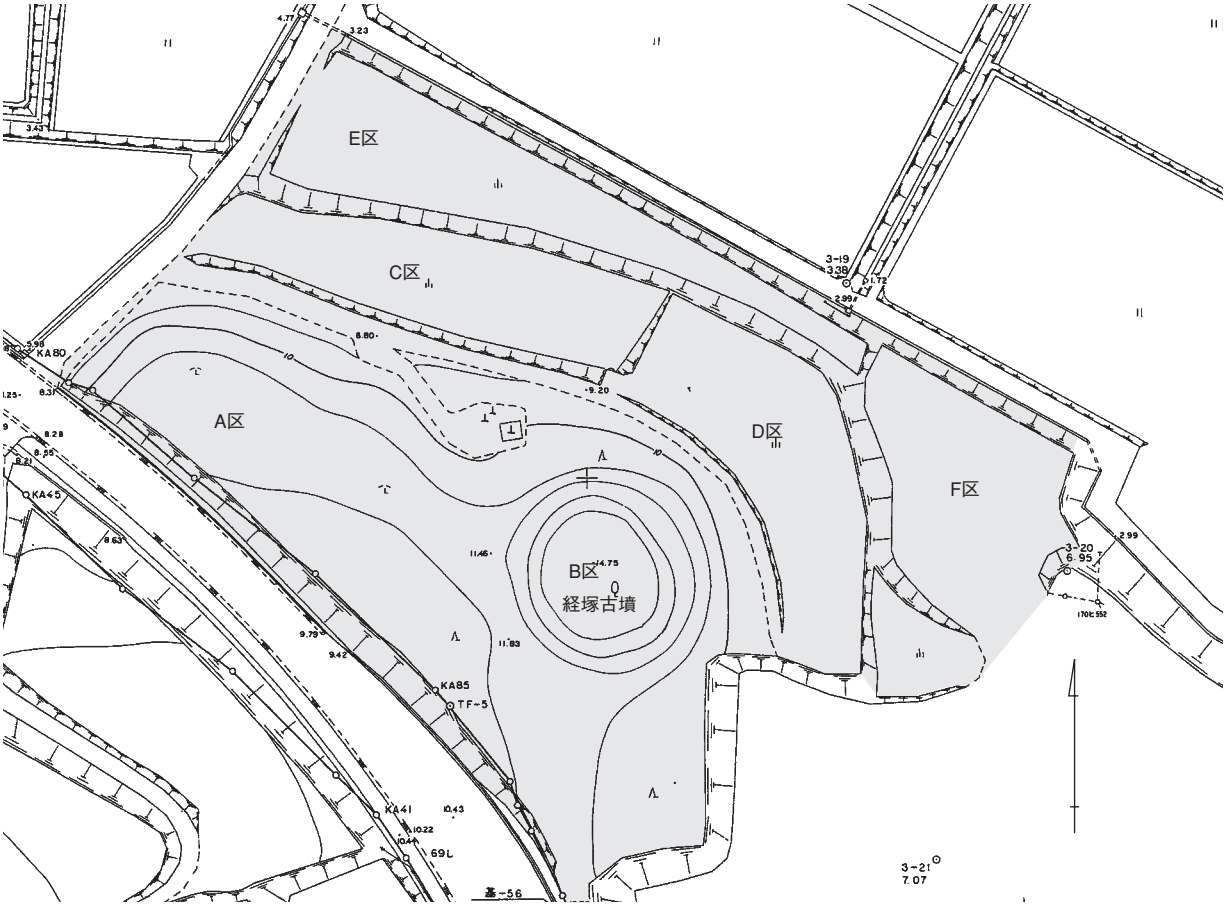


Fig.37　36 次調査区現況測量図（縮尺 1/1,000）

Fig.38　墳丘現況測量図（縮尺 1/400）

F 区　遺構無し

C･D･F 区は削平が著しく、遺構は潰滅的だったが、今回はA～F 区のうちB 区の発掘調査報告書であり、経塚古墳本体とその墳頂部に位置する中世墓と思われる敷石遺構について報告する。また、B 区においても経塚古墳の北側裾部にある近代墓に関してはA 区の近世墓群と一緒に報告するものである。

2.調査の記録

(1) 立地と環境

経塚古墳は水崎山から北東方向に向かって伸びる丘陵先端に位置する円墳である。舌状台地の先端とその下の水田との高低差は現状で12m を測り、古墳築造時は今津湾に元岡川が注ぐ河口部であったと思われる。西側の丘陵中腹には全長24m の前方後円墳である金屎古墳が、また谷を挟んだ東側の丘陵には全長50m の前方後円墳である塩除古墳が位置しており、糸島半島東側の首長墓と考えられている。経塚古墳は円墳であるが、墳丘径は30m を測り、これら首長墓の系列に入ると考えられる。

(2) 現状

調査区は中世から近現代にかけての断続的な墓群形成と戦後の道路建設等により大きく改変されている。特に古墳東側は造成により大規模な削平を受けたものと思われ、古墳西側で確認した周溝が全周し

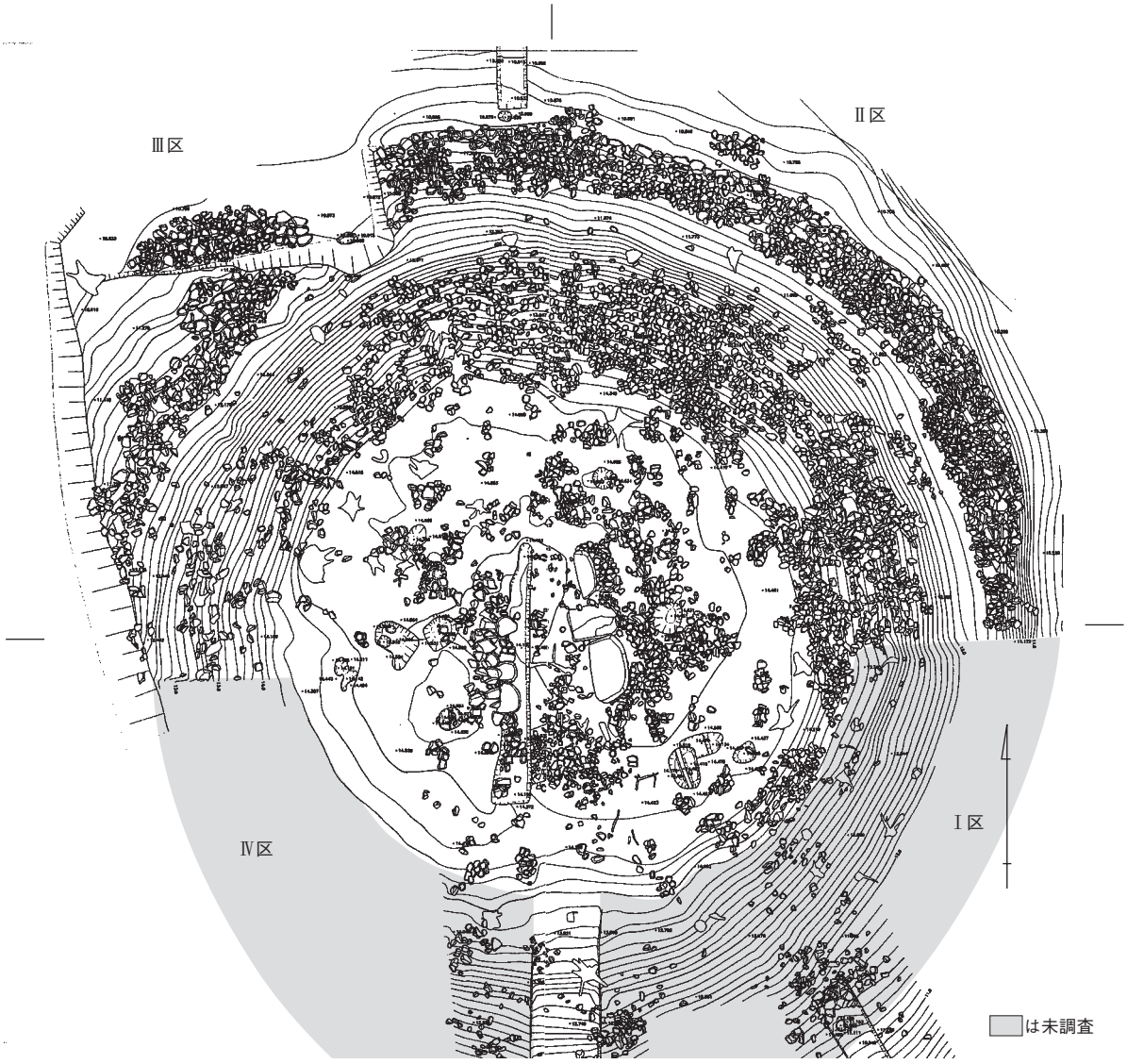


Fig.39　墳丘測量図（縮尺 1/200）

ていたのかは不明である。また墳丘の西側では集落から近代墓に続いていた人道を自動車が通るよう広げた際に墳丘西側裾部を削っており、また道にできた轍を埋めるのに葺石を使用したため、墳丘西側の葺石は遺存状態が悪い。墳頂部には高さ2.1m、幅約1.7m、厚さ0.5m の板状の立石が２枚あり、石室の天井石と思われる。調査はまず表土の除去から始めたが、墳頂部及び葺石上も表土直下で墳丘に達した。

（3）規模と構造

1）墳丘　墳形は円形を呈す。墳丘は二段築成で幅1m のテラスをもつ。葺石端までの半径は14.8m を測る。また周溝底から墳頂までの高さは約4.5m、墳丘盛土の高さ3.6m を測る。盛土の下で古墳築造以前の旧地表面である黒色土層を確認した。

2）葺石　二段築成の上下斜面には葺いているが、テラスには葺いていない。最も葺石の遺存が良い墳丘北東側ではまず裾端に径30 ～ 40cm の大きめの石を並べて葺石端部を確定させた後、墳丘を12~17°の角度で分割する放射状の地割りを行っている。葺石による地割り線（Fig.40）を平板実測した図を見ると墳丘端部を巡る石はかなり正確な円を描くが墳丘Ⅲ区で検出した葺石端部は推定ラインから1m 近く内側を通っており、山側では若干径が小さく、全体的にはやや楕円形であったと思われる。地割り線と葺石端部が交わる場所では端石間に径10 ～ 20cm 程の石が置かれており、角度を測って小石を目印に置いて、それと墳丘中心を結んで地割り線を引いたと考えられる。地割り線は北東側ではかなり正確に放射状の

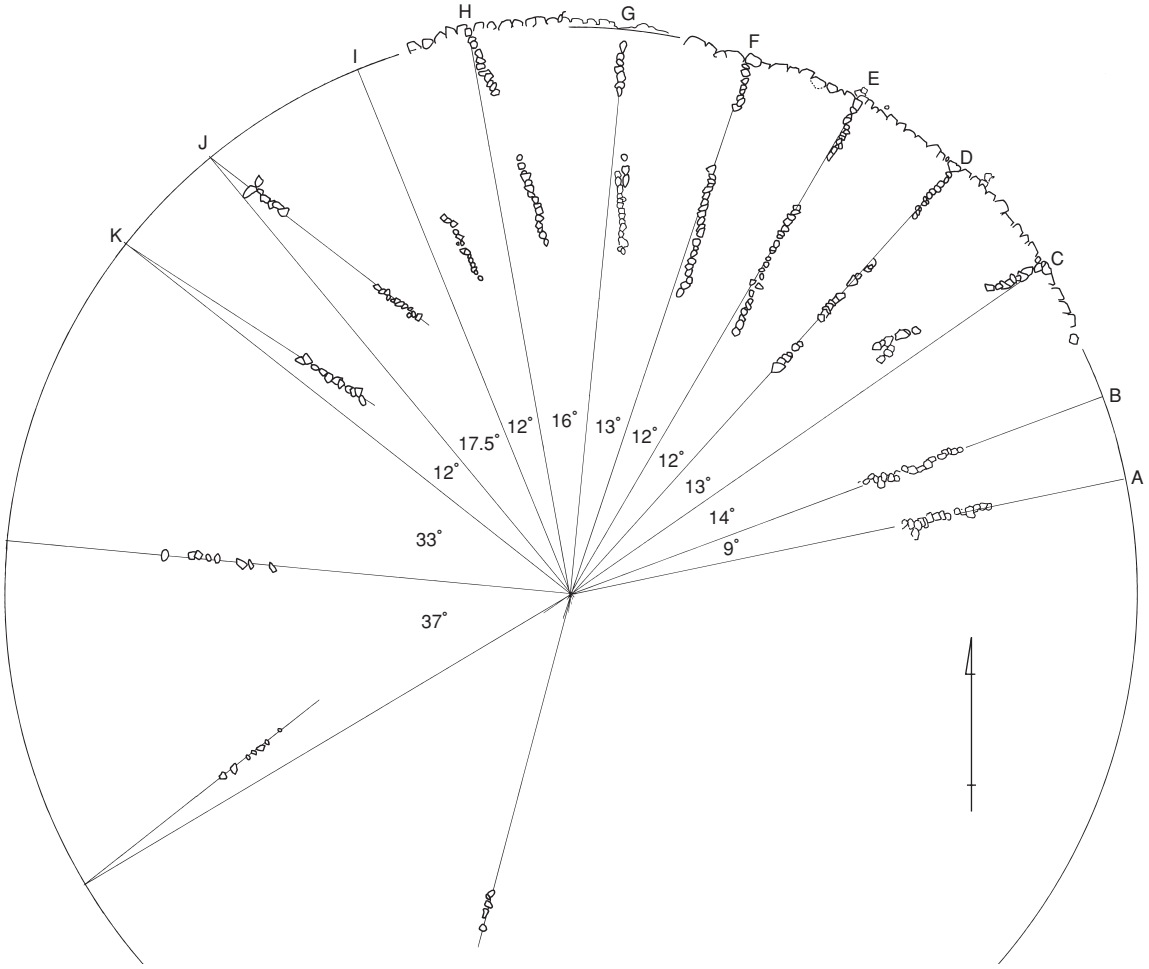


Fig.40　葺石割付図（縮尺 1/200）

ライン上に乗るが、北から西側のⅢ区に行くにつれてズレが大きく、中心より北側を通る。地割り線は石を葺く時には役割分担線としても利用したと思われ、付図で葺石石材の種類ごとに色分けしたものをみると地割り線をはさんで石材が異なる場合が多くみられる。葺石端部の石については北東側では花崗岩と変成岩を主とし、地割り線 A~E 間はそれほどの変化はみられない。そして地割り線 E から西側では石の葺き方は似ているものの、石材は堆積岩と凝灰岩が主体となる。この石材の変化は2段目の斜面についても同じことがいえる。またⅢ区では石材は花崗岩が主となる他、1段目全体に同じような径40cm ほどの石を使用するなど、石の葺き方自体が大きく異なる。遺存状態が悪くてやや不明瞭であるものの、石材の変化は2段目にも現れており、凝灰岩が減って花崗岩が主体となる。石の葺き方の違いはⅡ区東側の地割り線 C でも明確にみられ、線から西側では安山岩を葺いているが、東側では花崗岩と玄武岩・変成岩の角礫を主としており、敷き方も線から西側の安山岩が古墳表面に貼っているのに対して、東側では平らな石を少しずつ積み重ねている。この傾向は上段では若干異なるため、葺石を築く役割分担は地割り線を更に細かく分けていたと考えられる。

3）石室　保存のため石室の調査はおこなっていない。墳頂部立石は石室天井石の可能性が高いため、ある程度の破壊は受けているものと思われる。二つの立石間にある石が天井石で、動いてないとすれば石室の破壊は小規模なものと思われる。

4）周溝　当初周溝は葺石のすぐ外側を回っていたと推定された。そのため南・東・北の3方はもとも

と存在しないか、畑の造成による削平によって消滅し、西側は道路で削平されているため周溝は残っていないものと思われたが、A区に設定した試掘溝で周溝を確認したため、周溝が推定より外側を巡ることが判明した(Fig43)。周溝は葺石端から3m程離れ、幅6mを測る。墳丘中心から周溝外側縁まで25m弱、周溝が全周するとすれば直径49mを測る。周溝覆土は褐色を呈し、須恵器片が出土した。

(4) 古代～中世の遺構

1) 敷石群　墳頂部全体に分布する。表土直下で検出した。Fig41は墳頂部で検出した石の実測図であるが、中央やや東側には石室の天井石を使用したと思われる長さ2m前後の石が3枚並んでおり、中央の一枚は倒れ、その両側2枚は立石である。また中央やや西側の南北に長い点線の中にみえる礫群はトレンチにかかった石室西壁である。古代末から中世と思われる敷石遺構は表土直下にあり長い間露出していたと思われるため、抜かれたり動いたりしており、築造時とは形が変化したものも多いと思われる。そのため、石のまとまりをみながら39基に分けたが、本来とは異なった形に分けてしまったものもあると思われる。敷石は平面が方形もしくは楕円形を呈し径が1mを超える大型タイプと石を数個まとめて置いた小型タイプに区別される。大型タイプは墳頂部の中央に立つ2枚の立石の東側に分布する。特にSX012とSX021は立石の東側に接しており、明らかに立石を意識して組んでいる。それに対し小型のタイプは墳頂部の西半と東側の縁部を取り巻くように分布する。立石の西側、ちょうど墳頂部中央には明確な配石はみられないが、筑前続風土記拾遺や怡土志摩地理全誌（志摩篇）によると立石は水崎城の戦いで戦死した武将の墓として祭祀の対象となっていたようで、石の正面は祭祀場所として片付けられたためかもしれない。経塚古墳が保存の対象となったため配石群もそのまま保存することとしたが、遺構の性格や時期を確定するため、敷石遺構のうち2基（027、031）は実測後に石を外して下部構造を把握するためのトレンチを設定して掘り下げたが、結果は下に石組みなどの構築物はなかった。石を外した直下では掘り込みと思われる土色の違いを確認したが、全体が盛り土のためか不明瞭で、土層断面で掘り込みを確認することはできなかった。

SX001（Fig.44）　墳頂部の南端に位置する。主軸はN-14°-Eを測る。径20~30cmの角礫を数十個を径1mの範囲に敷いている。北側の石3個はやや石組みから外れており、別物である可能性もある。

SX003（Fig.44）　墳頂部南西側に位置し、主軸はN-55°-Eを測る。径約50cmを測る。径20cmの角礫を中心に配し、風化した花崗岩等を周囲に巡らす。

SX004（Fig.44）　墳頂部西側に位置し、主軸はN-86°-Eを測る。東西に長く、径76cmを測る。径20~45cmのやや長めの礫を組んでいる。礫の上面のレベルは南端の石以外ほぼ同じである。

SX005（Fig.44）　墳頂部南西隅に位置し、主軸はN-6°-Eを測る。やや東西に長く、長さ65cm、幅59cmを測る。長さ25cmほどの礫を使用し、中央に丸めの礫を置き、周囲を6個の石で囲む。

SX006（Fig.44）　墳頂部中央から北西寄りに位置し、主軸はN-3°-Eを測る。中央部の礫が残っていないものの、南北に長い長方形の大型タイプと考えて実測を行ったが、墳頂部西側に確実な大型タイプがないため、これも北東側。中央、南側の3基に分かれて小型タイプとなる可能性がある。大型タイプとすると長径2.1m、短径1.35mを測り、周囲に長さ25~35cmの礫を配し、中央部に板状の石を置くSX028や029に似た様相を示す。

SX007（Fig.44）墳頂部の西端やや北側に位置する。南北方向に細長く主軸はN-51°-Eを測る。長さ25cmほどの礫を南半では1列に、北側では2列に並べている。北側だけで小型タイプの敷石となる可能性がある。

SX008（Fig.44）　墳頂部北西端部に位置する小型タイプの配石である。主軸はN-90°-Eである。中央は径35cmの方形の礫で周囲に径25cmほどの礫を並べる。中央礫の上面は平らに近い。

SX009（Fig.44）　墳頂部北端部に位置し、主軸はN-78°-Eを測る。平面は東西方向に長い楕円で

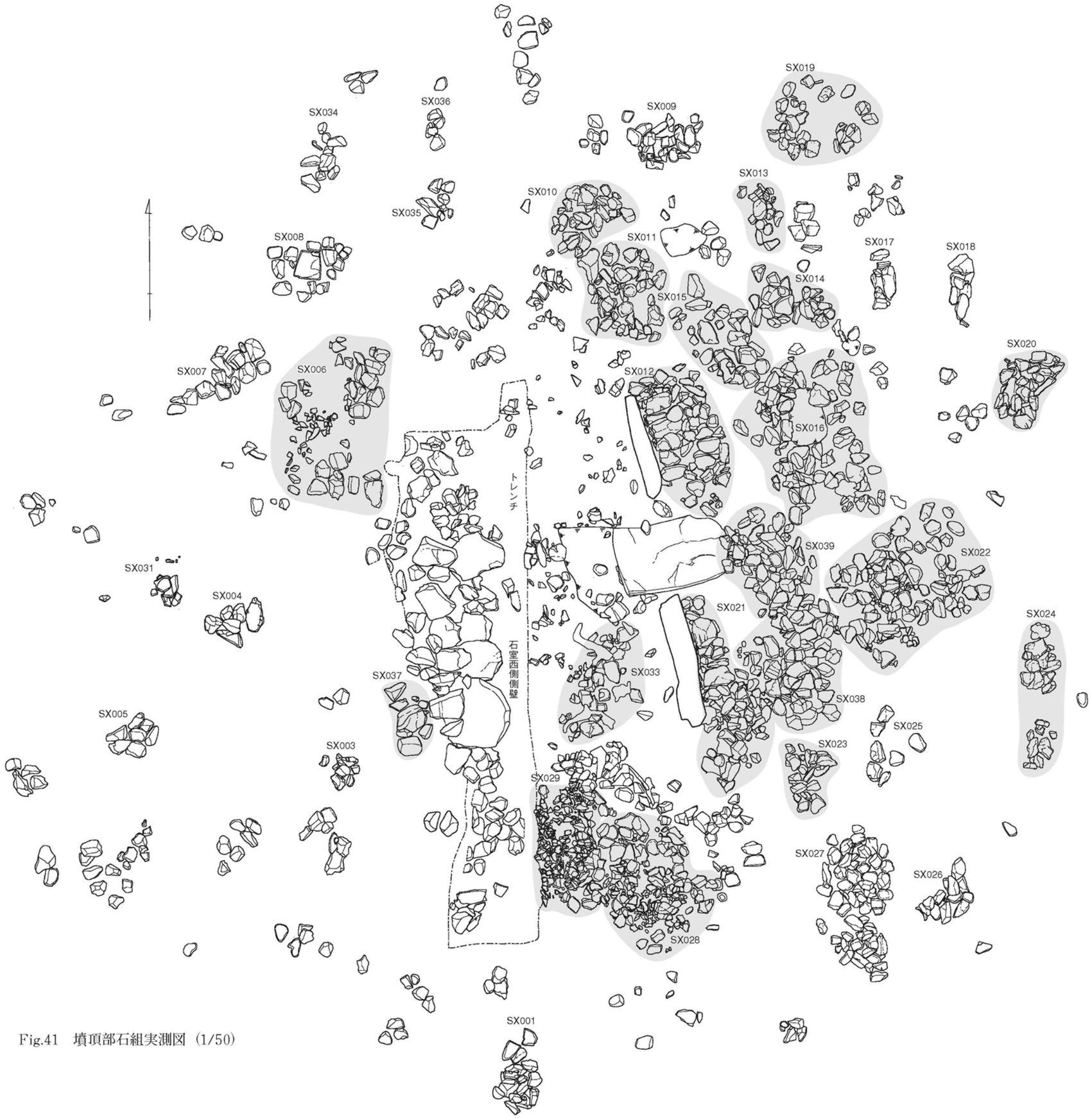


Fig.41　墳頂部石組実測図（1/50）

長径100cm、短径60cmを測る。径15~25cmの礫を中心とする。

SX010（Fig.45）　墳頂部北側に位置し、主軸はN-58°-Eを測る。やや東西方向に長く、長径約1mを測る。径20cmほどの礫を緩やかに並べている。石は安山岩と変成岩を主とする。

SX011（Fig.45）　墳頂部北側に位置し、主軸はN-12°-Wを測る。平面は南北に長いやや歪な長方形で、長径1.2m、短径1mを測る。角礫で径15~30cm前後を主とする。石はあまり密集しない。

SX012（Fig.45）　北側立石の東縁に接し主軸はN-14°-Wを測る。南北に長い楕円で長径1.8m、短径0.9mを測る。立石に沿って長さ40cm前後の板状の石を並べ、それを取り囲むように径20~30cmの円礫・角礫を取り混ぜて敷いている。立石との間は板状の礫を差し込む。敷石上面のレベルは北側が最も高く、中央部分からは南側に傾斜する。この配石が立石を支える裏込めである可能性も考え配石の下をピンポールで検査したが石の感触はなく、下部構造などはないと思われる。

SX013（Fig.45）　墳頂部北東端に位置する。主軸はN-19°-Wを測る。長径80cm、短径40cmの範囲内に径10~20cmの石を置きその中心に長さ26cmの平らな石を置いている。

SX014（Fig.45）　墳頂部北東側に位置する。東西方向に長く、主軸はN-71°-Wである。長径110cm、短径70cmを測る。東西2基に分かれる可能性がある。礫の径は25cm前後で西側のまとまりは中心に大きな石を二つ並べその周囲に小型の石を並べている。

SX015（Fig.45）　墳頂部北東部、SX012の北側に位置する。主軸はN-42°-Wで径145×87cmを測る。径20~30cmの角礫を並べ平面楕円形を呈す。北側は石間の隙間が大きい。

SX016（Fig.46）　墳頂部東側でSX012の東側に位置する。平面は南北に長い長方形で、主軸はN-11°-Eを測る。長径2.0m、短径1.7mの範囲内に径20~30cmの礫を配し、隙間を径5cmほどの礫で埋める。中央部に径70cmの攪乱がある。南北で別の遺構に分かれる可能性もある。

SX017・018（Fig.46）　墳頂部北東側に位置する二つとも小型の配石である。主軸がちょうど南北の敷石が東西に70cm離れて並ぶ。東側が018、西側が017である。SX014も主軸を同じくする。017は長径76cm、短径31cm、018は長径85cm、短径34cmを測る。両方とも35cmを超える角礫を使用している。

SX019（Fig.46）　墳頂部北東端に位置する。主軸は不明瞭である。中央部の礫が抜かれていると判断し、東西に長い楕円形の配石としたが、東西にわかれて小型タイプの配石となる可能性がある。長径1.3m、短径1.1mを測る。

SX020（Fig.46）　墳頂部東端に位置する。主軸はSX017・018らとほぼ同じく南北方向である。長径89cm、短径86cmの範囲に径10~35cmの角礫を並べる。北東隅の出っ張りは別遺構の可能性がある。

SX021-1（Fig.47）　墳頂部東側に位置し、主軸はN-14°-Wを測る。南側立石の東端に隣接する。平面は立石の東縁を取り囲むように配され長径170cm、短径40cmを測る。径15cm~40cmの円礫を並べ、立石との間には板状の石を差し込み立石の裏込めの可能性もあるが、立石を支えるには組みが貧弱なため立石を意識した敷石である。

SX021-2（Fig.47）　SX021-1の東側に位置する。平面は細長く主軸を約15°東にとる。南側端部を木の根でやられているが現状で長さ1.8m、幅0.6mを測る。

SX022（Fig.47）　墳頂部東側に位置する。平面は東西に長い長方形で主軸をN-64°-Eにとる。長径で約2m、短径約1.4mを測る。礫は15~25cmの円礫が主体で中央部には礫の隙間に小礫を詰めている。

SX023（Fig.46）　墳頂部南東側に位置し、主軸はN-12°-Wを測る。径90×60cmの範囲に径15×20cmの礫を配する。礫は角礫を主とする。

SX024（Fig.47）　墳頂部の東端に位置する小型タイプである。南北2つのまとまりに分かれるが、主軸が1本で通ることから同一の遺構として取り上げた。主軸はほぼ南北方向のN-2°-Wを呈す。北側は長径90cm、幅50cmを測り、南側は長径65cm、幅35cmを測る。

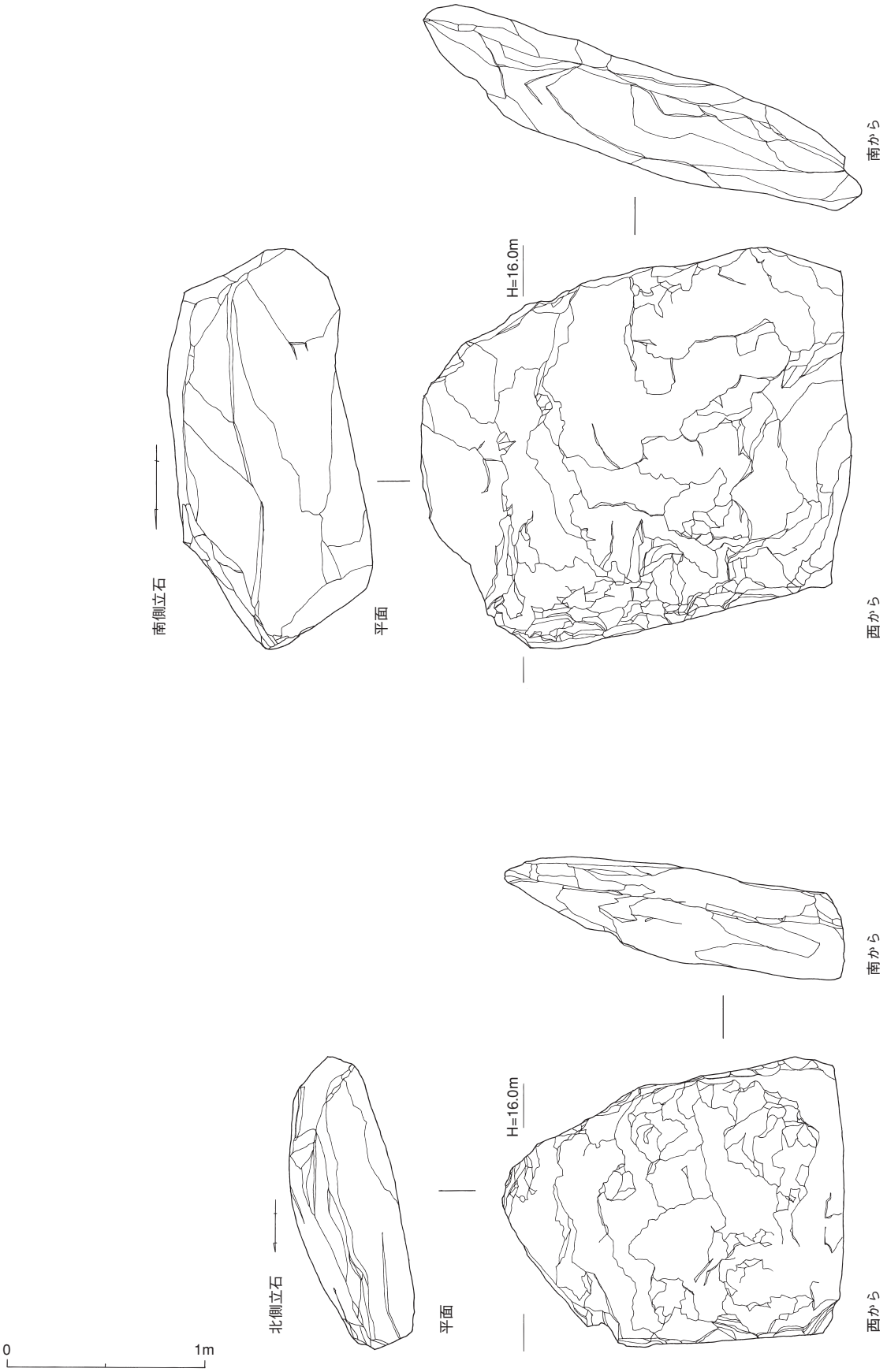
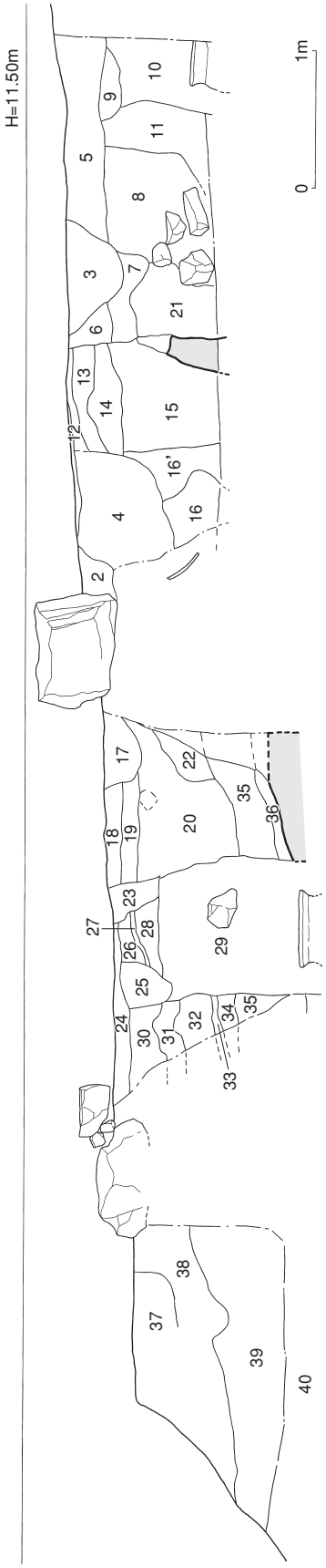


Fig.42　墳頂部立石実測図（縮尺 1/30）



1 暗茶褐色土　根が多く表土化中
2 暗茶褐色土　小円礫含む　しまり強い　近世墓掘方
3 茶褐色砂質土　赤褐色土の粒を多く含んでいる　無層理
4 茶褐色土　小礫　炭化物　赤褐色土ブロックを含む　近世～近代土壙
5 暗赤褐色土　赤褐色土のブロックを主として茶褐色土・灰色土のブロックを多量に含む
盛土　赤褐色土ブロックなどは含まない均一な層
6 茶褐色土　砂質土　5 層とは異なる
7 赤褐色土粘質土　地層の土がやや汚れている　盛土か？
8 暗茶褐色土　しまり弱い　赤褐色土ブロックと小礫含む　近世土壙
9 暗赤褐色土　赤色粘質土ブロックを含む　全体的に灰色土粒子含む　しまり弱い
10 暗赤褐色土　細かな赤色粘質ブロックと茶褐色土粒を含む　近世甕棺墓理土
11 赤色粘質土　ブロック（1 ～ 5cm 径）を多量に含み、その間に灰色土ブロック（1 ～ 4cm）や
茶褐色土を層理状に含む　盛土か
12 茶褐色土　白色細砂を含む　しまり強い　盛土？
13 暗赤褐色土　12 層よりやや明るい　白色細砂含む　しまり強い　盛土？
14 暗褐色土　1 ～ 2cm の赤褐色土を含む　無層理　しまり強い　盛土？
15 暗赤褐色土　赤褐色粘質土（1 ～ 10cm）を多量に含む　間に茶褐色土や灰色土ブロックを含む。近世墓掘方
16 茶褐色土　赤褐色土ブロックを含む（径 2 ～ 3cm）　しまり弱い　木の根によるカクランか
16’ 16 層と同色だがしまり強い
17 暗赤褐色土　炭化物片含む　木の根多い
18 暗赤褐色土　赤色粘質土を主とする　白色細砂を含む　しまり強い　19、20 層が沈んだあと
19 暗茶褐色土　2 ～ 3mm の粗砂を多量に含む　赤褐色土の小ブロックをわずかに含む
20 茶褐色土　赤褐色土ブロックを無層理に含む　灰色土粒子を全体的に含む
しまり強い 22 層とあわせて近世土壙か
21 暗赤褐色土　細かな赤色粘質土ブロックを主とする　灰色土ブロック径 1cm 程で無層理
22 暗茶褐色土　下層は赤色土ブロックを左下りに含んでいる　層理的　地山　風化が進んでいる
23 暗褐色土　赤褐色土ブロックをわずかに含む
24 茶褐色土　白色細砂を多量に含む　盛土
25 暗褐色土　赤色粘土　灰色土ブロックを無層理に含む
26 暗黄褐色粘質土　地山風化土に似る
27 暗黄褐色粘質土　少し赤味がかる
28 暗黄褐色粘質土
29 暗赤褐色土　赤褐色土を主とする　灰色土ブロック（1 ～ 3cm）を無層理に多く含む 近世甕棺墓理土
30 赤褐色土　地山　赤色土である　混ざりなし　盛土か
31 暗褐色土　粗砂多く含む
32 茶褐色土　小礫わずかに含む　しまり強い　灰色土粒子を下層を中心に含む
33 橙色土ブロック
34 茶褐色土　土層に多く灰色土粒を含む
35 暗褐色土　粘質をおびる　しまり強い　36 層との境が帯状に黒く、細かな赤色土
ブロックを含む。上から崩落してきた赤色土と思われる　須恵器小片含む　古墳周溝
36 褐色土　35 層の古墳周溝下層土
37 暗茶褐色土　細砂多く含む　しまり強い
38 暗茶褐色土　赤褐色土小ブロック含む
39 暗赤褐色土　赤褐色土や暗赤褐色土等の水平堆積で間に白色細砂を多く含む層などもみられる　盛土か
40 赤色土　地山

Fig.43　A 区トレンチ土層図（縮尺 1/50）

SX025（Fig.47）　墳頂部南東側に位置し、主軸は N-10°-E を測る。径 110×70cm の範囲で径 25cm 前後の角礫を 6 個と円礫を1つ検出した。石材はいずれもやや平らな石を使用している。北から南に向かって緩やかに傾斜する。各礫の間隔も広く遺構ではない可能性がある。

SX026（Fig.47）　墳頂部東南端に位置し、主軸は N-46°-E を測る。径 90×50cm の範囲に長さ 20~30cm 前後の角礫を並べている。

SX027（Fig.48）　墳頂部南東端に位置する。南北に長い楕円を呈し主軸は N-2°-E を測る。長径 200cm、短径 97cm を測るが、北と南の 2 基に分かれる可能性もある。北は径 20cm 前後の円礫を主とし、南は角礫を主とする。北側の楕円だけだと長径 114cm を測る。全体はほぼ水平である。

SX028（Fig.48）　墳頂部南側に位置する。平面はやや南北に長いゆがんだ長方形を呈し、主軸を N-28°-W にとる。1.7×1.5m の範囲に径 25cm 以下の礫と細かな板石片を検出した。

SX029（Fig.48）　墳頂部南側の SX028 の西側に位置する。石室確認用のトレンチに西側半分がかかる。平面は南北に長い長方形を呈し、主軸は N-6°-W を測る。現状で

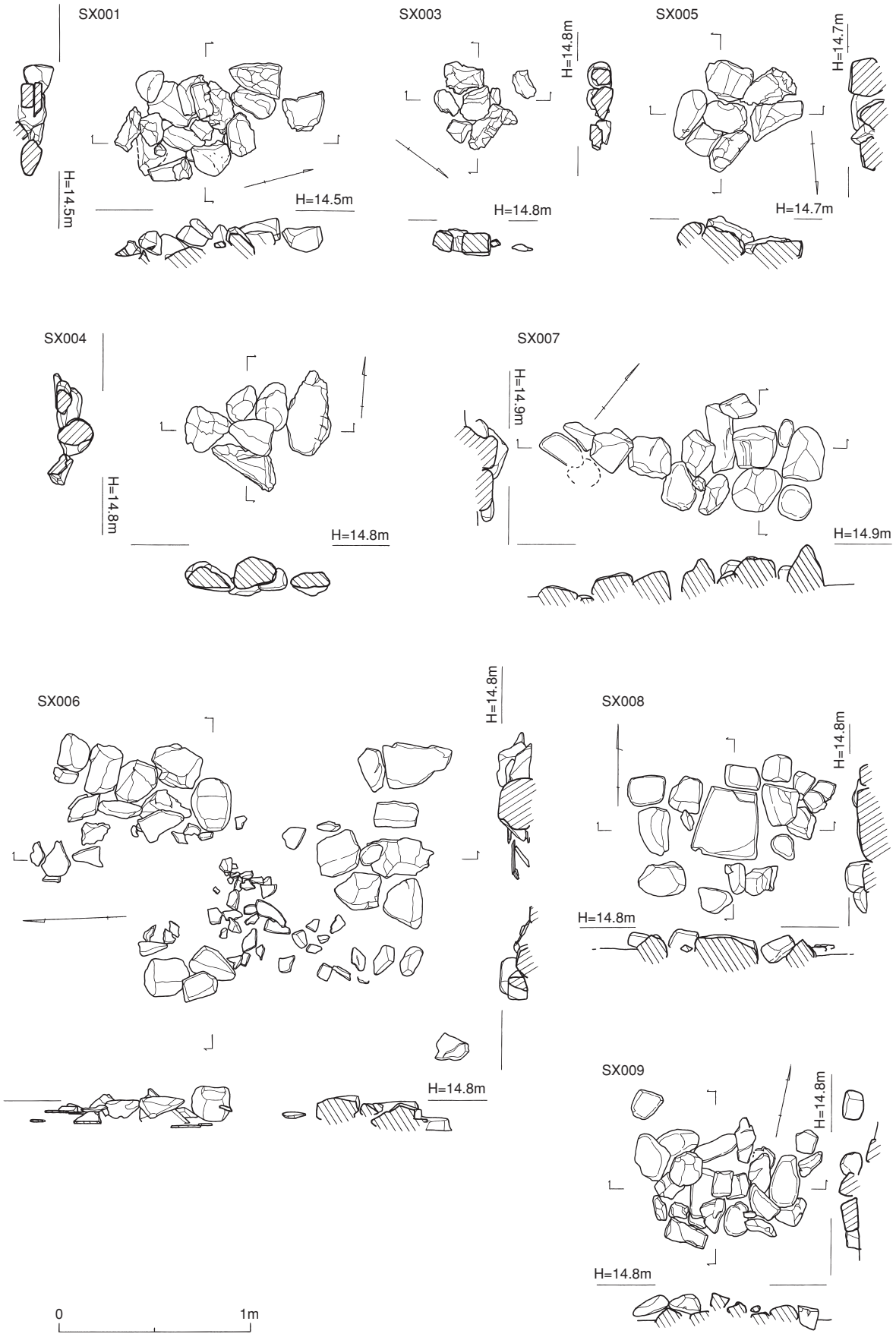


Fig.44　墳頂部敷石遺構実測図１（縮尺 1/30）

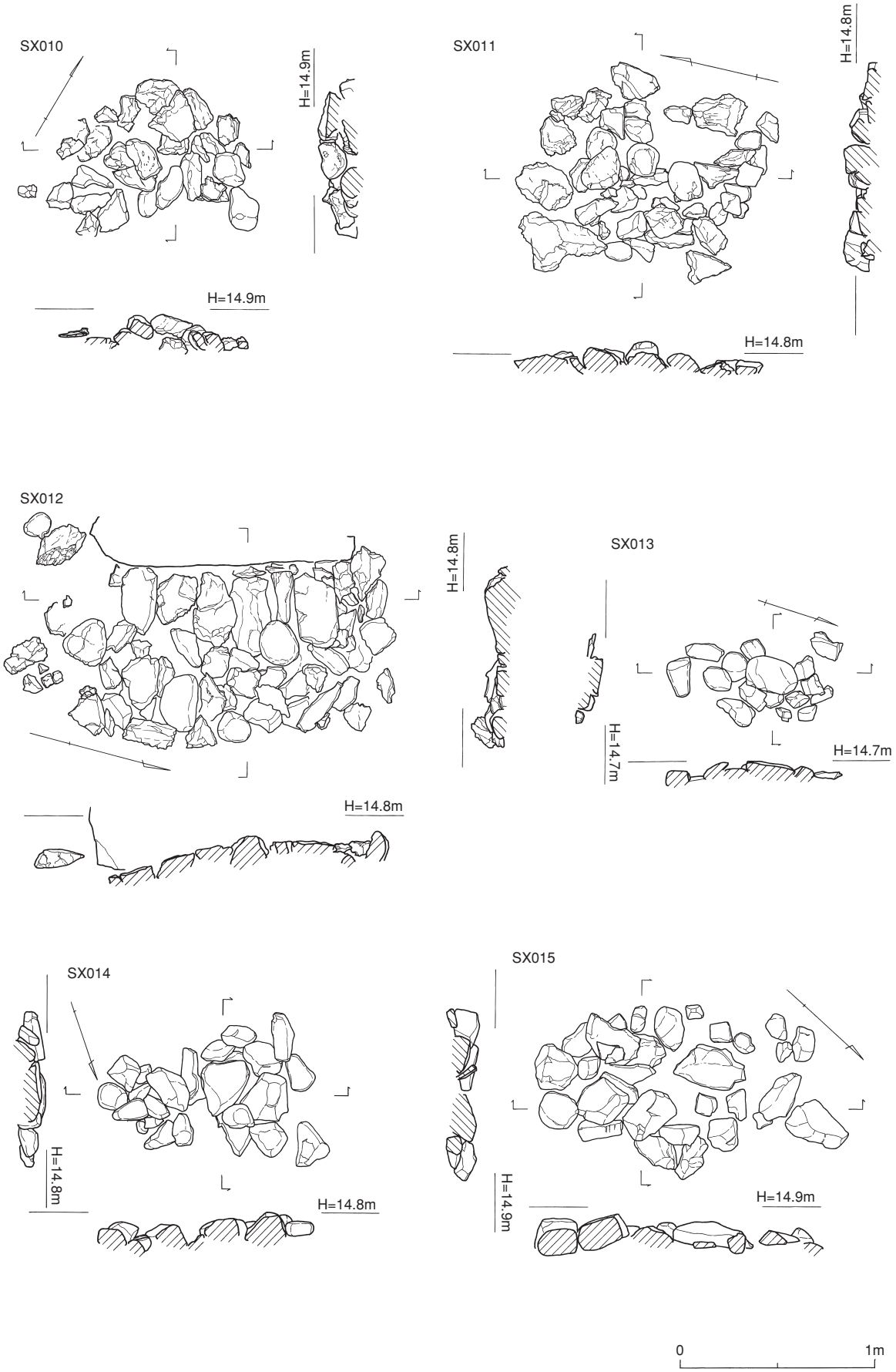


Fig.45　墳頂部敷石遺構実測図 2（縮尺 1/30）

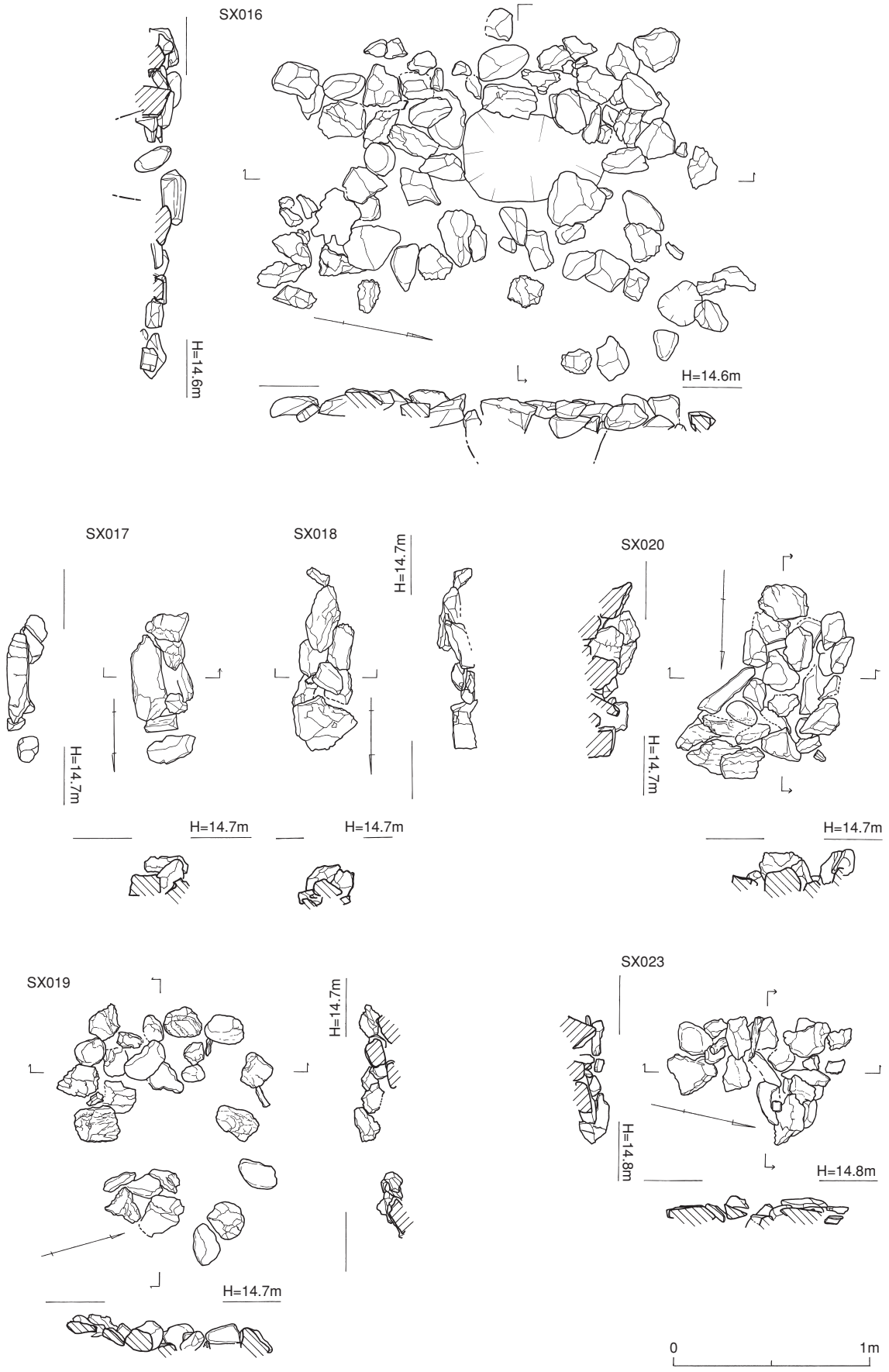


Fig.46　墳頂部敷石遺構実測図 3（縮尺 1/30）

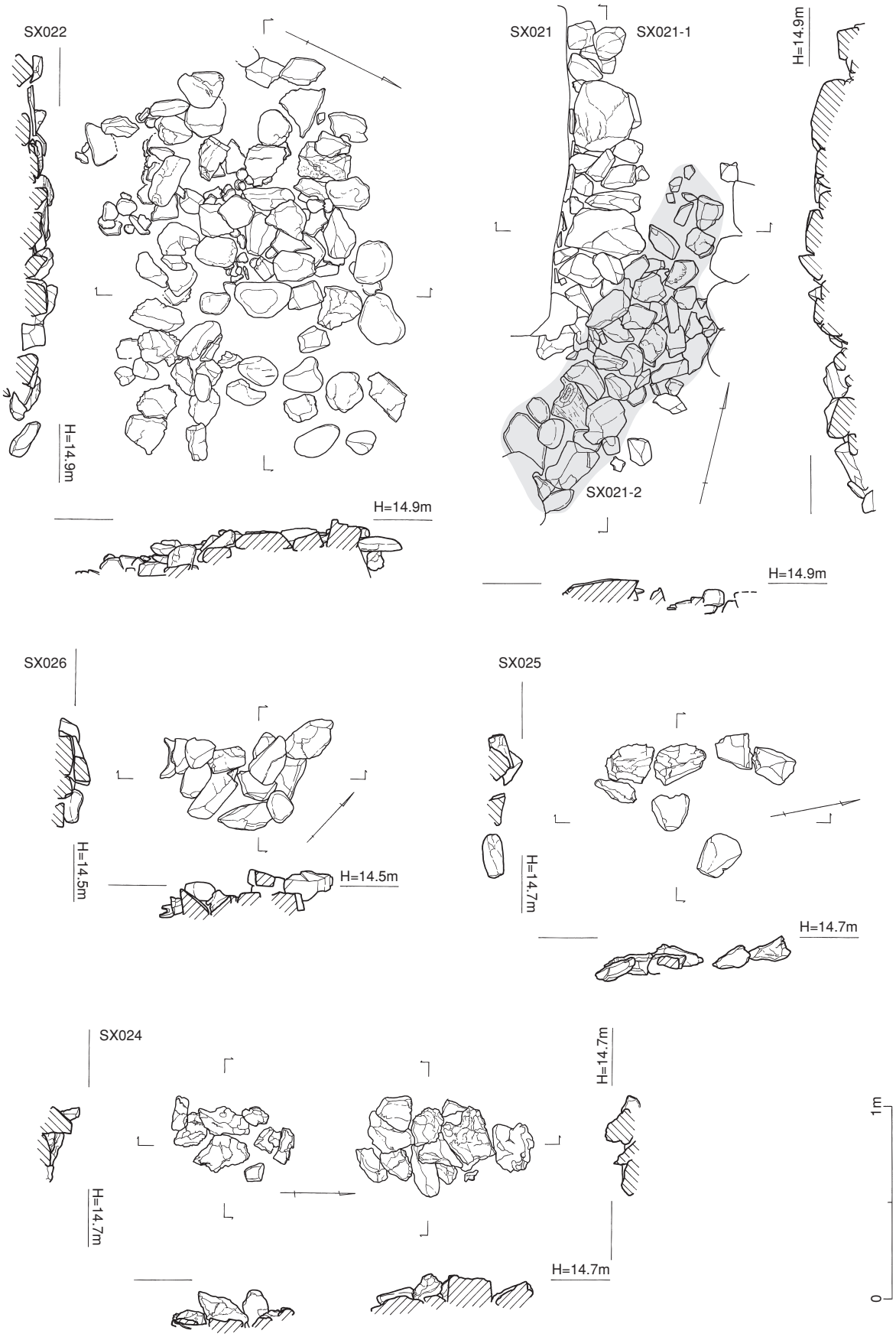


Fig.47　墳頂部敷石遺構実測図 4（縮尺 1/30）

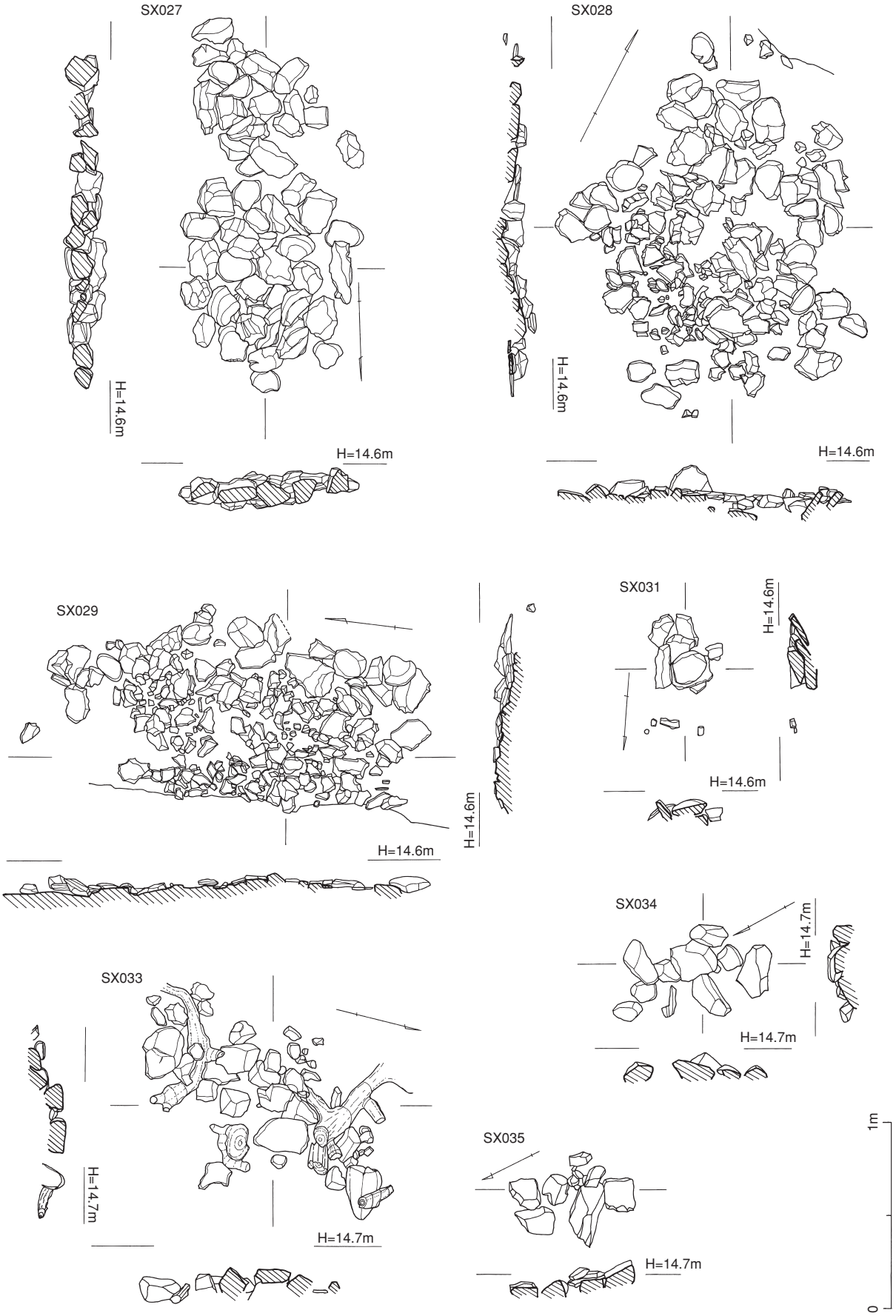


Fig.48　墳頂部敷石遺構実測図 5（縮尺 1/30）

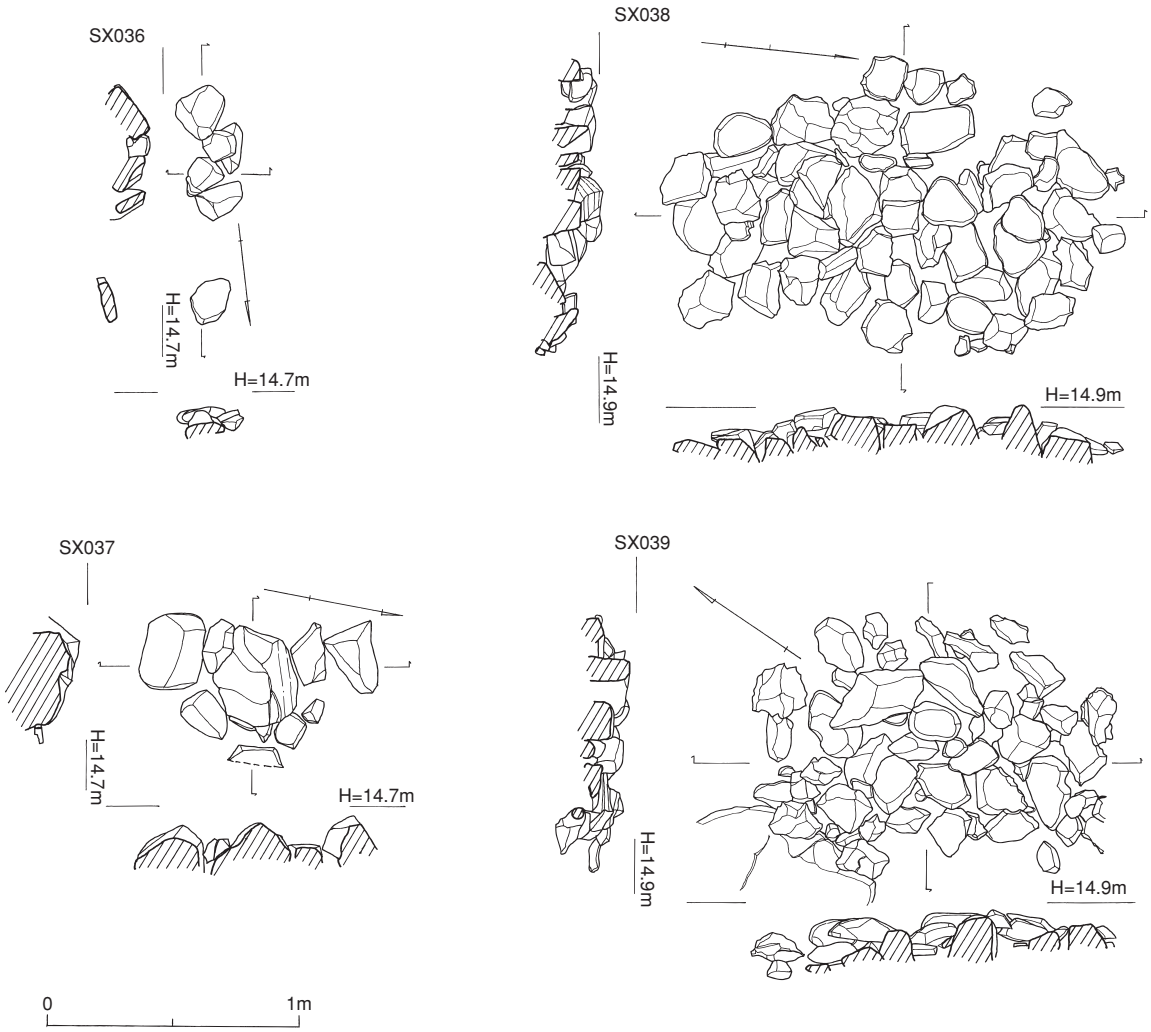


Fig.49　墳頂部敷石遺構実測図 6（縮尺 1/30）

長径2.0m、幅1m を測る。周囲に径20cm 程の礫（円礫を主とする）を廻らし中央に細かな板石片を配する。中央の板石片を観察したところ周囲の破片と接合するものがあった。このため中央部分は元々大きな板石を敷いていたものが、割れて細片化したものと思われる。他の大型配石とはやや構造が異なる。

SX031（Fig.48）　墳頂部北西隅に位置し、主軸は N-4° -W を測る。径約40cm の範囲に15~20cm ほどの角礫を並べた後、その上に径20cm の平たい円礫を1個のせている。

SX033（Fig.48）　墳頂部中央に位置する。南側立石の西側に位置する。主軸は不明瞭である。まとまりが見えないものの木の根などによる攪乱が激しい場所であり、配石の残骸である可能性があることから報告する。長さ1.6m を呈し径15~20cm の角礫が蛇行しながら並ぶ。

SX034（Fig.48）　墳頂部北側に位置し、主軸は N-28° -E を測る。

SX035（Fig.48）　墳頂部北側に位置する。主軸は N-26° -E を測る。

SX036（Fig.49）　墳頂部北側に位置する。主軸は N-6° -E でほぼ南北方向を示す。

SX037（Fig.49）　墳頂部西側に位置し、主軸は N-10° -W を測る。

SX038（Fig.49）　墳頂部東側に位置し、主軸は N-5° -W を測る。平面は長方形で1.8×1.2m を測るが、中央部分に60cm 前後の方形の石組みがあり、それが中心になるものと思われる。

SX039（Fig.49）　墳頂部東側に位置し、主軸はN-34°-Wを測る。平面は楕円形で1.5×0.9mを測る。

(5) 出土遺物（Fig.50~53　001~059）　墳丘表土及び墳頂部敷石や斜面葺石の隙間から古墳時代後期及び古代末～近世の遺物が出土した。古墳時代の遺物は埴輪（円筒埴輪、家型埴輪）と須恵器（大甕、器台）、古代から中世は貿易陶磁、近世は土師皿を主とする。このうち古墳時代の遺物は斜面の葺石上から多く出土し、古代の遺物は墳頂部及び葺石直上からも出土した。001~007は家型埴輪の破片である。001~005は表面に赤い顔料が残っており、元々は赤く塗られていたことが判る。001は切妻造の屋根で縁には梯子状2本線が、また中央部には網代葺を写したと思われる格子文がみられる。棟木部分は半円形状に突きだしており、その先端にはまた半円形の線刻がある。屋根頂部には高さ3cmの鰭飾りがつく。002は鰭飾りである。長軸に沿って両側に2本線がみられる。003は断面T字型をなす。壁体の一部である。004は断面L字型の棒状をなすため、柱や入り口の縁など壁体の一部と思われる。005は部位不明である。胎土が007に似ているため埴輪の一部と判断した。006は埴輪の基部と思われる。円筒埴輪とは異なり、平面がやや潰れた楕円形を呈し、2cmの鰭がつく、表面に指先で撫でたような浅い溝状の模様がみられる。007は壁体の一部である。右上と右下の直線部分が本来の端が残っており、断面三角形を呈している。右上が屋根につくと思われ、後ろ側には接着部分の補強のための粘土板がつくる。008~015は須恵器器台片である。008は器台口縁部である。暗灰色を呈す。口縁に2条と鉢部中央に浅い沈線を施し、その間に波状文がみられる。胎土は精良で焼成は良好である。復元口径は35cm前後である。墳丘Ⅱ区墳裾で出土した。009は008と同一固体と思われる鉢底部である。脚部との境に櫛歯列点文がみられる。方形透かしの切りこみがあり、脚部最上部に透かしを施す。内面には自然釉がかかる。葺石上で出土した。010は須恵器底部で008とは別個体の器台鉢部の可能性がある。灰白色を呈し、胎土は精良である。011も008とは別固体の器台鉢部と思われる。沈線の間に波状文が、下側には平行タタキがみられる。胎土は精良で微小な白色砂を多く含む。焼成は良好である。012~014は脚部である。012は上端と中央、下端の三カ所に2本組みの突帯が水平方向に巡り、その間には波状文がみられる。方形の透かしが3段みられ、中央突帯を下端とする1段目の透かしは間隔が5.5cmであるが、2段目は中央突帯を上端とし、また3段目は下端の突帯を上端としており、2段目と3段目の透かしは半分が重なる千鳥配列になり、間隔も2cm弱と密になる。胎土は精良で微小な白色砂を含む。焼成は良好である。013は上下両端に断面半円形の突帯が1条みられ、中央部に波状文を施す。透かしは縦方向が3.5cmと大きく、間隔が2.5cmの水平方向に並ぶ。胎土は精良で焼成は良好である。014は中央と上端に断面三角形の細かな突帯が2条巡り、突帯間に波状文と方形の透かしを施す。透かしは縦1.5~2cm、幅1~1.2cmと小さいが透かしの間隔は2cmと密で2段目と3段目が千鳥配列である。胎土は精良で砂を含まず、焼成は良好である。015は脚端部である。灰～暗灰色を呈す。胎土は精良で微小な白色砂を少量含む。焼成は良好である。016~022は円筒埴輪片である。016・017は口縁部である。橙色を呈す。016は内面口縁端から6cmほどは横ハケでその下は丁寧なナデを施す。外面口縁端はナデで、その下は横ハケ後一部縦ハケを施す。胎土は口縁端のみ白色砂を含み、後はほとんど含まない。焼成は良好である。下段葺石上で出土した。017は内面口縁端はナデでその下5cmは横ハケ、更にその下はナデを施す。外面は口縁端はナデでその下は縦ハケである。焼成は良好である。018~021は胴部である。018は外面上側に断面台形の突帯が付き、右端には円形の透かしを施す。調整は内面が斜め方向のナデ、外面は縦ハケで突帯をつけた後、その上下はナデたため、ハケ目が消えている。019は内面はナデ、外面は縦ハケを施す。突帯を貼り付けた後、その上下を強く横方向にナデている。胎土は白色砂を少量含み、焼成は良好である。020は淡橙色を呈し内面丁寧なナデ、外面は縦ハケを施す。断面台形の突帯を貼り付け、上下端に強いナデを施す。胎土に1mm以下の白色砂を多量に含み、焼成は良好である。下段葺石部で出土した。021は橙色を呈し、内面はナデ、外面は横ハケ後一部縦ハケを施す。胎土は白色砂を多量に含み、焼成はやや軟質

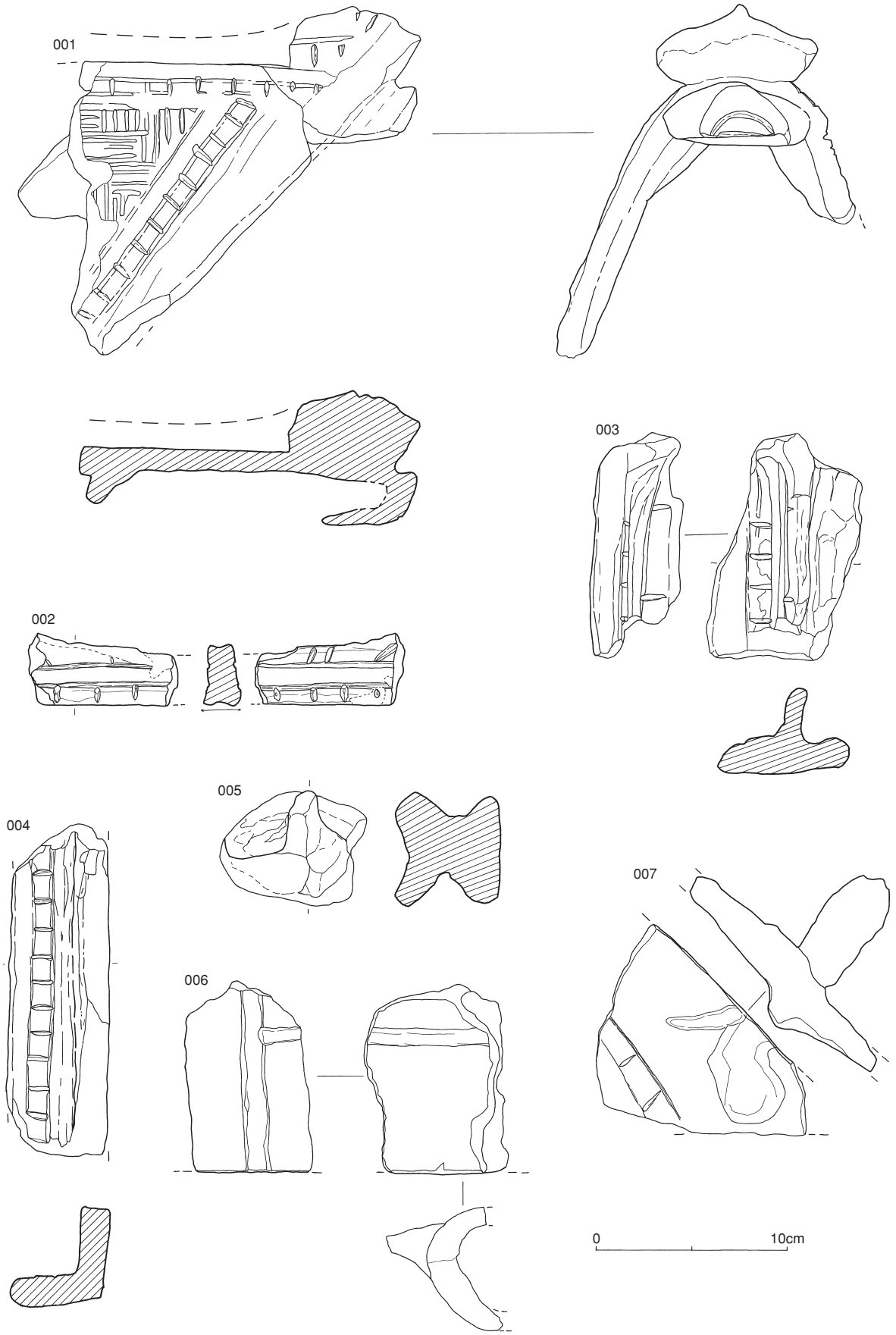


Fig.50　家型埴輪実測図（縮尺 1/3）

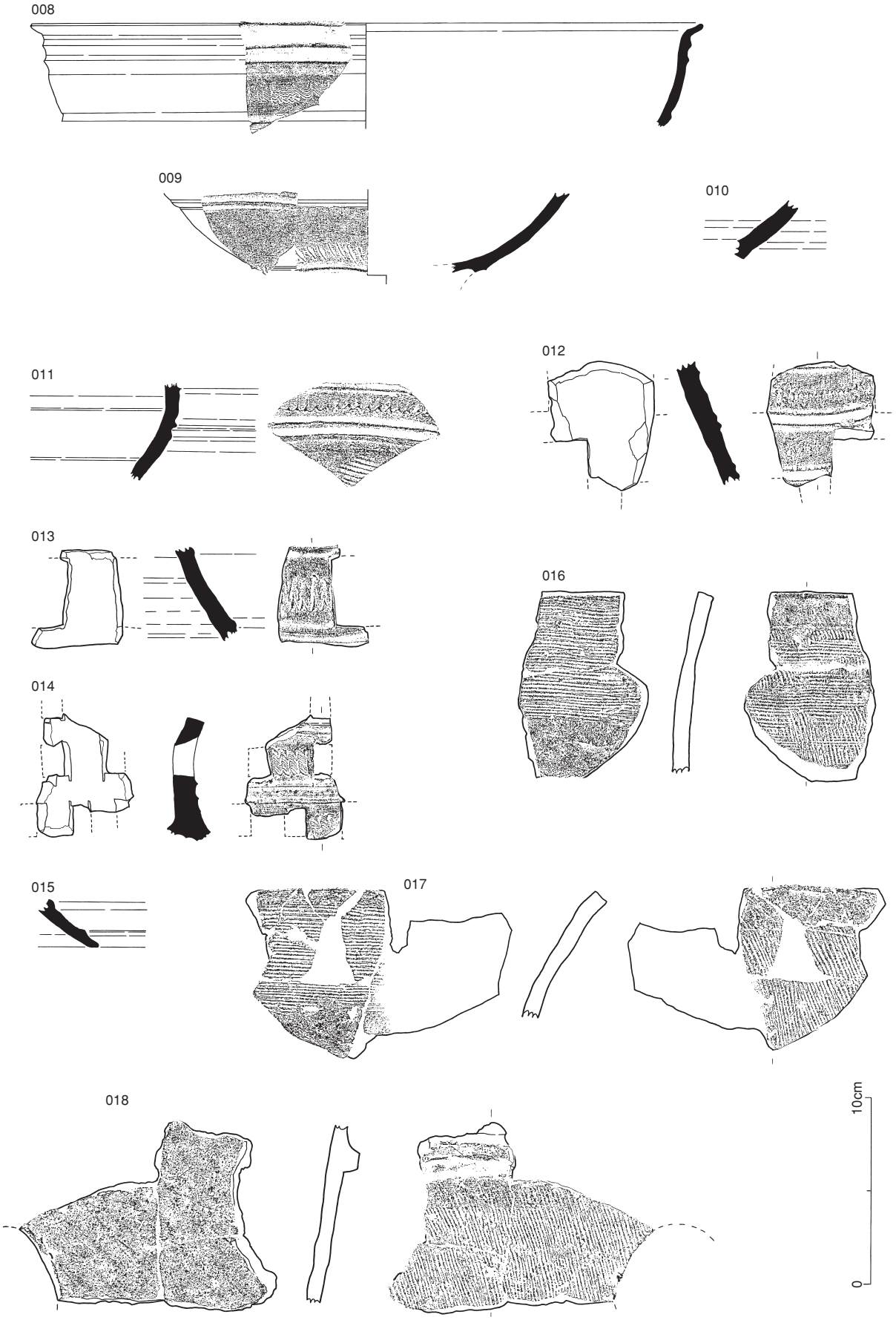


Fig.51　遺物実測図１(縮尺 1/3)

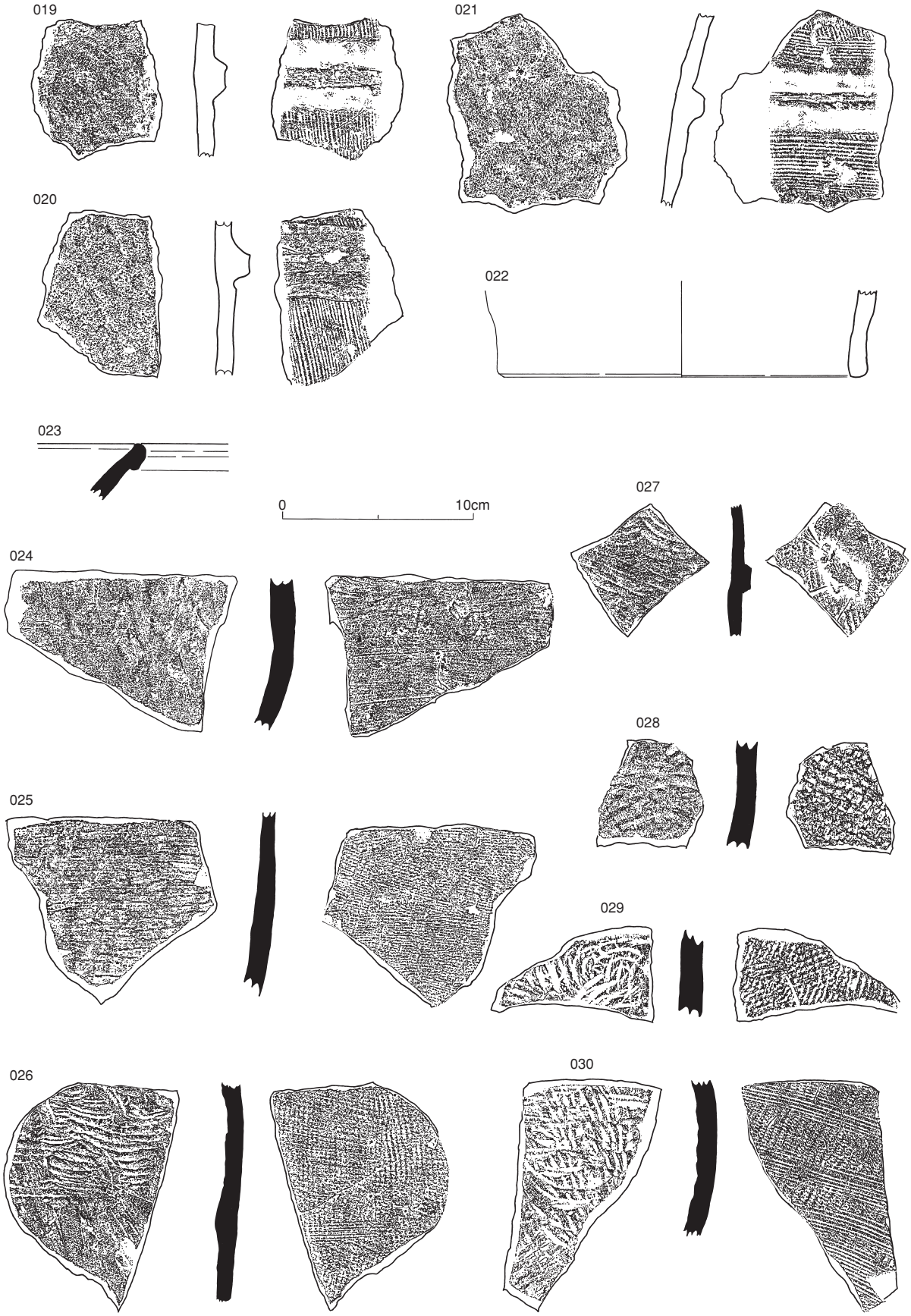


Fig.52　遺物実測図 2（縮尺 1/3）

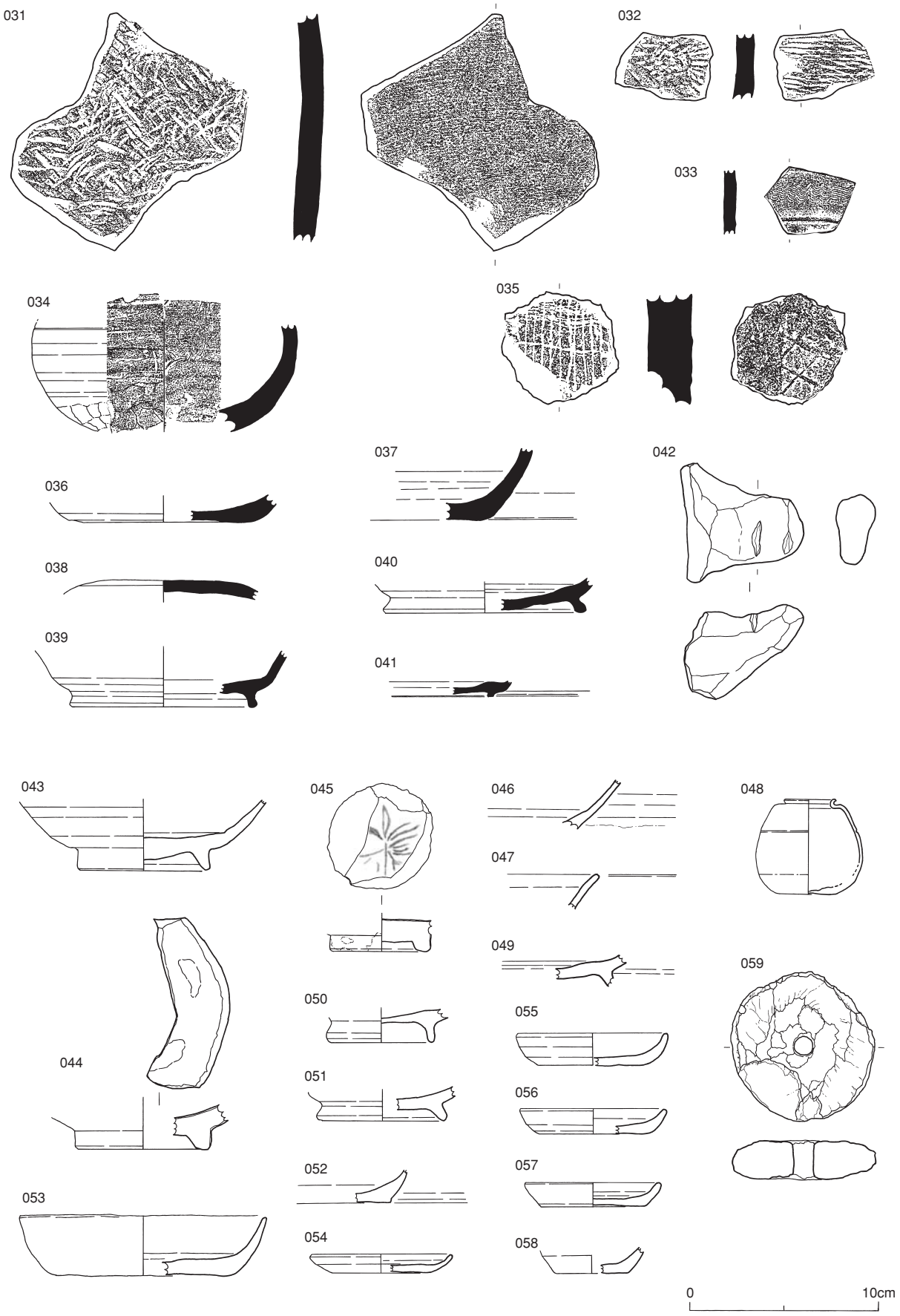


Fig.53　遺物実測図 3（縮尺 1/3）

である。022は下端部である。復元底径19.2cmを測る。黄橙色を呈し、胎土に白色砂を多量に含む。外面には縦ハケの痕跡が残る。墳頂部で出土した。023は須恵器大甕口縁である。黒褐色を呈し胎土には砂をほとんど含まない。焼成は良好である。下段葺石上で出土した。024~032は須恵器大甕の胴部片である。024は灰～暗灰色を呈し、内面は縦方向の粗いナデ、外面はカキ目をナデ消す。胎土は1mmほどの白色砂を多く含み、焼成は良好である。025は外面黒色を呈し、内面は平行な当て具痕、外面には細かなハケ目状の平行タタキの後一部ハケを施す。胎土は1mmほどの白色砂をやや多く含み焼成は良好である。026は外面黒色を呈し、格子目タタキの後一部ハケを施す、内面は灰白色で上半は当て具痕、下半は縦方向のケズリを施す。胎土は精良で砂をほとんど含まず、焼成は良好である。墳丘Ⅱ区の墳端部で出土した。027は外面自然釉がかかり緑色を呈し、平行タタキを施す。焼成時に須恵器の小片が付着している。内面は灰白色を呈し、当て具痕の上から一部ナデを施す。胎土には砂を含まず、焼成は良好である。028は灰色で外面は格子目のタタキ、内面は同心円文の当て具痕を施す。胎土には白色砂と雲母片を少量含む。029は外面灰色を呈し、格子状タタキの後平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕を施す。胎土は白色砂と雲母片を少量含む。焼成は良好である。墳頂部で出土した。030は外面黒色を呈し細かな蓆状のタタキの後一部ハケを施す。内面は下半は平行、上半は同心円の当て具痕を施す。胎土には砂をほとんど含まず、焼成は良好である。031は外面黒褐色を呈しハケ目の様な細かな平行タタキの後ナデを施す。内面は平行な当て具痕の上に同心円状の当て具痕がつく。胎土は1mm以下の白色砂を多く含み、焼成は良好である。032は茶褐色を呈し外面は平行タタキ、内面には放射状の当て具痕を施す。

Fig.54　墳丘復元図（縮尺 1/200）

胎土には微小な白色砂を多く含む。焼成は良好である。033は灰色を呈し、外面は突帯の上に波状文を施す。内面は遺存状態が悪く不明である。胎土は精良である。Ⅱ区墳裾で出土した。器台の可能性もある。034は壺底部か。黒色を呈し外面は回転ヘラ削りで底部は静止ヘラケズリを施す。横ナデである。胎土は1mm以下の白色砂を多量に含む。焼成は良好である。035以下は古代以降の遺物である。035は須恵質瓦片である。青灰色を呈し、凸面は斜格子のタタキで凹面は粗い布圧痕である。胎土中に1~2mmの白色砂を多量に含む。焼成は良好である。036は須恵器壺か。暗灰色を呈し、底部は回転ヘラ削り、内面はナデを施す。胎土に1~2mmの白色砂を多く含む。復元底径10cmを測る。墳頂部で出土した。037は須恵器甕もしくは壺か。胴部はハケで底部直上はヘラケズリを施す。内面は横ナデである。胎土は白色砂を少量含み、焼成は良好である。038は須恵器坏蓋である。外面は回転ヘラ削り、内面はナデを施す。胎土に1~2mmの白色砂を多く含む。039~041は須恵器高台付坏である。039は灰色を呈す。復元高台径は9.8cmを測る。1~2mmの白色砂を多く含み、焼成は良好である。040は灰色を呈し、内面は静止ナデを施す。胎土中に含む砂は少量で焼成は良好である。墳丘Ⅲ区下段葺石上で出土した。041は暗灰色を呈し見込みに静止ナデを施す。胎土は精良で白色砂は少量を含む。墳頂部東側敷石遺構中から出土した。042は甑取手である。橙色を呈し1mmほどの砂を多く含む。焼成はやや軟質である。043は青磁碗片である。釉は薄緑色を呈す。胎土は灰色で極めて緻密である。造りは全体的に丁寧である。墳頂部とテラスで出土した。044は青磁碗である。045は青磁碗底部である。釉は半透明で明緑灰色を呈す。胎土は白色である。見込みに花文あり。石室上面で出土した。046は白磁碗片である。釉は内面は厚いが外面は薄く小穴が多くみられる。047は磁器椀口縁で、釉はオリ－ブ灰色、胎土は灰色を呈す。近世か。048は黒釉の小壺である。復元口径2.7cm、器高5cmを測る。釉は薄く胴部下半から底部は露胎である。胎土は精良で、焼成は良好である。墳頂部敷石遺構中から出土した。049~051は土師器椀・坏底部である。049は黄橙色で胎土は精良である。050は淡明褐色で砂と雲母片を少量含む。051は黒褐色を呈し、焼成はやや軟質である。052･053は土師器坏、054~058は土師皿である。059は滑石製の紡錘車である。破損が著しい。径7.8cm、最大厚さ1.9cm、中心孔径9.8mmを測る。ノミ状の工具で削った後粗い研磨を施す。調整は石鍋に似る。Ⅲ区下段葺石上で出土した。

3.小結

墳頂部立石は墳丘削平時に出てきた石室の天井石を石室内に落とし込んで立て、標石として使用したのであろうか。北側立石は高さ2.1mを測るが地面の下に埋まっているのは1m以下程度と浅く、福岡西部沖地震の際に南側立石が倒れかけた。石を立てるときに石室が埋まっていたか、もしくは石室が大きく破壊され、その深さしか遺存していない可能性がある。

敷石については当初は全面に敷いており、個々の遺構にみえるのは単なる残欠がたまたまそれらしく見えるのではと考えたが、SX012の様に明確に一つの敷石遺構と考えられる遺構もあることから、一基の遺構と確定できないものに関してもとりあえず、実測してここに報告した。敷石遺構の性格としては墓などが考えられるが、実際に掘り下げた2基の配石では下部構造を確認することはできなかった。しかし、本調査地点は盛土のため遺構の検出が困難で、A区のような同じ赤橙褐色土で盛土した上に築かれた近世~現代墓においても土壙掘方の検出は非常に困難であったことから、甕などを使用しない素掘りの遺構であれば見逃した可能性が高い。また、敷石遺構に大型と小型の二つのタイプがあり分布も異なっているが、中央立石が標石の役割を持ち、立石東側の大型敷石群は墓の上部構造、小型敷石は祭祀場を形作る構造物と考えている。SX029は他の大型タイプと位置と構造が異なる事から祭祀関連の遺構である可能性がある。

図　　版

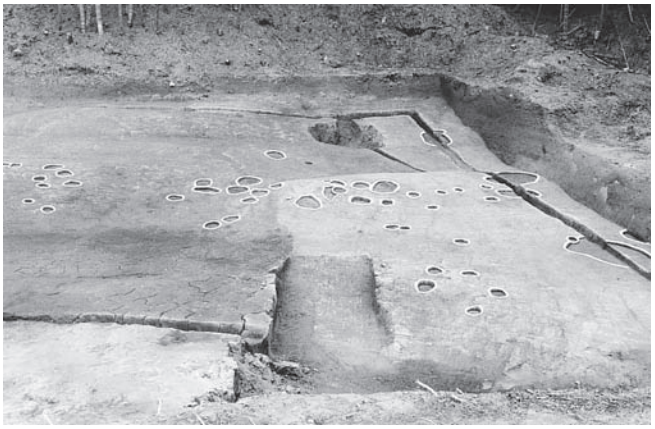
第23・30次調査

1 23次（E-2地区）全景（西から） 写真番号136

2 23次（E-2地区）全景（北東から） 138

3 23次（E-2地区）全景（西から） 135

4 23次（E-2地区）Pit群（北東から） 133



5 23次（E-2地区）Pit群（南東から） 131

6 23次（E-2地区）Pit群（南東から） 132

7 23次（E-2地区）Pit群（南東から） 130

8 23次（E-2地区）北東側土層断面（南西から） 110

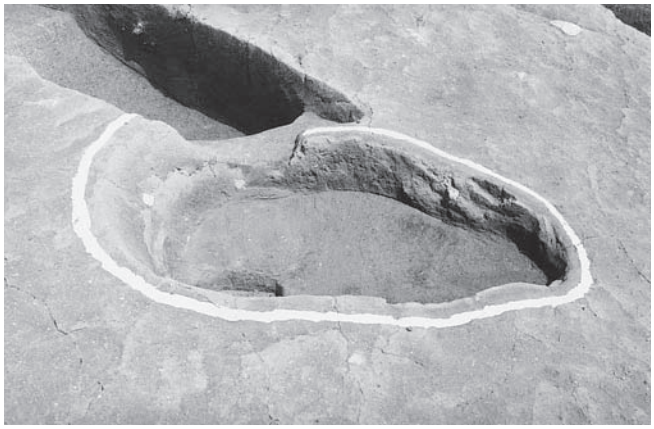
1 23次（E-2地区） SO-1～3 103

2 23次（E-2地区） SO-1~3（北から） 118

3 23次（E-2地区） SO-2（北から） 105

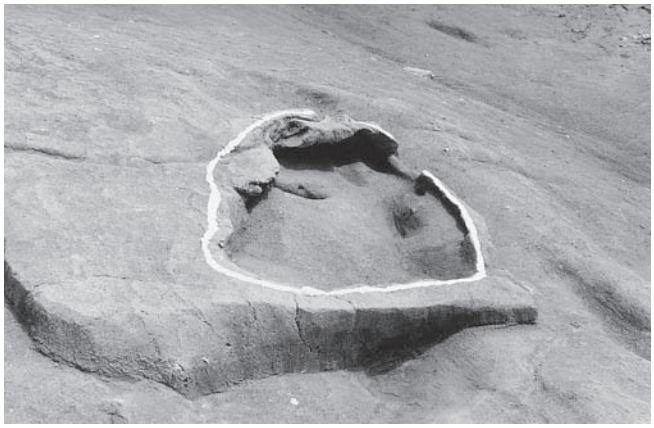
4 23次（E-2地区） SO-1（北西から） 117

5 23次（E-2地区） SO-2 近景（北から） 106



6 23次（E-2地区） SO-2（北から） 116

7 23次（E-2地区） SO-3（北西から） 108



8 23次（E-2地区） SO-3（北西から） 113

1 23次（E-2地区） SO-4（北東から） 111

2 23次（E-2地区） SO-5～7 遠景（南から） 123

3 23次（E-2地区） SO-5（南から） 125

4 23次（E-2地区） SO-6・7（南から） 126

5 23次（E-2地区） SO-8 遠景（南から） 124

6 23次（E-2地区） SO-8 近景（南から） 127

7 30次 全景（西から） 10

8 30次 全景（東から） 9

1 30次 SO-1 6

2 30次 SO-7 1

3 30次 SO-2 3

4 30次 SO-3 4

5 30次 SO-4 5

6 30次 SO-5 7

7 30次 SO-6 8

1 D-8-1 上 全景（南西から） 6

2 D-8-1 上 全景（北東から） 4

3 D-8-1 上 土層 全景（南から） 7

4 D-8-1 上 土層 部分（南から） 8

5 D-8-1 上 土層 部分（南から） 11

6 D-8-1 上 土層 部分（南から） 10

7 D-8-1 下 土層 部分（南から） 12

8 D-8-1 下 土層 断面（東から） 1

1 D-8-2 全景（東から） 153

2 D-8-2 全景（西から） 152

3 D-8-2 全景（北東から） 151

4 D-8-2 南側土層（北から） 149

5 D-8-2 南側土層（北から） 149

6 D-8-2 南側土層（北から） 150

7 D-8-2 試堀（南から） 40

8 D-8-2 試堀 GTL中央部（南から） 44

1 C-2地区 全景（北東から） 50

2 C-2地区 全景（北から） 49

3 C-2地区 谷部全景（北東から） 51

4 C-2地区 SX-001土層断面（北から） 47

5 C-2地区 全景（南から） 54

6 C-2地区 西半分全景（SO-1・2）（東から） 55

7 C-2地区 SO-1土層断面（北から） 56

8 C-2地区 SO-1全景（東から） 58

1 C-2地区 SO-1近景（東から） 68

2 C-2地区 SO-2近景（東から） 60

3 C-2地区 SO-2近景（東から） 71

4 C-2地区 SO-2近景（南から） 69

5 試掘調査遠景石ヶ元（古墳の有無） 73

6 試掘調査遠景 千原地区 74

7 試掘調査 石ヶ元 切通部分 76

8 試掘調査遠景 石ヶ元（古墳の有無） 75

1 試掘-6　古墳確認　77

2 試掘-3　80

3 試掘-2　88

4 試掘-3　82

5 試掘-2　90

6 試掘-3　84

7 試掘-3　85

8 試掘-5　古墳確認　93

1 試掘-6 96

2 試掘-6 96

3 E地区踏査 159

4 試掘　E地区試掘 158

5 G-3地区試掘 1TL 51

6 G-3地区試掘 1TL 50

7 G-3地区試掘 1TL 48

8 G-3地区試掘 2TL 32

1 G-3地区試掘 2TL 34

2 G-3地区試掘 2TL 52

3 G-3地区試掘 3TL 58

4 G-3地区試掘 3TL 56

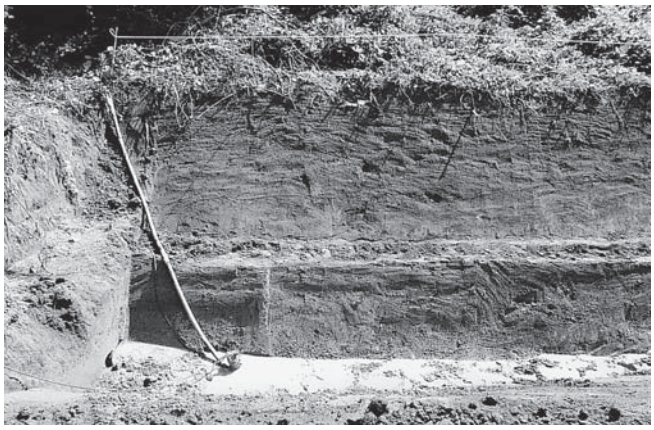
5 G-3地区試掘 3TL 40

6 G-3地区試掘 4TL 41

7 G-3地区試掘 4TL 62

8 G-3地区試掘 4TL 61

1 G-3地区試掘 4TL 60



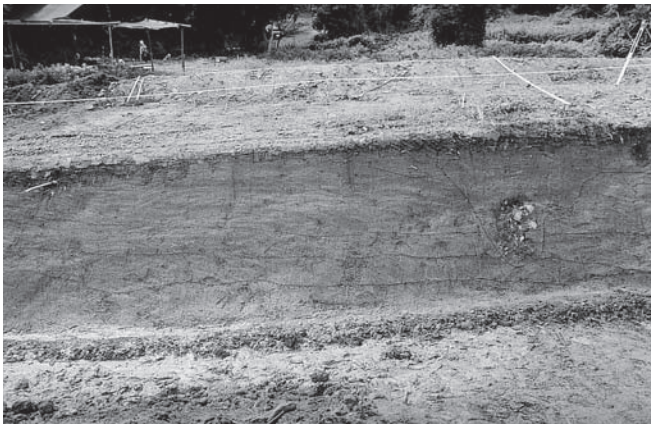
2 G-3地区試掘 6TL 63

3 G-3地区試掘 6TL 65

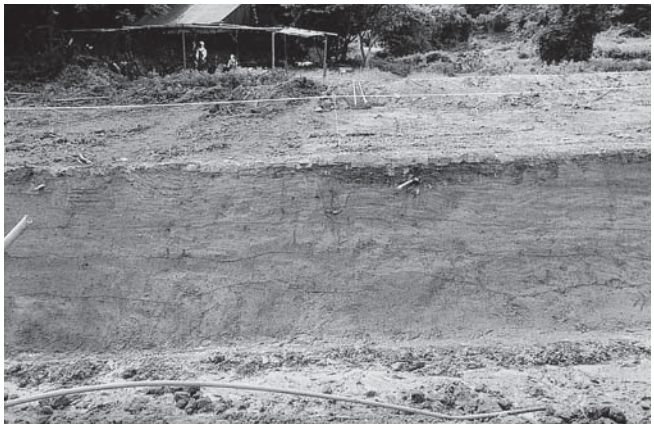
4 G-3地区試掘 6TL 64

5 G-3地区試掘 7TL 68

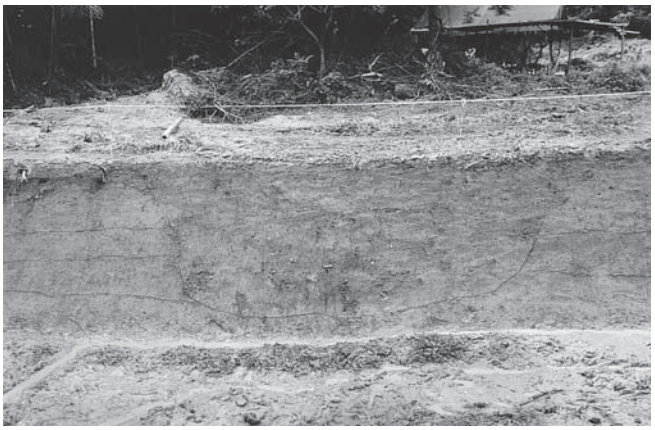
6 G-3地区試掘 7TL 69



7 G-3地区試掘 7TL 70



8 G-3地区試掘 7TL 71

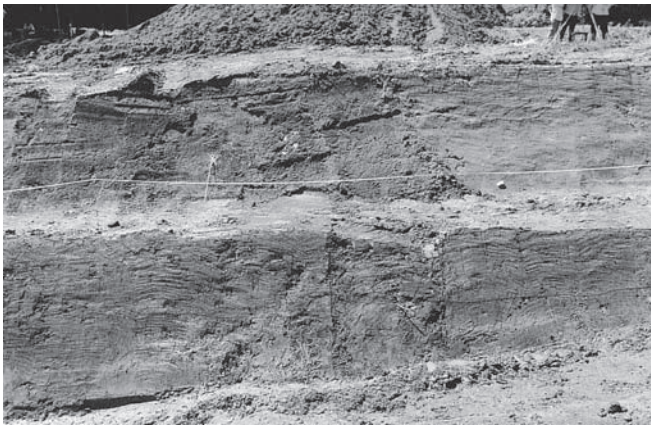


1 G-3地区試掘 7TL 73

2 G-3地区試掘 7TL 76

3 G-3地区試掘 7TL 75

4 G-3地区試掘 7TL 79



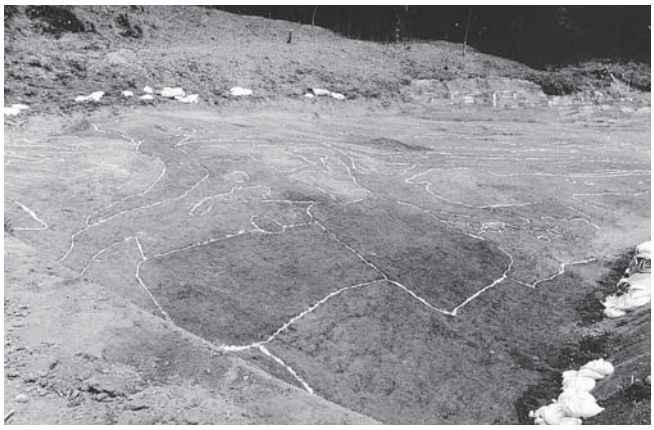
5 G-3地区試掘 7TL 78

6 G-3地区試掘 7TL 74

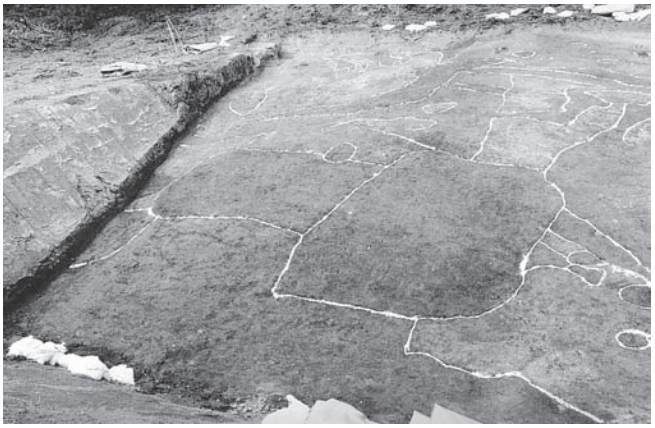
7 G-3地区試掘 7TL 80

8 G-3地区試掘 7TL 拡張区 150

1 G-3地区試掘 7TL 拡張区 135

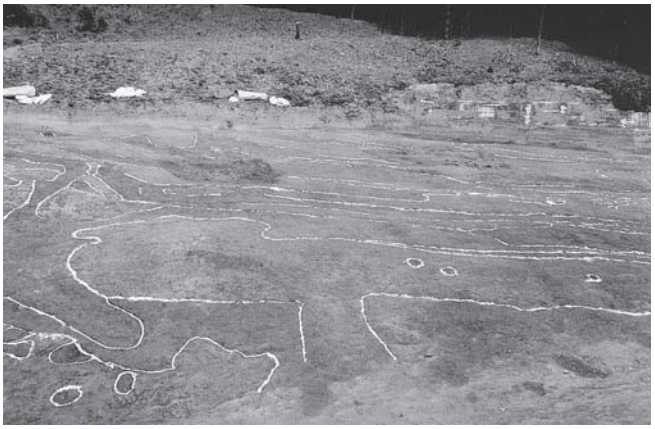


2 G-3地区試掘 7TL 拡張区 133



3 G-3地区試掘 7TL 拡張区 136

4 G-3地区試掘 7TL 拡張区 131



5 G-3地区試掘 7TL 拡張区 130

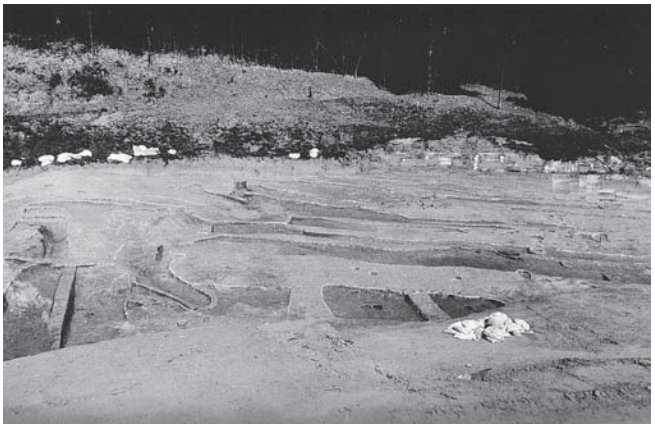
6 G-3地区試掘 7TL 拡張区 128

7 G-3地区試掘 7TL 拡張区 129

8 G-3地区試掘 7TL 拡張区 126

1 G-3地区試掘 7TL 拡張区 125

2 G-3地区試掘 7TL 拡張区 124



3 G-3地区試掘 7TL 拡張区 148

4 G-3地区試掘 7TL 拡張区 149

5 G-3地区試掘 7TL 拡張区 147

6 G-3地区試掘 8TL 84

7 G-3地区試掘 8TL 81

8 G-3地区試掘 9TL 85

1 G-3地区試掘 9TL 87

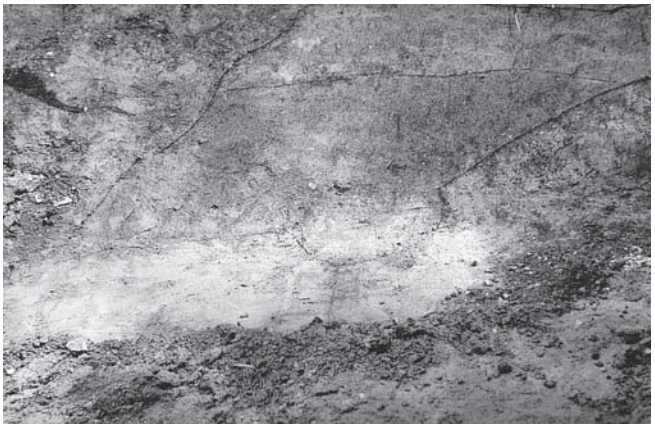
2 G-3地区試掘 9TL 88

3 G-3地区試掘 9TL 86

4 G-3地区試掘 10TL 97

5 G-3地区試掘 10TL 94

6 G-3地区試掘 10TL 92

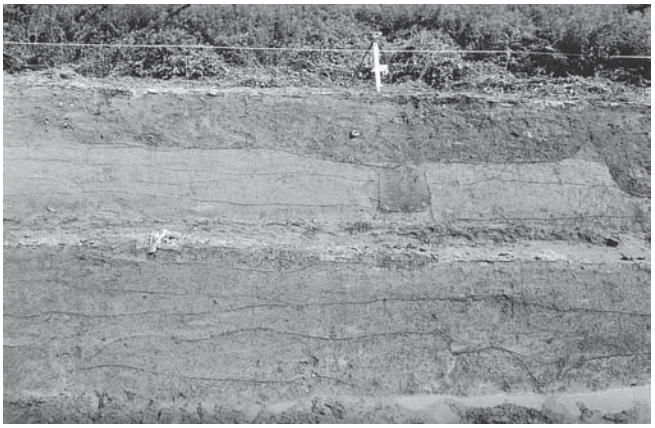


7 G-3地区試掘 10TL 91

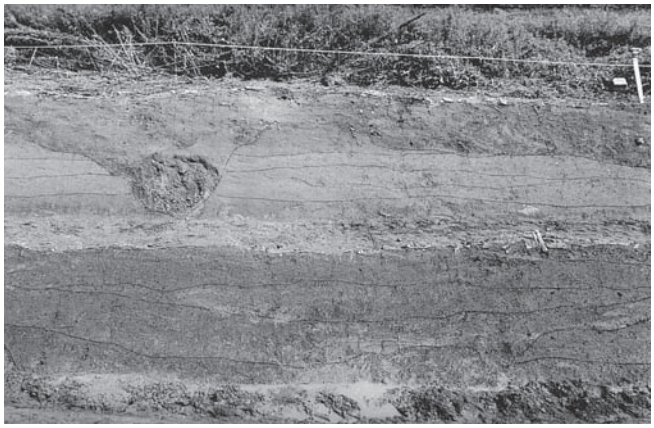
8 G-3地区試掘 10TL 100

1 G-3地区試掘 10TL 98

2 G-3地区試掘 11TL 101



3 G-3地区試掘 11TL 102



4 G-3地区試掘 11TL 103

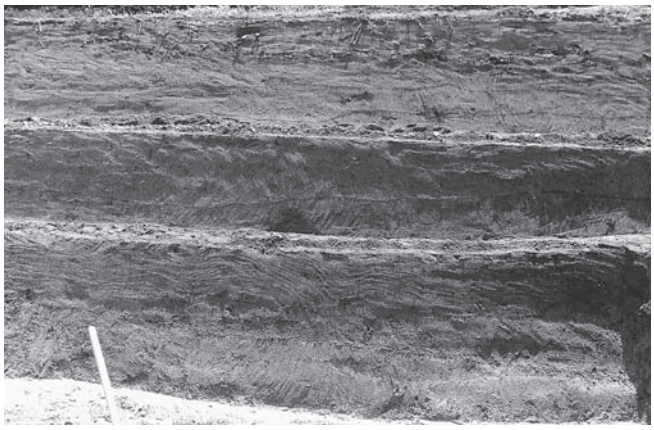
5 G-3地区試掘 11TL 105

6 G-3地区試掘 11TL 106

7 G-3地区試掘 11TL 107

8 G-3地区試掘 11TL 108

1 G-3地区試掘 12TL 112



2 G-3地区試掘 12TL 113

3 G-3地区試掘 12TL 拡張区 142

4 G-3地区試掘 12TL 拡張区 143

5 G-3地区試掘 12TL 117

6 G-3地区試掘 12TL 118

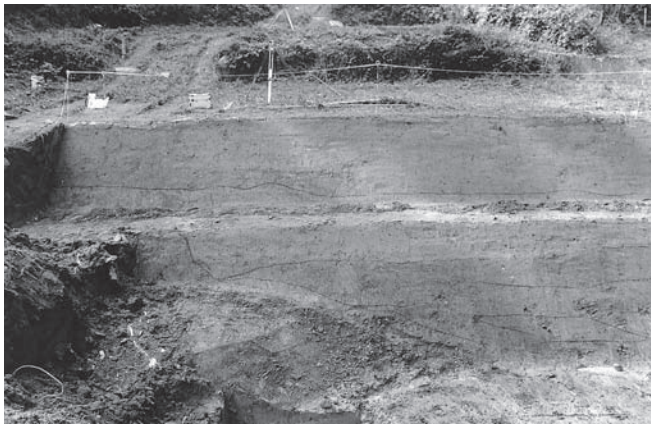
7 G-3地区試掘 12TL 115

8 G-3地区試掘 12TL 116

1 G-3地区試掘 13TL 119

2 G-3地区試掘 13TL 122

3 G-3地区試掘 13TL 121



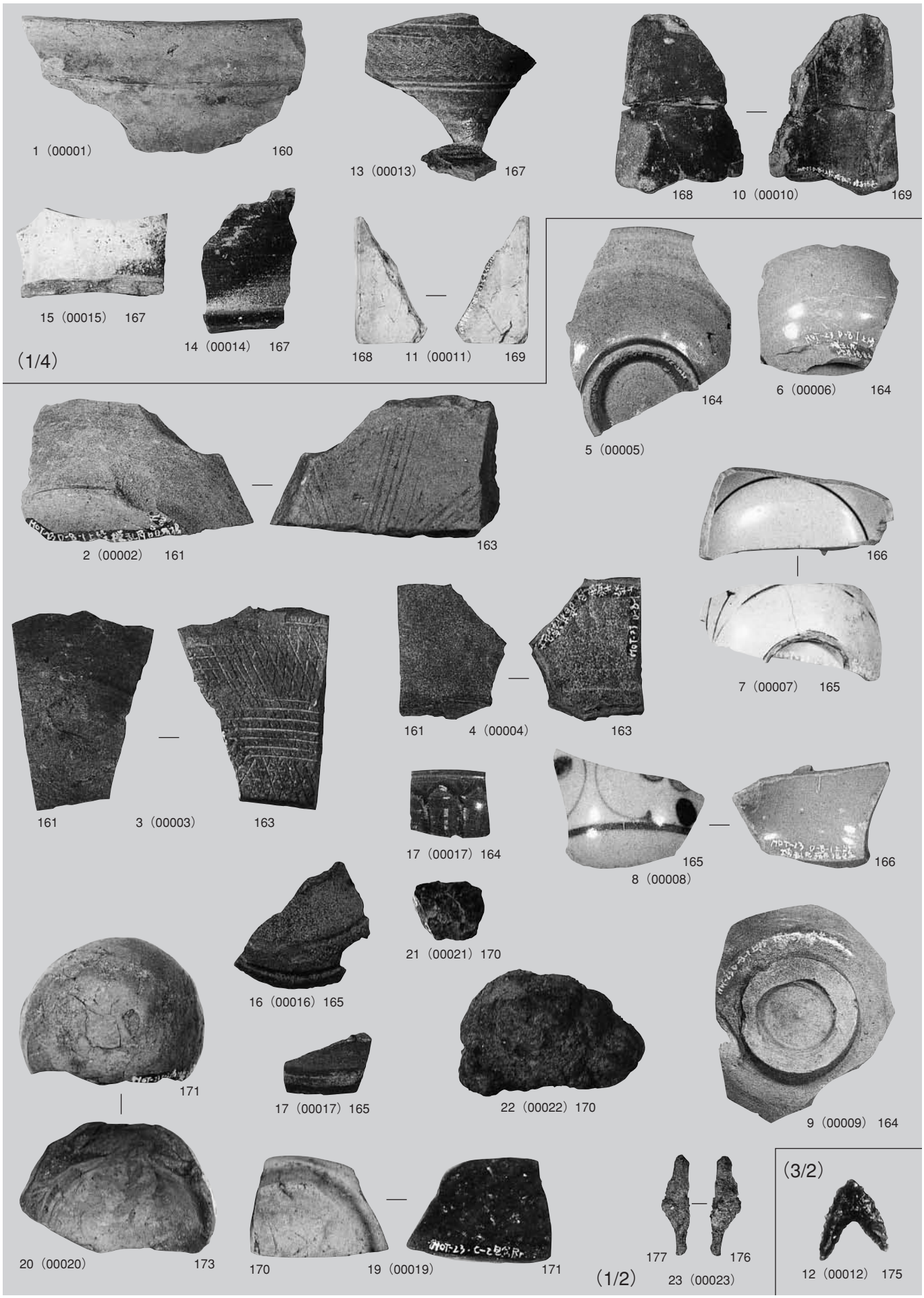
4 G-3地区試掘 13TL 120

5 G-3地区試掘 13TL 123

6 G-3地区試掘 14TL 137

7 G-3地区試掘 14TL 138

8 G-3地区試掘 14TL 140



3桁の数字は写真番号を示す
（　）内の5桁の数字は遺物登録番号を示す

23 次調査出土遺物

第 36 次 調 査　図　版

1 36次調査前全景（北から）

2 36次全景（北東から）

1 経塚古墳調査前遠景（北側水田から）

2 36次調査前全景（北東から）

3 経塚古墳調査前全景（北東から）

4 墳頂部立石（東から）

5 墳頂部　南側立石（西から）

6 墳頂部　北側立石（西から）

1 経塚古墳調査前（南西から）

2 経塚墳頂から今津方面

3 調査前葺石露出状況

4 Ⅳ区葺石遺存状況（西から）

5 地割り線C（北東から）

6 Ⅱ区葺石下段

1 経塚古墳全景（東から）

2 経塚古墳全景（東から）

3 墳頂部（東から）

4 経塚古墳墳頂部（北から）

5 墳頂部配石　東側部分（北から）

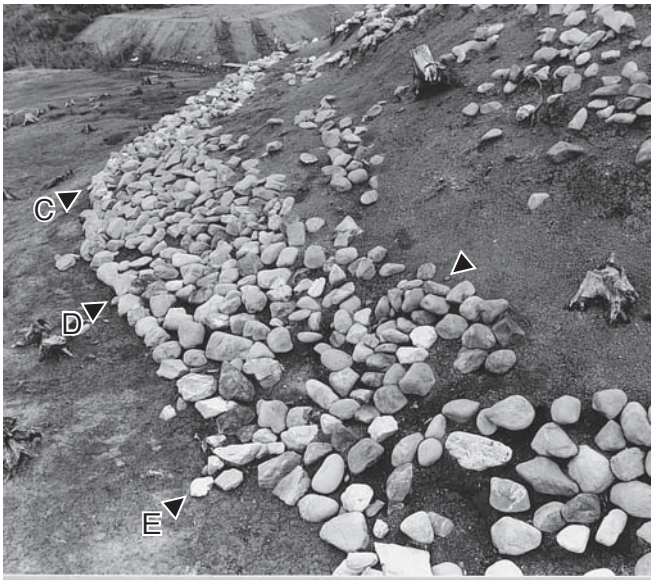
6 墳頂　中央部（北西から）

1 東側ベルト葺石出土状況（東から）

2 Ⅰ・Ⅱ区葺石出土状況（東から）

3 Ⅱ区葺石出土状況（北東から）

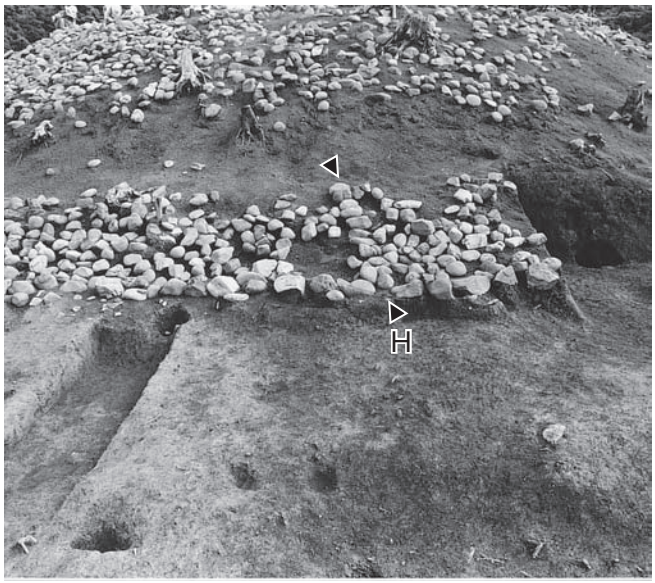
4 墳丘Ⅱ区南半葺石下段（東から）



5 墳丘Ⅱ区北半葺石下段（西から）

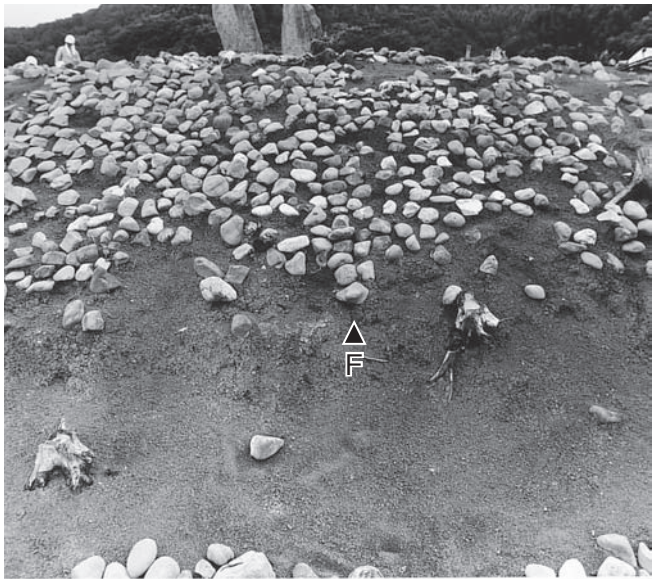
6 墳丘Ⅱ区北端葺石下段（東から）

1 墳丘Ⅱ区北側下段葺石（北東から）



2 墳丘北側葺石出土状況（北から）

3 経塚古墳　墳丘Ⅲ区葺石下段（北から）



4 Ⅱ区葺石上段（北東から）

5 SX002（西から）

6 SX001（東から）

1 SX003（西から）

2 SX004（南から）

3 SX005（西から）

4 SX006（南から）

5 SX007（南から）

6 SX008（南から）

7 SX009（南から）

8 SX010（北西から）

1 SX011（東から）

2 SX010・011（西から）

3 SX012（東から）

4 SX013（北から）

5 SX014・015（南から）

6 SX014（南から）

7 SX015（東から）

8 SX016（南東から）

1 SX019（西から）

2 SX018（奥）・017（前）（西から）

3 SX020（南から）

4 SX022（南東から）

5 SX021（東から）

1 SX023（東から）

2 SX024　北半（西から）

3 SX025（東から）

4 SX026（東から）

5 SX028・029・033（西から）

1 SX027（東から）

2 SX027　下部石組

3 SX030（北東から）

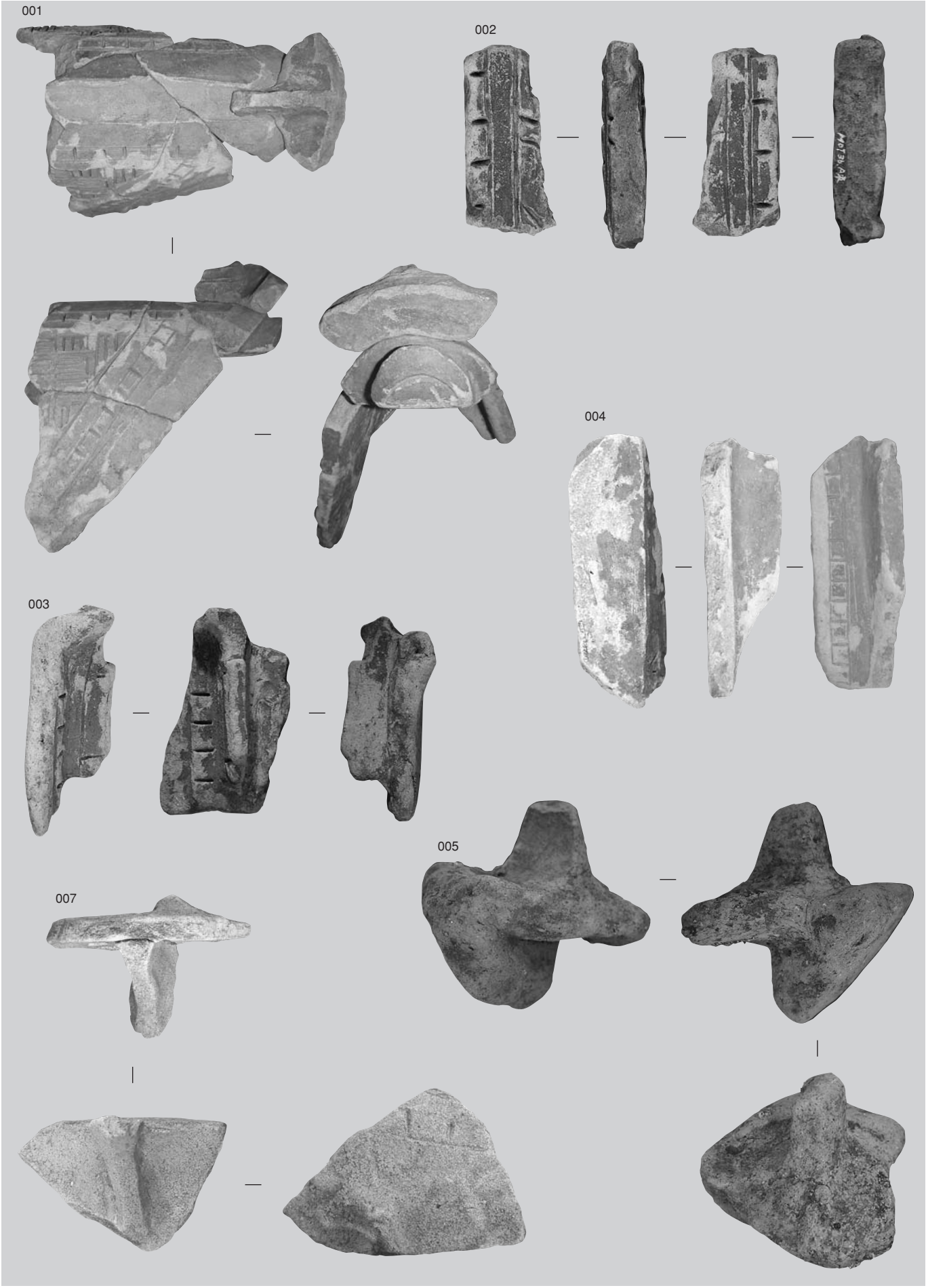
4 SX031（北から）

5 SX033（西から）

6 SX034（西から）

7 SX036（東から）

8 SX037（西から）



36 次出土家型埴輪

報告書抄録

ふりがな	もとおか・くわはらいせきぐんじゅういち
書名	元岡・桑原遺跡群11
副書名	九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書-第23・30・36次調査-
巻次	11
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1011集
編集者名	二宮忠司、屋山洋、大庭友子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	福岡市中央区天神1丁目8番1号TEL.092-711-4667
発行年月日	2008年3月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
元岡・桑原遺跡群第23・30・36次	福岡市西区大字桑原字戸山、宮草外、牛坂	404130		33°35′～33°36′	130°13′～130°14′	2000.06.10～2005.03.31	24,458㎡	九州大学統合移転に伴う調査及び試掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元岡・桑原遺跡群第23・30・36次	古墳 集落 伏焼土壙	古墳 奈良～中世	墳墓 奈良～中世 伏焼土壙他	須恵器・土師器 青白磁・陶器	墳墓調査 試掘調査

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告

元岡・桑原遺跡群11

—第23・30・36次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1011集

2008年（平成20年3月28日）

発行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1丁目10-15